

朝霞市男女平等に関する 市民意識調査結果報告書

平成27年3月

朝 霞 市

目次

I. 調査概要	1
1. 調査の目的	1
2. 調査の対象及び方法	1
3. 回収結果	1
4. 報告書の見方	1
5. 回答者の属性（性別・年齢等）	2
II. 調査結果概要	3
III. 調査結果	12
1. 地域や家庭での生活について	12
(1) 地域活動への参加状況	12
(2) 地域団体に女性リーダーが少ない理由	14
(3) 1週間の過ごし方	16
(4) 家庭での役割分担	19
2. 家庭等での男女のあり方について	23
(1) 「男は仕事、女は家庭」という考え方	23
(2) 「男は仕事、女は家庭」という考え方を肯定（または否定）する理由	28
(3) 男の子と女の子の育て方	39
(4) 子どもに望む人間像	41
(5) 家庭生活で優先すること	48
3. 配偶者等からの暴力について	56
(1) 配偶者等に暴力を加えた経験	56
(2) 配偶者等に暴力を加えた理由	60
(3) 配偶者等から暴力を受けた経験	62
(4) 暴力を受けた時の相談の有無	66
(5) 暴力を受けた時に相談した相手	69
(6) 暴力を受けた時に相談しなかった理由	75
(7) 暴力を受けた経験がない場合で、もし暴力を受けた場合に相談するか	81
4. 就業状況について	83
(1) 就業状況	83
(2) 就業している理由	85
(3) 職場における女性に対する不当な扱いの有無	89
(4) 職場における女性に対する不当な扱いの内容	91
(5) 就業していない方の就業意向	93
(6) 仕事に就く上で困っていること	95
(7) 女性の働き方（理想と現実）	97

(8) 男性の育児休業や介護休業の取得	103
(9) 男女が共に仕事と家庭を両立していくために必要な条件	107
(10) 職場・学校・地域での不愉快な経験	109
5. 男女共同参画社会について	115
(1) 男女共同参画・男女平等に関する言葉の周知状況	115
(2) 男女平等に関する動きへの関心	119
(3) 男女平等社会のイメージ	121
6. 市の男女平等施策について	129
(1) 男女平等を進めるための取組の周知度	129
(2) 市の政策への女性の意見等の反映	134
(3) 市の政策に女性の意見を反映するために必要なこと	136
(4) 男女平等社会の確立をめざして、市が力を入れるべきこと	138
7. 自由回答	140
IV. 資料	143

I. 調査概要

1. 調査の目的

この調査は、次期「朝霞市男女平等推進行動計画」（平成 28 年度から平成 37 年度までの 10 年間の計画）の策定や、今後の取組に向けた重要な基礎資料とするために実施するものです。

2. 調査の対象及び方法

- ①調査対象：2,000 人（住民基本台帳から 18 歳以上の朝霞市民を無作為抽出）
- ②調査方法：郵送による配布・回収
- ③調査期間：平成 26 年 8 月 20 日（水）～9 月 10 日（水）

3. 回収結果

- ①配布数：2,000 票
- ②回収数：714 票（有効票 713 票・白票 1 票）
- ③回収率：35.7%

4. 報告書の見方

- ・ 図表中の（n=*）は集計母数を表しています。
- ・ 回答の比率（%）は、各設問の回答者数を母数として算出しているため、複数回答の設問については、選択肢ごとの比率を合計すると 100%を超えることがあります。
- ・ 回答の比率（%）は、小数点以下第 2 位を四捨五入しているため、属性ごとの回答比率の合計が 100%にならないことがあります。
- ・ 性別・年齢別等の回答傾向を表すグラフについて、性別・年齢別等の無回答は除いています。
- ・ 本報告書では、以下のアンケートとの比較分析をしています。

 前回調査：「朝霞市男女平等に関する市民意識調査」（平成 22 年 6 月）

 内閣府調査：「男女共同参画社会に関する世論調査」（平成 24 年 10 月）

 埼玉県調査：「男女共同参画に関する意識・実態調査」（平成 24 年 9 月～10 月）

5. 回答者の属性（性別・年齢等）

①性別（問1）

性別は、「女性」が「男性」より、15.1ポイント多くなっています。

②年齢（問2）

年齢は、30歳代～70歳以上がそれぞれ15～20%と同程度で、一方、20歳代以下が10%未満となっています。

図1 性別

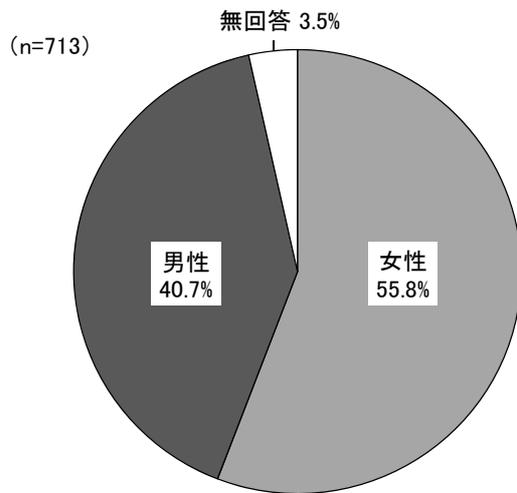
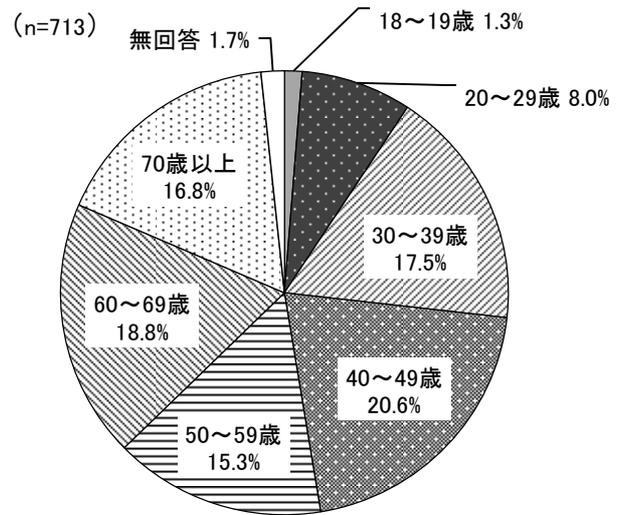


図2 年齢



③配偶者の有無（問3）

配偶者は、「いる」が73.5%で最も多く、「未婚」と「離別・死別」を合わせると、25.0%となっています。

④世帯構成（問4）

世帯構成は、「夫婦（事実婚も含む）と子ども」が41.8%で最も多く、次いで「夫婦（事実婚も含む）のみ」が26.6%となっています。

図3 配偶者の有無

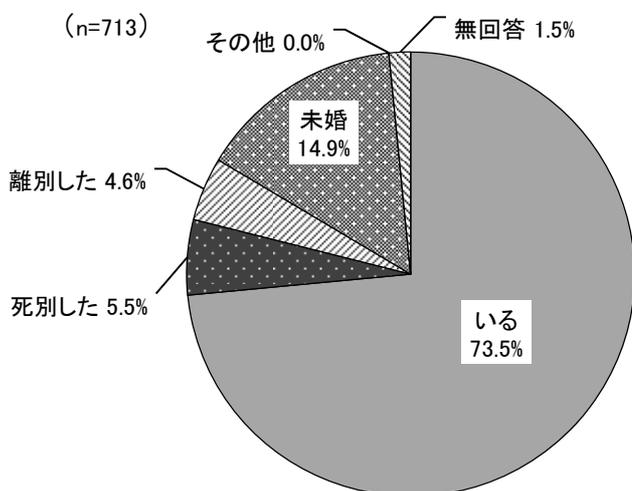
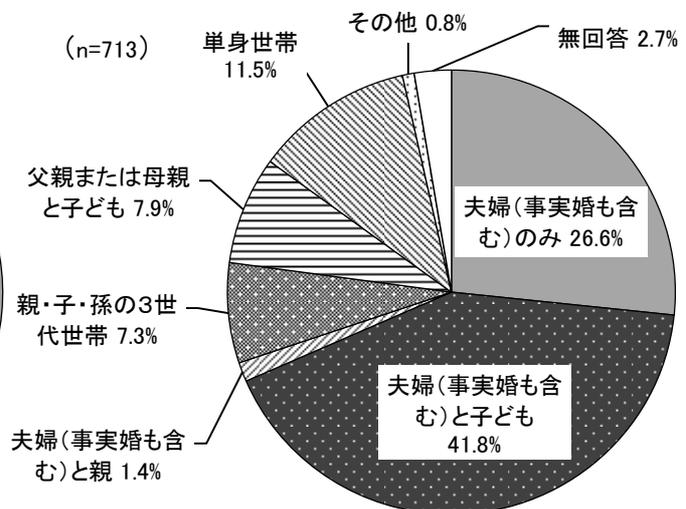


図4 世帯構成



Ⅱ. 調査結果概要

1. 地域や家庭での生活について

(1) 地域活動への参加状況（問5）【p.12～13 参照】

この1年間の地域活動への参加について、「いずれの活動にも参加しなかった」(49.2%)が半数近くを占めています。参加した地域活動としては、男女共に「自治会や町内会の活動」「趣味やスポーツのグループ活動」「PTAや子ども会の活動」が上位となっており、いずれの地域活動についても、女性は男性と比べ参加割合が高い傾向がみられます。

前回調査と比べると、「いずれの活動にも参加しなかった」が6.5ポイント減少しています。

(2) 地域団体に女性リーダーが少ない理由（問6）【p.14～15 参照】

地域団体に女性リーダーが少ない理由について、「女性は家事・育児が忙しく、地域活動に専念できないから」(50.4%)が半数を超え最も多く、次いで、「女性自身が責任ある地位に就きたがらないから」(45.0%)、「男性がリーダーとなるのが社会慣行だから」(28.3%)が上位となっています。

男女別にみて上位項目は同程度となっていますが、このほか女性は、「指導力のある女性が少ないから」(20.6%)、「女性では相手に軽く見られるから」(20.1%)、「女性のリーダーでは、男性がついてこないから」(19.8%)がそれぞれ男性と比べ5～10%程度多いという特徴がみられます。

(3) 1週間の過ごし方（問7）【p.16～18 参照】

1週間の過ごし方について、「趣味・交流などの楽しみ活動時間」は「10時間未満」(44.0%)、「地域社会づくり活動時間(自治会、ボランティアなど)」は「全くない」(67.3%)、「収入に直接つながらない労働時間(家事・育児など)」は「10時間未満」(24.3%)、「収入を得るための労働時間」は「全くない」(25.0%)がそれぞれ最も多くなっています。

男女別にみると、「収入に直接つながらない労働時間(家事・育児など)」について、女性は、10時間以上が60%を超えているのに対し、男性は、「全くない」と「10時間未満」の合計が60.0%となっています。一方、「収入を得るための労働時間」について、女性は「全くない」が32.7%となっているのに対し、男性は「40時間以上50時間未満」が25.2%で最も多く、「50時間以上」も30%程度に達しています。

(4) 家庭での役割分担（問8）【p.19～22 参照】

家庭での役割分担について、「そうじ」「洗濯」「食事のしたく」「食事の後かたづけ」「家計のやりくり」「日常の買い物」は、「主に自分」が担当するという回答が半数を超えています。中でも女性は70～80%程度が「主に自分」と答えています。また、「町内会や自治会の活動」や「乳幼児の世話」についても、女性は「主に自分」とする割合が男性より高

くなっています。一方、男性は、「生活費（年金を含む）の確保」や「高額の買い物(車、住宅等)、財産管理」について、「主に自分」と回答する割合が女性より高くなっており、家事や育児、地域活動への参加は女性が、生活費の確保や財産管理は男性が担っている場合が多いことが読み取れます。

前回調査と比べると、ほとんどの項目で「自分と配偶者が同じくらい」が増加する傾向がみられます。

2. 家庭等での男女のあり方について

(1) 「男は仕事、女は家庭」という考え方（問9）【p.23～27 参照】

「男は仕事、女は家庭」という考え方について、否定的な意見（35.5%）が肯定的な意見（31.2%）をやや上回っています。男女別にみると、女性は、否定的な意見が肯定的な意見を 11.1 ポイント上回っているのに対し、男性は、肯定的な意見が否定的な意見をやや上回っており、男女の意識の違いがみられます。

前回調査と比べると、否定的な意見が増加する傾向がみられます。

埼玉県及び内閣府の調査と比べると、朝霞市は全体・男女共に肯定的な意見が埼玉県を 10 ポイント以上上回っている一方、内閣府を 20 ポイント程度下回っています。

年齢別にみると、70 歳以上は、肯定的な意見（41.7%）が他の年代と比べ多く、また、30 歳代も、肯定的な意見（37.6%）が他の年代と比べ多くなっています。一方、10 歳代及び 20 歳代は、否定的な意見が 40～50%程度で、他の年代と比べ多くなっています。

配偶者の有無別にみると、未婚または離別した人は、否定的な意見が 40%程度で、他と比べ多くなっています。

(2) 「男は仕事、女は家庭」という考え方を肯定（または否定）する理由（問9-1）

【p.28～38 参照】

「男は仕事、女は家庭」という考え方を肯定する理由について、「それが自然だから」（32.3%）が最も多く、次いで「よい家庭づくりに必要だから」（24.2%）、「能力や適性に応じるべきだから」（18.8%）が上位となっています。

男女別にみると、女性は、「それが自然だから」が男性を 9.0 ポイント上回っています。一方、男性は、「能力や適性に応じるべきだから」が女性を 11.4 ポイント上回っています。

前回調査と比べると、「それが自然だから」は 7.0 ポイント増加する一方、「よい家庭づくりに必要だから」は 5.5 ポイント減少しています。

年齢別にみると、おおむね年齢が高いほど「それが自然だから」が多く、おおむね年齢が低いほど「よい家庭づくりに必要だから」「能力や適性に応じるべきだから」が多い傾向がみられます。

「男は仕事、女は家庭」という考え方を否定する理由について、「能力や適性に応じるべきだから」（42.3%）が最も多くなっています。

男女共に、「能力や適性に応じるべきだから」が最も多くなっており、女性は男性を 13.3 ポイント上回っています。

前回調査と比べると、「能力や適性に応じるべきだから」が 6.6 ポイント減少しています。

年齢別にみると、おおむね年齢が低いほど「能力や適性に応じるべきだから」が多くなります。

(3) 男の子と女の子の育て方（問10）【p.39～40 参照】

男の子と女の子の育て方について、「ある程度区別して育てる方がよい」（47.3%）が最も多く、区別して育てることに肯定的な意見は半数を超えて、否定的な意見（37.3%）を上回っています。

男女共に、肯定的な意見が多くなっており、特に男性は、肯定的な意見が 60.0%に達しています。

前回調査と比べると、否定的な意見が 5.7 ポイント増加しています。

年齢別にみると、30 歳代及び 40 歳代は、肯定的な意見が 60%程度を占めている一方、20 歳代及び 50 歳代以上は、否定的な意見が 40%を超え、他の年代と比べ多くなっています。

(4) 子どもに望む人間像（問11）【p.41～47 参照】

男の子に望む人間像について、「思いやりや気配りがある人」（63.0%）が最も多く、次いで「家庭・家族を大切にする人」（59.5%）、「幅広い知識や豊かな教養のある人」（31.8%）が上位となっています。

男女別にみて上位項目は同程度となっていますが、女性は「能力や個性を發揮できる人」が男性を 11.7 ポイント、男性は「礼儀正しい人」が女性を 8.1 ポイント上回っています。

年齢別にみると、「思いやりや気配りがある人」「家庭・家族を大切にする人」「礼儀正しい人」は、おおむね年齢が低いほど多い傾向がみられます。一方、「仕事に生きがいを感じる人」「社会の役に立つことをする人」「行動力がある人」は、おおむね年齢が高いほど多い傾向がみられます。

女の子に望む人間像について、「思いやりや気配りがある人」（83.0%）が最も多く、次いで「家庭・家族を大切にする人」（64.8%）、「礼儀正しい人」（43.5%）が上位となっています。

男女別にみて上位項目は同程度となっていますが、女性は「幅広い知識や豊かな教養のある人」や「能力や個性を發揮できる人」が男性を 5～6 ポイント程度、男性は「家庭・家族を大切にする人」が女性を 7 ポイント上回っています。

年齢別にみると、「思いやりや気配りがある人」「礼儀正しい人」「能力や個性を發揮できる人」は、おおむね年齢が低いほど多い傾向がみられます。

（５）家庭生活で優先すること（問１２）【p.48～55 参照】

現実として家庭生活で優先することについて、「仕事や自分の活動と家庭生活を同時に重視」が28.6%で最も多くなっています。男女別にみると、男女共に「同時に重視」が30%程度で、女性はこれに「どちらかといえば、仕事や自分の活動よりも家庭生活を優先」が続くのに対し、男性は「どちらかといえば、家庭生活よりも仕事や自分の活動を優先」と「仕事や趣味・ボランティアなど、自分の活動に専念」が多くなっています。

前回調査と比べると、「仕事や自分の活動を優先」が減少し、「自分の活動に専念」が増加する傾向がみられます。

埼玉県調査と比べると、朝霞市は全体・男女共に「自分の活動に専念」が多い傾向がみられ、特に男性は13.2ポイント上回っています。

年齢別にみると、年齢が高くなるにつれて、仕事や自分の活動から家庭生活へと優先することが変わっています。

続いて、希望として家庭生活で優先することについて、男女共に「仕事や自分の活動と家庭生活を同時に重視」が45%程度で最も多くなっています。

前回調査と比べると、「同時に重視」が減少し、「仕事や自分の活動を優先」や「自分の活動に専念」が増加する傾向がみられます。

埼玉県調査と比べると、朝霞市は全体・男女共に「同時に重視」が少ない一方、「自分の活動に専念」が多い傾向がみられ、特に女性は埼玉県を9.1ポイント上回っています。

年齢別にみると、いずれの年代も「同時に重視」が最も多くなっています。

このように現実でも希望としても、仕事や自分の活動を優先する人が増加していることが読み取れます。

3. 配偶者等からの暴力について

（１）配偶者等に暴力を加えた経験（問１３）【p.56～59 参照】

配偶者等に暴力を加えた経験について、男性は女性よりも配偶者等に暴力を加えた経験が多い傾向がみられます。多い順にみると、「何を言っても無視し続ける」「大声でどなり、すぐに暴力を振るう」「『誰のおかげで生活できるんだ』とか『かいしょうなし』とか言う」が上位となっています。

（２）配偶者等に暴力を加えた理由（問１３－１）【p.60～61 参照】

配偶者等に暴力を加えた理由について、「いらいらがつのり、ある出来事がきっかけで感情が爆発した」が最も多く、前回調査と比べ増加しています。また、女性は「相手が自分に対して危害を加えてきたので、身を守ろうと思った」が男性を9.1ポイント、男性は「特に理由はない」が女性を9.1ポイント上回っています。

（３）配偶者等から暴力を受けた経験（問１４）【p.62～65 参照】

配偶者等から暴力を受けた経験について、女性は男性よりも配偶者等から暴力を受けた経験が多い傾向がみられます。中でも女性は、「大声でどなられたり、すぐに暴力を振るわれる」が男性を 7.1 ポイント、「『誰のおかげで生活できるんだ』とか『かいしょうなし』とか言われる」が男性を 9.6 ポイント、「嫌がっているのに性的な行為を強要される」が男性を 8.6 ポイント上回っています。

（４）暴力を受けた時の相談の有無（問１４－１）【p.66～68 参照】

暴力を受けた時に、「相談した」は 21.2%にとどまり、「相談しようと思わなかった」が 58.2%を占めています。前回調査と比べると、特に女性は「相談した」が減少し、「相談しようと思わなかった」が増加しています。埼玉県の調査と比べると、朝霞市は全体・男女共に「相談した」が少ない傾向がみられます。

また、年齢別にみると、70 歳以上は「相談しようと思わなかった」が他の年代と比べて多くなっています。

（５）暴力を受けた時に相談した相手（問１４－２）【p.69～74 参照】

暴力を受けた時に相談した相手は、「家族・親せき」と「友人・知人」が共に 57.1%で最も多くなっています。前回調査と比べると、「家族・親せき」が減少し、「警察」「医師・カウンセラー」などが増加しています。また、「市役所窓口」「女性総合相談」に加え、平成 23 年 4 月に開始した「DV相談（朝霞市配偶者暴力相談支援センター）」の利用が新たにみられます。

（６）暴力を受けた時に相談しなかった理由（問１４－３）【p.75～80 参照】

暴力を受けた時に相談しなかった理由は、「相談するほどのことではないと思ったから」が 57.4%を占めます。前回調査と比べると、男性は、「自分さえ我慢すれば、このまま何とかやっていくことができると思ったから」と「誰（どこ）に相談してよいのかわからなかったから」がそれぞれ 10 ポイント以上増加しています。

（７）暴力を受けた経験がない場合で、もし暴力を受けた場合に相談するか（問１４－４）

【p.81～82 参照】

暴力を受けた経験がない場合で、もし暴力を受けた場合、「相談する」が 72.4%で最も多くなっています。一方、「相談するつもりはない」が 12.6%で、特に男性は「相談するつもりはない」が女性を 13.4 ポイント上回っています。前回調査と比べると、男性は「相談するつもりはない」が 10.8 ポイント減少しています。

また、年齢別にみると、60 歳代及び 70 歳以上は「相談するつもりはない」が 15%を超え、他の年代より多くなっています。

4. 就業状況について

(1) 就業状況（問15）【p.83～84 参照】

現在の就業の有無について、全体は「就業している」が67.5%で、このうち男性は78.6%で女性を17.5ポイント上回っています。

就業状況について、女性は「パート・アルバイト」(27.9%)が最も多く、次いで「正規の職員・従業員」「専業主婦・専業主夫」がそれぞれ20%程度となっています。一方、男性は「正規の職員・従業員」が半数近くを占めています。

(2) 就業している理由（問15-1）【p.85～88 参照】

就業している理由について、「生計を維持するため」が61.1%で最も多く、これを男女別にみると、女性は44.4%、男性は79.8%となっています。

(3) 職場における女性に対する不当な扱いの有無（問15-2）【p.89～90 参照】

職場において女性に対する不当な扱いがあると思う割合は13.5%で、これを男女別にみると、女性が男性より8.1ポイント上回っています。前回調査と比べると、男性は、「別にそのようなことはないと思う」が7.4ポイント増加しています。

(4) 職場における女性に対する不当な扱いの内容（問15-3）【p.91～92 参照】

職場における女性に対する不当な扱いの内容は、「昇進、昇格に男女差がある」(46.2%)、「賃金に男女差がある」(35.4%)、「能力を正當に評価しない」(32.3)%が上位となっています。前回調査と比べると、上位項目が減少する一方、「男性に比べて女性の採用が少ない」「女性を幹部職員に登用しない」が増加しています。

(5) 就業していない方の就業意向（問15-4）【p.93～94 参照】

就業していない方の就業意向について、「仕事に就きたいとは思わない」が34.6%、「できれば、仕事に就きたいと思う」と「仕事に就きたいと思う」の合計が44.1%となっています。前回調査と比べると、「仕事に就きたいと思う」が5.1ポイント減少しています。

また、年齢別にみると、おおむね年齢が低いほど「仕事に就きたいと思う」が多い傾向がみられます。

(6) 仕事に就く上で困っていること（問15-5）【p.95～96 参照】

仕事に就く上で困っていることについて、女性は「勤務時間、給料・賃金、雇用形態などの条件が自分の希望と合わないこと」が56.5%で最も多く、一方、男性は「自分の資格、能力、適性などに合った仕事の募集・採用が少ない(ない)こと」が42.9%で最も多くなっています。前回調査と比べると、「勤務時間、給料・賃金、雇用形態などの条件が自分の希望と合わないこと」や「自分の能力や技術に不安があること」が8～15ポイント程度増加しています。

(7) 女性の働き方（理想と現実）（問16）【p.97～102 参照】

理想での女性の働き方について、「子育ての時期だけ一時やめ、その後はフルタイムで仕事を続ける」「子育ての時期だけ一時やめ、その後はパートタイムで仕事を続ける」「結婚や出産にかかわらず、仕事を続ける」が20%程度で上位となっており、これらは前回調査と比べて増加する傾向がみられます。また、男女別にみると、女性は、「子育ての時期だけ一時やめ、その後はパートタイムで仕事を続ける」が男性を7.5ポイント上回っています。

埼玉県との調査と比べると、朝霞市は「子育ての時期だけ一時やめ、その後はパートタイムで仕事を続ける」が埼玉県より少ない傾向がみられる一方、「結婚や出産にかかわらず、仕事を続ける」と「子育ての時期だけ一時やめ、その後はフルタイムで仕事を続ける」が埼玉県より多い傾向がみられます。

現実での女性の働き方について、「子育ての時期だけ一時やめ、その後はパートタイムで仕事を続けている（いた）」が25.9%で最も多いほか、結婚や出産、育児を境として、仕事を続ける人、家事などに専念する人に分かれ、同程度となっています。

埼玉県との調査と比べて、回答傾向に大きな違いはみられず、「子育ての時期だけ一時やめ、その後はパートタイムで仕事を続けている（いた）」が最も多くなっています。

(8) 男性の育児休業や介護休業の取得（問17）【p.103～106 参照】

男性の育児休業の取得について、「積極的に取得した方がよい」と「どちらかといえば取得した方がよい」の合計は75%以上となっています。前回調査と比べると、特に男性は「積極的に取得した方がよい」が増加しています。

男性の介護休業の取得について、「積極的に取得した方がよい」と「どちらかといえば取得した方がよい」の合計は80.0%となっています。前回調査と比べると、特に男性は「積極的に取得した方がよい」が増加しています。

(9) 男女が共に仕事と家庭を両立していくために必要な条件（問18）

【p.107～108 参照】

男女が共に仕事と家庭を両立していくために必要な条件について、女性は「代替要員の確保など、育児休業・介護休業制度を利用できる職場環境をつくること」(39.2%)、男性は「男性が家事や育児を行う能力を高めること」(39.0%)が最も多くなっています。また、女性は「女性が働くことに対し、家族や周囲の理解と協力があること」や「在宅勤務やフレックスタイム制度など、柔軟な勤務制度を導入すること」が男性を上回っています。

(10) 職場・学校・地域での不愉快な経験（問19）【p.109～114 参照】

職場での不愉快な経験について、「特にない」が40.3%で最も多くなっています。男女別にみると、すべての項目について、女性は男性より多くなっており、中でも「異性に身体をさわられた」や「宴会でお酒やデュエットを強要された」は5～10ポイント程度上回っています。

学校での不愉快な経験について、「特にない」が 38.8%で最も多くなっています。不愉快な経験の内容としては、「容姿について傷つくようなことを言われた」や『女(男)のくせに』『女(男)だから』と差別的な言い方をされた」が多くなっています。

地域での不愉快な経験について、「特にない」が 41.9%で最も多くなっています。男女別にみると、すべての項目について、女性は男性より多くなっており、特に「帰宅途中などに後をつけられたり、つきまとわれたりした」は 6.8 ポイント上回っています。

5. 男女共同参画社会について

(1) 男女共同参画・男女平等に関する言葉の周知状況(問20)【p.115~118 参照】

男女共同参画・男女平等に関する言葉の周知状況について、「よく知っている」が多い順に、「セクシュアル・ハラスメント」(75.3%)、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律(DV防止法)」(45.3%)、「ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)」(25.5%)となっています。一方、「知らない」が多い順に、「性と生殖に関する健康と権利(リプロダクティブ・ヘルス/ライツ)」(74.6%)、「積極的格差是正措置(ポジティブ・アクション)」(64.7%)、「ジェンダー(社会的性別)」(41.4%)となっています。

男女別にみると、女性は、「積極的格差是正措置(ポジティブ・アクション)」と「ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)」を「知らない」が男性より多くなっています。一方、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律(DV防止法)」を「よく知っている」が男性より多くなっています。

前回調査と比べると、「積極的格差是正措置(ポジティブ・アクション)」を「知らない」が増加しています。

(2) 男女平等に関する動きへの関心(問21)【p.119~120 参照】

男女平等に関する動きへの関心について、関心を持っている人が 60%を超え、関心を持っていない人が 30%程度となっています。前回調査と比べると、男女共に関心を持っている人が増加する傾向がみられます。

(3) 男女平等社会のイメージ(問22)【p.121~128 参照】

現在の社会全般の男女平等社会のイメージについて、「学校教育」の中で男女の地位は平等であるという回答が半数を超えています。他の項目では、男女の地位は平等になっていないという回答が多くなっています。中でも「社会通念・慣習・しきたりなど」「政治の場」「職場」で男女の地位は平等になっていないという回答は 70%を超えており、これらは前回調査と比べて増加する傾向がみられます。男女別にみると、すべての項目について、女性は、男女の地位は平等になっていないという割合が男性を上回っています。

将来期待する男女平等社会のイメージについて、すべての項目で、男女の地位は平等になってほしいという回答が 80%程度に達しています。男女別にみると、すべての項目について、女性は、男女の地位は平等になってほしいという割合が男性を上回っています。

6. 市の男女平等施策について

(1) 男女平等を進めるための取組の周知度（問23）【p.129～133 参照】

男女平等を進めるための取組の周知度について、「知っているものはない」が41.0%で最も多くなっています。知っているものとしては、「DV相談（配偶者暴力相談支援センター）」（33.4%）、「朝霞市女性センター（それいゆぷらざ）」（24.1%）、「男女平等推進情報紙『そよかぜ』」（13.9%）が上位となっており、これらについて女性は男性より知っている割合が高くなっています。

年齢別にみると、年齢が低いほど「知っているものはない」が多くなっています。知っているものについて、30歳代及び40歳代は「DV相談（配偶者暴力相談支援センター）」が他の年代と比べ多く、また、年代が高いほど「朝霞市女性センター（それいゆぷらざ）」や「男女平等推進情報紙『そよかぜ』」を知っている割合が多くなっています。

(2) 市の政策への女性の意見等の反映（問24）【p.134～135 参照】

市の政策への女性の意見等の反映について、「どちらともいえない」（39.6%）が最も多く、「十分反映されている」と「ある程度反映されている」の合計（24.9%）と「ほとんど反映されていない」と「あまり反映されていない」の合計（22.8%）が同程度となっています。男女別にみると、女性は「反映されていない」、男性は「反映されている」が多くなっています。

(3) 市の政策に女性の意見を反映するために必要なこと（問25）【p.136～137 参照】

市の政策に女性の意見を反映するために必要なことについて、「気軽な意見提案の方法の周知・活用を図る(市への意見・要望等)」と「女性自らが市の政策に参画する意欲を持つ」（共に27.5%）、「女性の意見を政策に反映することの大切さを広く啓発する」（25.2%）が上位となっています。男女別にみると、男性は「女性の意見を政策に反映することの大切さを広く啓発する」が女性を7.2ポイント上回っています。

(4) 男女平等社会の確立をめざして、市が力を入れるべきこと（問26）

【p.138～139 参照】

男女平等社会の確立をめざして、市が力を入れるべきことについて、「保育や高齢者対策等の福祉の充実」（47.5%）が最も多く、次いで「子育てや家事など家庭における男女共同参画の促進」（40.8%）、「学校教育における男女平等教育の推進」（38.1%）が上位となっています。男女別にみると、女性は「保育や高齢者対策等の福祉の充実」が男性を16.6ポイント、「子育てや家事など家庭における男女共同参画の促進」が男性を7.6ポイント上回っています。一方、男性は「政策等の立案・決定への男女共同参画の推進」が女性を12.2ポイント上回っています。

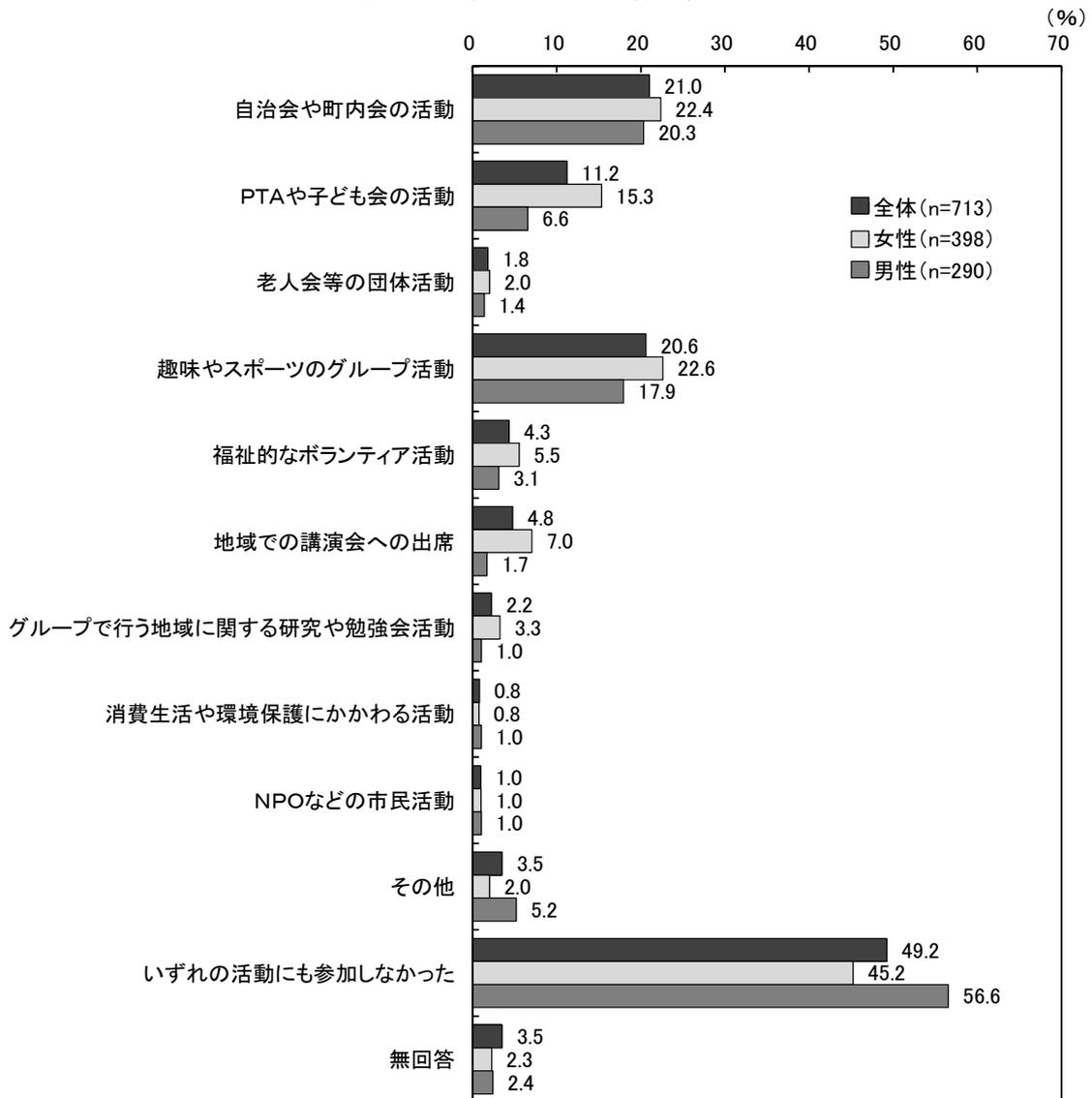
Ⅲ. 調査結果

1. 地域や家庭での生活について

(1) 地域活動への参加状況

問5 あなたはこの1年間に、どのような地域活動に参加しましたか。
 (あてはまる番号すべてに○)

図 5 地域活動への参加状況 (全体・男女別)



■全体の回答傾向

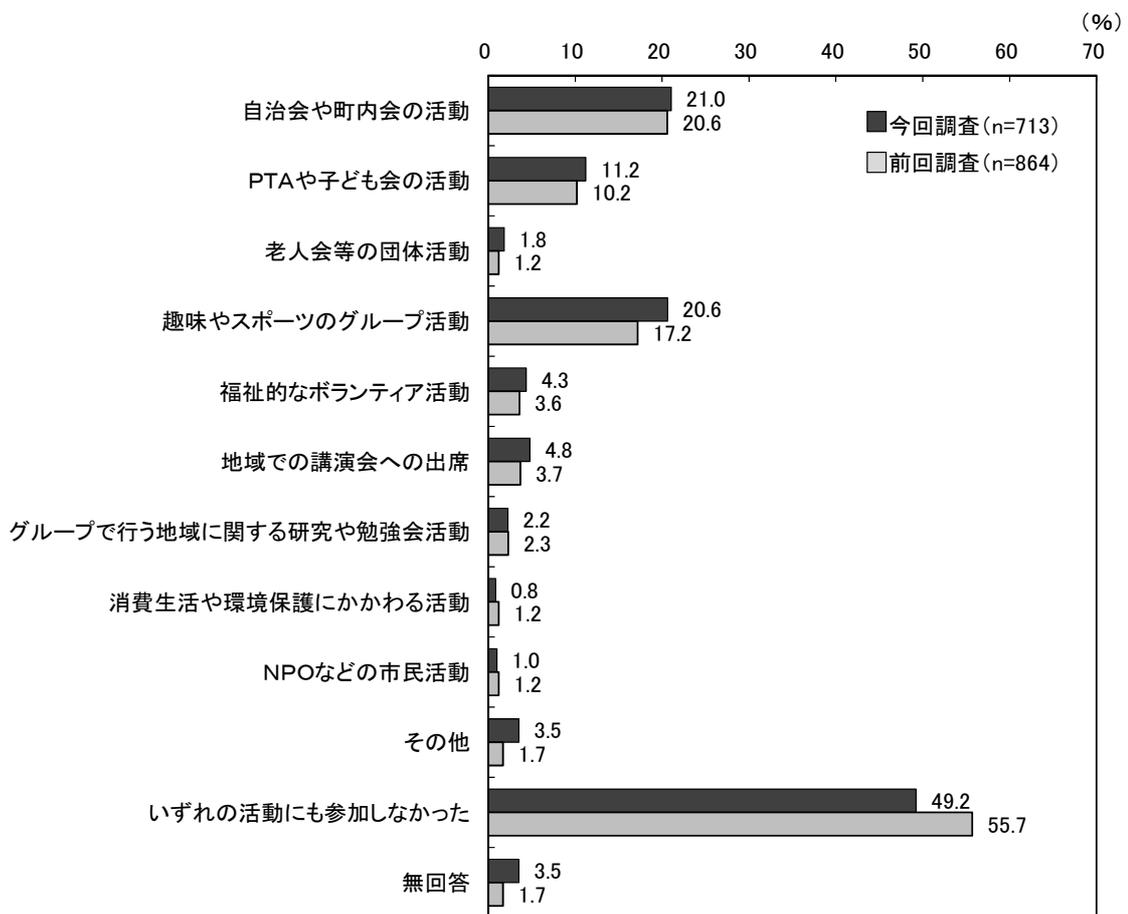
この1年間の地域活動への参加について、「いずれの活動にも参加しなかった」が49.2%で半数近くを占めています。一方、参加した地域活動としては、「自治会や町内会の活動」が21.0%、「趣味やスポーツのグループ活動」が20.6%で上位となっており、次いで「PTAや子ども会の活動」が11.2%となっています。

■男女別の回答傾向

男女別にみると、上位項目の回答傾向は同様で、女性は「趣味やスポーツのグループ活動」(22.6%)、「自治会や町内会の活動」(22.4%)、「PTA や子ども会の活動」(15.3%)のいずれの地域活動についても、男性と比べ参加割合が高い傾向がみられます。

一方、男性は「自治会や町内会の活動」(20.3%)が唯一20%を超え最も多くなっていますが、「いずれの活動にも参加しなかった」が56.6%で半数を超え、女性を11.4ポイント上回っており、女性と比べ地域活動に参加しなかった人が多くなっています。

図 6 地域活動への参加状況（前回調査との比較）



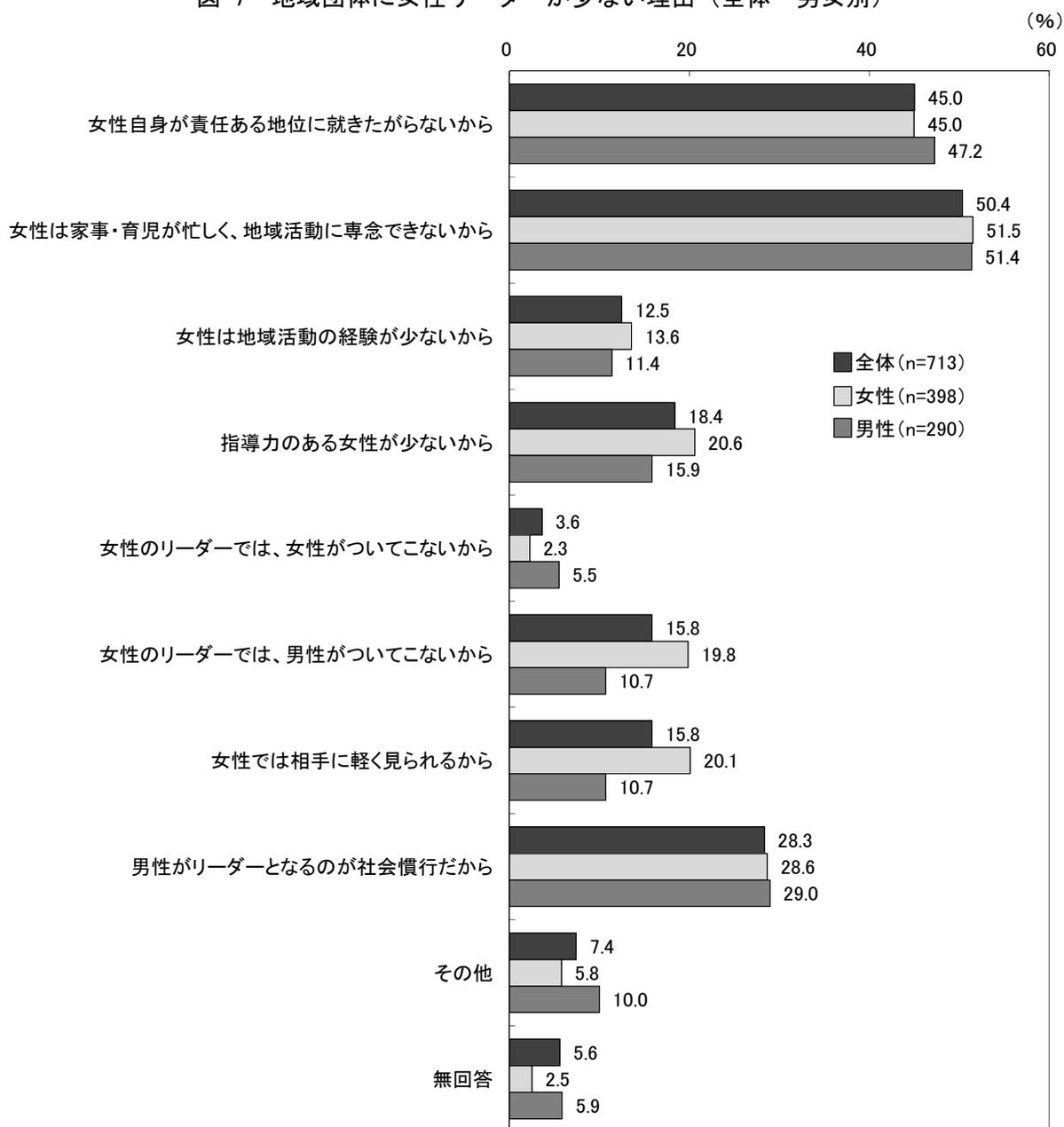
■前回調査（平成 22 年度）との比較

前回調査と比べると、「いずれの活動にも参加しなかった」が55.7%から49.2%と6.5ポイント減少しています。一方、参加した地域活動について、回答傾向に大きな違いはみられません。

(2) 地域団体に女性リーダーが少ない理由

問6 自治会、PTA などの地域団体では、活動の主体が女性となっても、会長・副会長などリーダーには女性が少ないようです。(参考：平成 26 年 4 月 1 日現在、朝霞市の自治会長の女性比率は 16.9%です。)その主な原因は何だと思いますか。(あてはまる番号3つまでに○)

図 7 地域団体に女性リーダーが少ない理由 (全体・男女別)

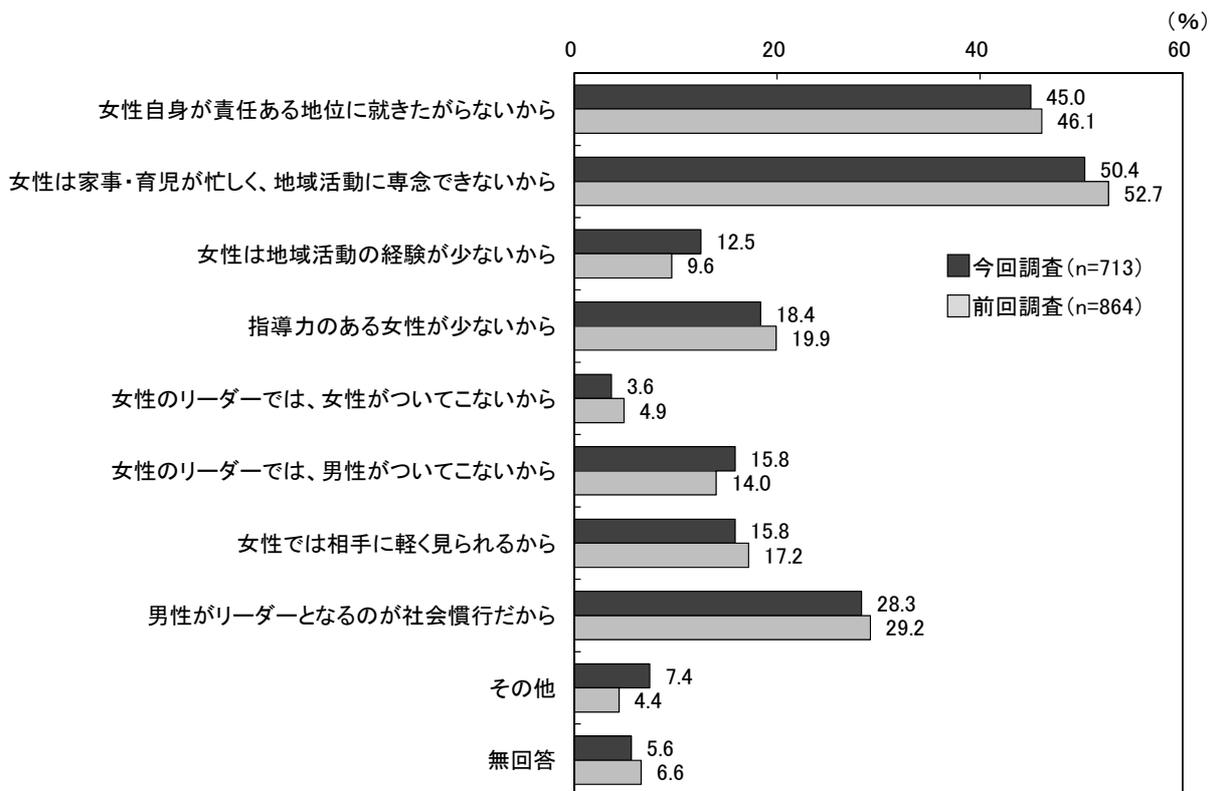


地域団体に女性リーダーが少ない理由について、「女性は家事・育児が忙しく、地域活動に専念できないから」が 50.4%と半数を超え最も多く、次いで、「女性自身が責任ある地位に就きたがらないから」が 45.0%、「男性がリーダーとなるのが社会慣行だから」が 28.3%で上位となっています。

■男女別の回答傾向

男女別にみて、上位項目の回答傾向に大きな違いはみられませんが、第4位以下の項目をみると、女性は、「指導力のある女性が少ないから」(20.6%)、「女性では相手に軽く見られるから」(20.1%)、「女性のリーダーでは、男性がついてこないから」(19.8%)がそれぞれ男性と比べ5~10%程度多いという特徴がみられます。

図8 地域団体に女性リーダーが少ない理由（前回調査との比較）



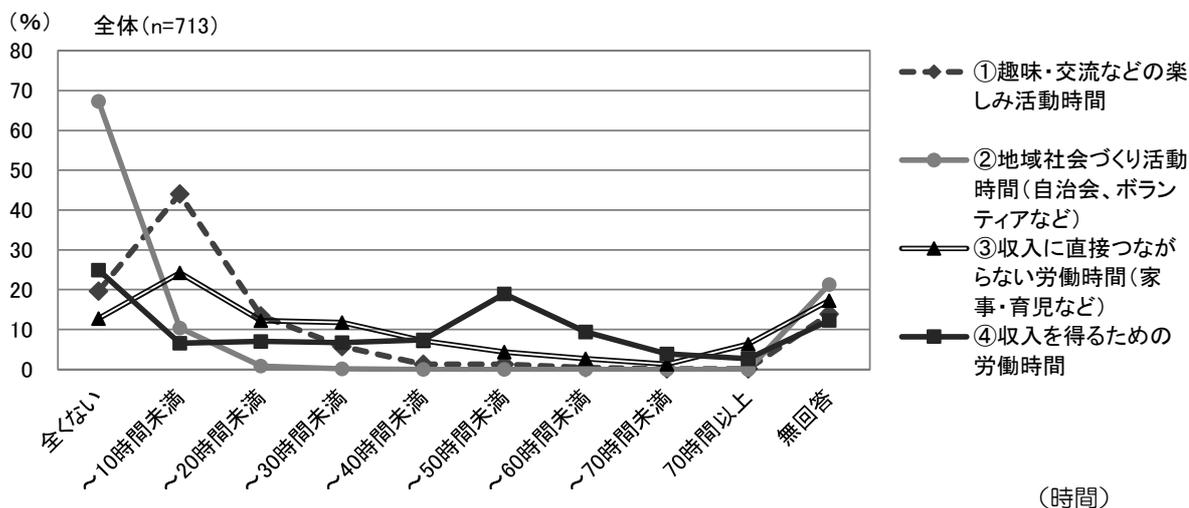
■前回調査（平成22年度）との比較

前回調査と比べて回答傾向に大きな違いはみられません。

(3) 1週間の過ごし方

問7 あなたはこの1週間で、次のようなことに何時間かけましたか。おおまかな合計時間を記入してください。(全くない場合は「0」を記入してください。)

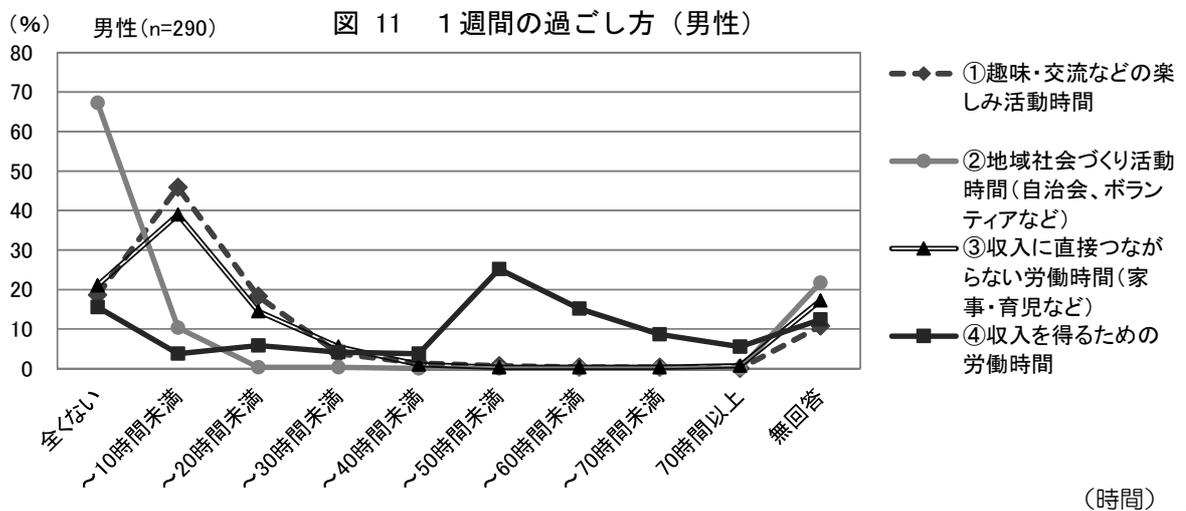
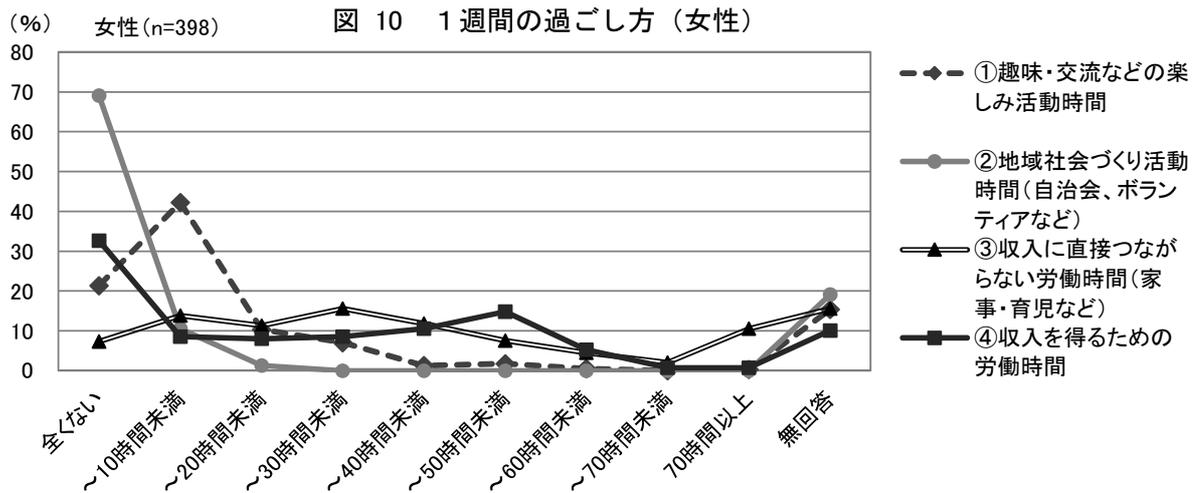
図9 1週間の過ごし方(全体)



	全くない	〓 10時間未満	〓 20時間未満	〓 30時間未満	〓 40時間未満	〓 50時間未満	〓 60時間未満	〓 70時間未満	70時間以上	無回答
①趣味・交流などの楽しみ活動時間	19.6	44.0	13.5	5.8	1.3	1.3	0.4	0.1	0.1	13.9
②地域社会づくり活動時間(自治会、ボランティアなど)	67.3	10.4	0.8	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	21.3
③収入に直接つながらない労働時間(家事・育児など)	12.8	24.3	12.2	11.8	7.2	4.3	2.7	1.3	6.3	17.3
④収入を得るための労働時間	25.0	6.6	7.0	6.7	7.4	18.9	9.4	3.9	2.7	12.3

■全体の回答傾向

1週間の過ごし方について、「①趣味・交流などの楽しみ活動時間」は、「10時間未満」が44.0%で最も多く、他の項目と比べ10~40ポイント程度多くなっています。また、「②地域社会づくり活動時間(自治会、ボランティアなど)」は、「全くない」が67.3%で最も多く、他の項目と比べ40~50ポイント程度多くなっています。「③収入に直接つながらない労働時間(家事・育児など)」は、「10時間未満」が24.3%、「④収入を得るための労働時間」は、「全くない」が25.0%で最も多くなっています。



(時間)

		全くない	〽10時間未満	〽20時間未満	〽30時間未満	〽40時間未満	〽50時間未満	〽60時間未満	〽70時間未満	70時間以上	無回答
①趣味・交流などの楽しみ活動時間	女性	21.4	42.2	10.3	7.0	1.3	1.8	0.5	0.0	0.3	15.3
	男性	18.6	45.9	18.3	3.8	1.4	0.7	0.3	0.3	0.0	10.7
②地域社会づくり活動時間(自治会、ボランティアなど)	女性	69.1	10.6	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	19.1
	男性	67.2	10.3	0.3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	21.7
③収入に直接つながらない労働時間(家事・育児など)	女性	7.3	13.8	11.3	15.6	11.8	7.5	4.5	2.0	10.6	15.6
	男性	21.0	39.0	14.5	5.5	1.0	0.3	0.3	0.3	0.7	17.2
④収入を得るための労働時間	女性	32.7	8.5	8.0	8.5	10.6	14.8	5.3	0.8	0.8	10.1
	男性	15.5	3.8	5.9	4.1	3.8	25.2	15.2	8.6	5.5	12.4

注：女性＝女性（n=398）、男性＝男性（n=290）を指す。

■男女別の回答傾向

男女別にて、「①趣味・交流などの楽しみ活動時間」と「②地域社会づくり活動時間（自治会、ボランティアなど）」の回答傾向に大きな違いはみられませんが、「③収入に直接つながらない労働時間（家事・育児など）」について、女性は、10 時間以上（「20 時間未満」以上の合計）が 60%を超えているのに対し、男性は、「全くない」と「10 時間未満」の合計が 60.0%となっています。一方、「④収入を得るための労働時間」について、女性は「全くない」が 32.7%となっているのに対し、男性は「40 時間以上 50 時間未満」が 25.2%で最も多く、「50 時間以上」も 30%程度に達しています。

図 12 1 週間の過ごし方（前回調査との比較）

（時間）

		全くない	〓 10 時間 未満	〓 20 時間 未満	〓 30 時間 未満	〓 40 時間 未満	〓 50 時間 未満	〓 60 時間 未満	〓 70 時間 未満	70 時間 以上	無 回 答
①趣味・交流などの楽しみ活動時間	今回	19.6	44.0	13.5	5.8	1.3	1.3	0.4	0.1	0.1	13.9
	前回	16.4	44.1	15.4	5.8	1.9	0.9	0.2	0.1	0.1	-
②地域社会づくり活動時間（自治会、ボランティアなど）	今回	67.3	10.4	0.8	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	21.3
	前回	67.0	8.6	0.7	0.2	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	-
③収入に直接つながらない労働時間（家事・育児など）	今回	12.8	24.3	12.2	11.8	7.2	4.3	2.7	1.3	6.3	17.3
	前回	14.8	24.0	12.2	8.2	6.9	4.7	3.2	0.9	5.6	-
④収入を得るための労働時間	今回	25.0	6.6	7.0	6.7	7.4	18.9	9.4	3.9	2.7	12.3
	前回	22.7	5.0	5.8	7.4	8.4	20.7	9.0	3.7	2.9	-

注：「-」は回答不明を表す。

今回＝今回調査（n=713）、前回＝前回調査（n=864）を指す。

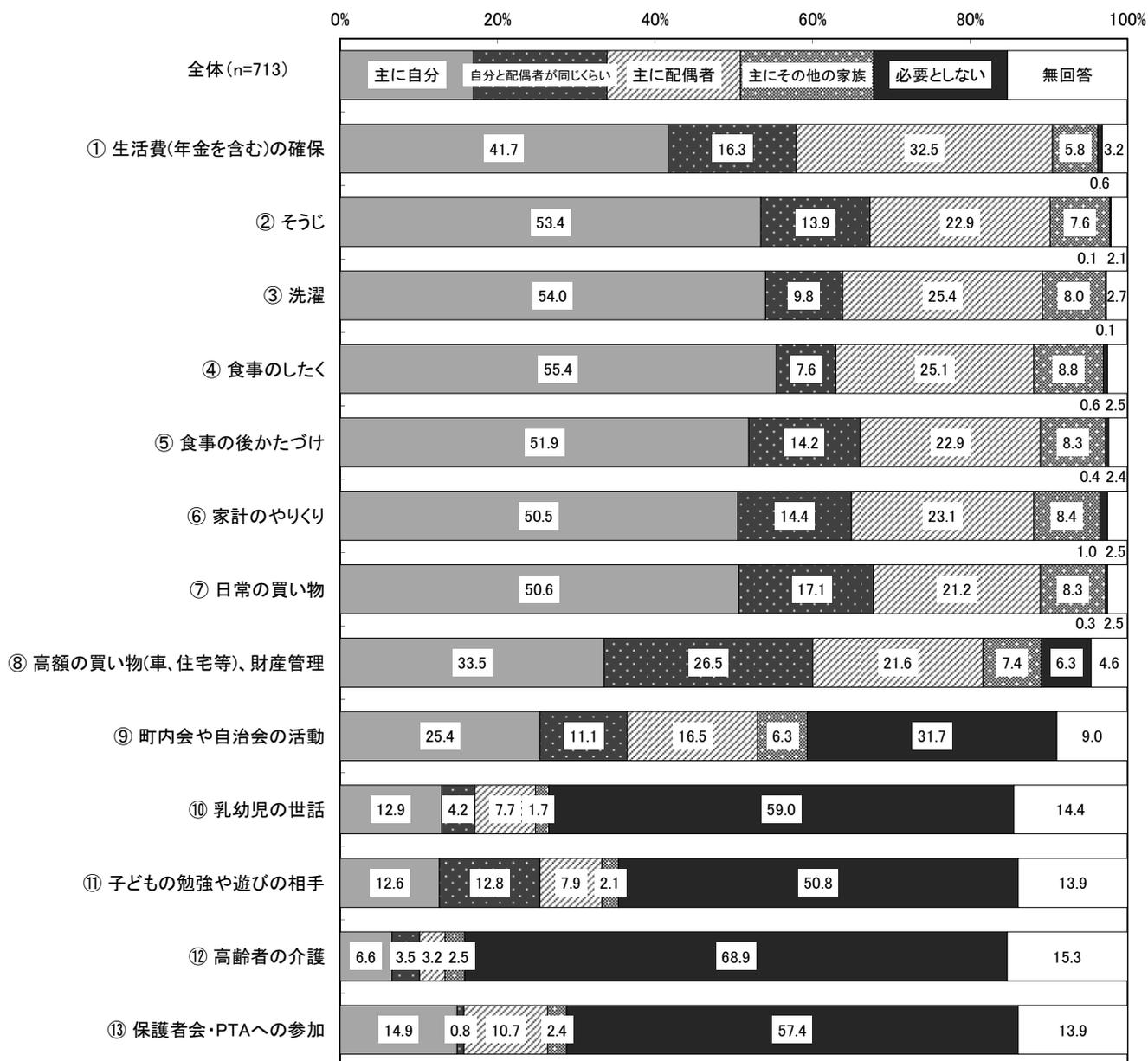
■前回調査（平成 22 年度）との比較

前回調査と比べて回答傾向に大きな違いはみられません。

(4) 家庭での役割分担

問8 あなたのご家庭では、次のことは主にどなたが担当されていますか。
(それぞれ、あてはまる番号1つだけに○)

図 13 家庭での役割分担 (全体)



■全体の回答傾向

家庭での役割分担について、「主に自分」が担当するという回答が半数を超えているのは、「②そうじ」「③洗濯」「④食事のしたく」「⑤食事の後かたづけ」「⑥家計のやりくり」「⑦日常の買い物」となっています。このほか、「必要としない」という回答が半数を超えているのは、「⑩乳幼児の世話」「⑪子どもの勉強や遊びの相手」「⑫高齢者の介護」「⑬保護者会・PTAへの参加」となっています。

図 14 家庭での役割分担（女性）

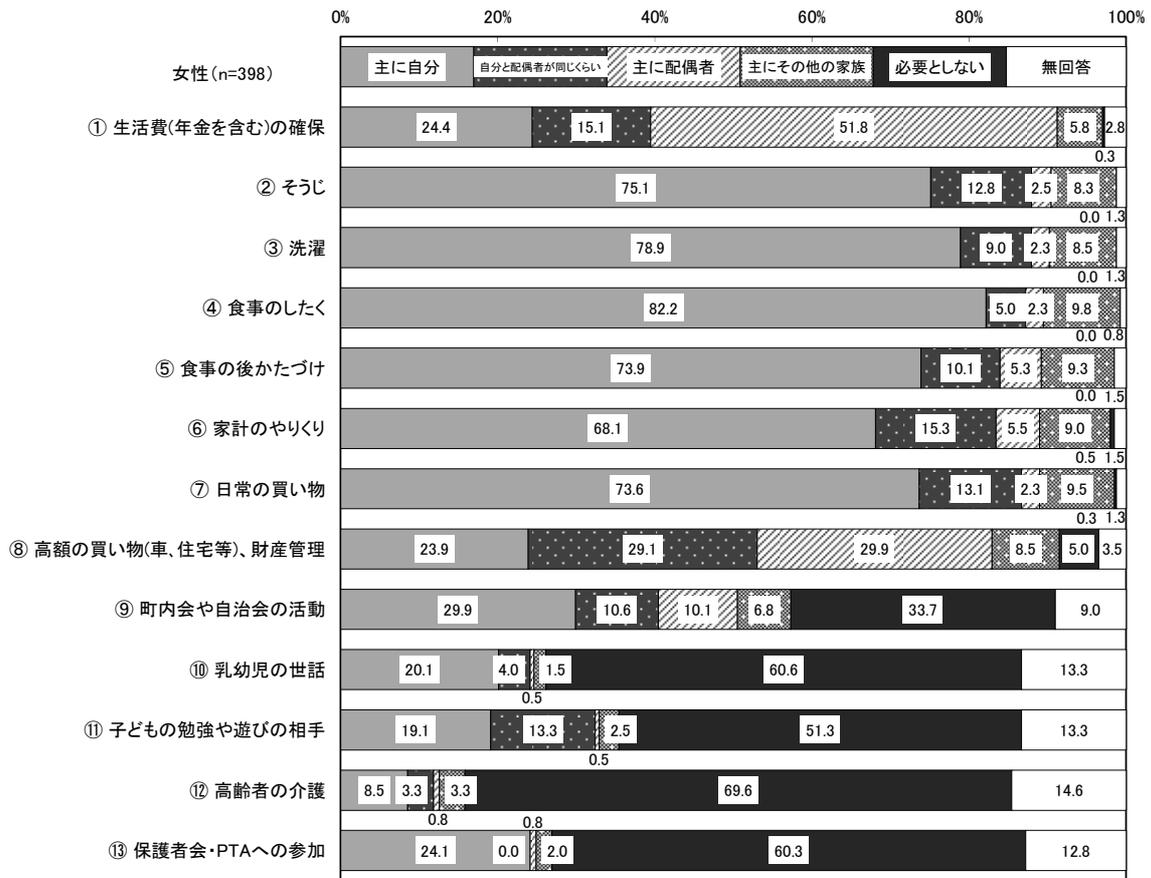
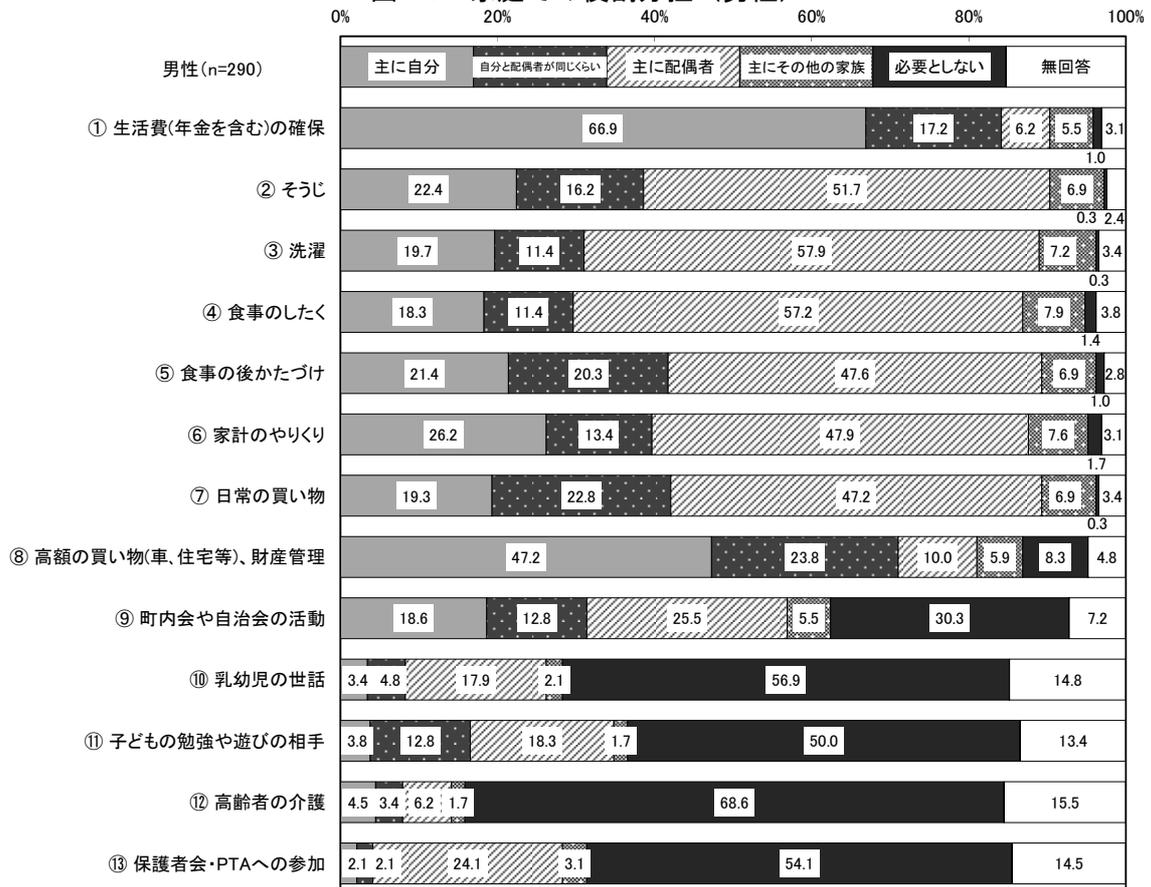


図 15 家庭での役割分担（男性）



■男女別の回答傾向

男女別にみると、「①生活費（年金を含む）の確保」について、女性は「主に配偶者」が51.8%、男性は「主に自分」が66.9%となっています。

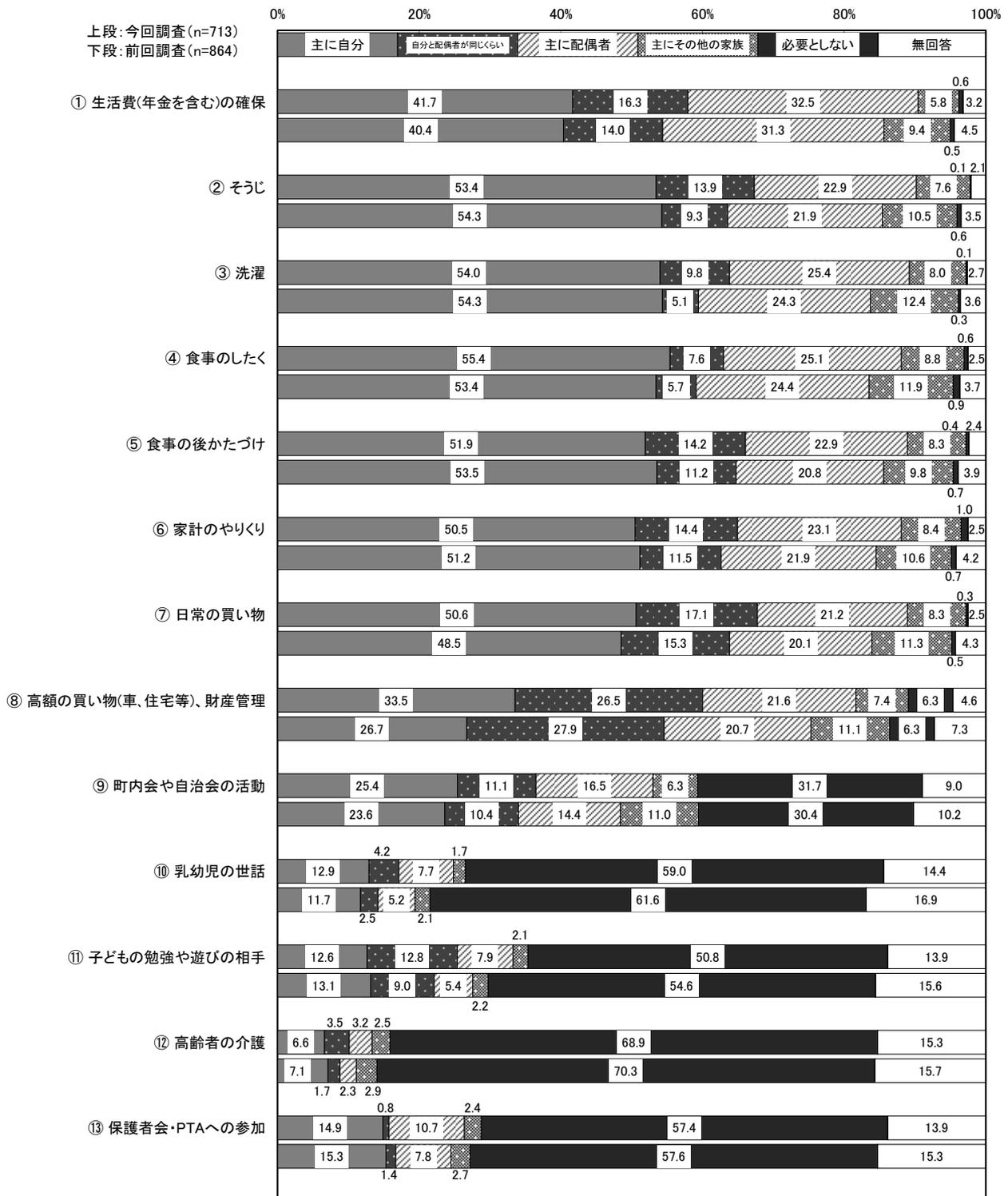
「②そうじ」「③洗濯」「④食事のしたく」「⑤食事の後かたづけ」「⑥家計のやりくり」「⑦日常の買い物」について、女性は「主に自分」が70~80%程度であるのに対し、男性は「主に配偶者」が50%程度となっています。

「⑧高額の買い物(車、住宅等)、財産管理」について、女性は「主に配偶者」と「自分と配偶者が同じくらい」が29%を超えて同程度、男性は「主に自分」が47.2%となっています。

「⑨町内会や自治会の活動」について、男女共に「必要としない」が30%を超えて最も多くなっていますが、女性は「主に自分」が29.9%で男性（18.6%）より多くなっています。

「⑩乳幼児の世話」「⑪子どもの勉強や遊びの相手」「⑫高齢者の介護」「⑬保護者会・PTAへの参加」について、男女共に「必要としない」が50~70%程度で最も多くなっていますが、女性は「主に自分」とする割合が男性より高くなっています。

図 16 家庭での役割分担（前回調査との比較）



■ 前回調査（平成 22 年度）との比較

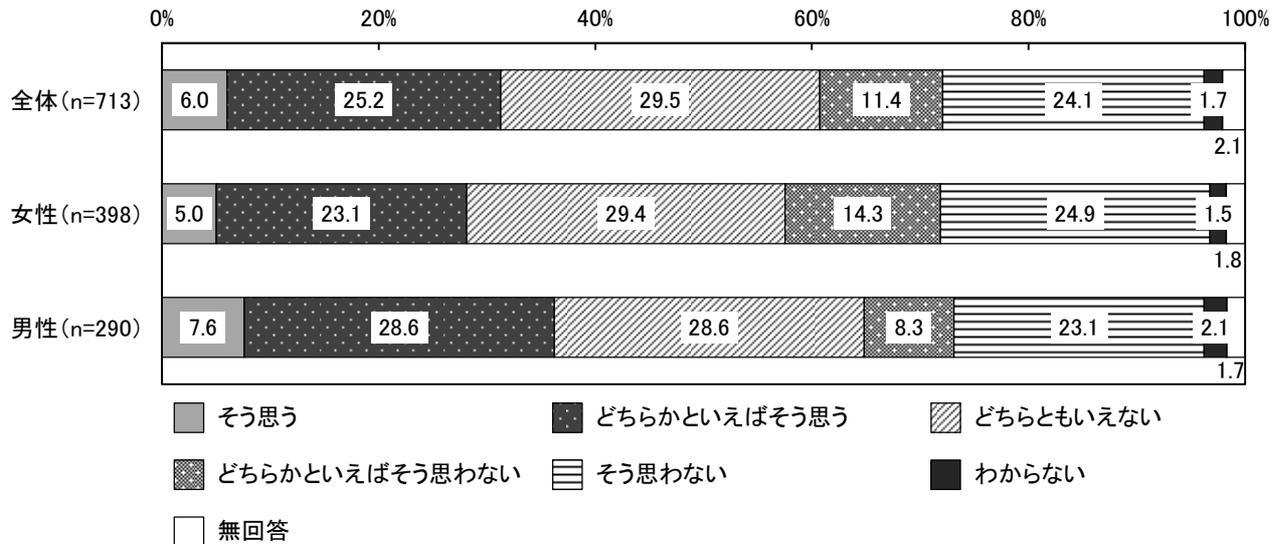
前回調査と比べると、ほとんどの項目で「自分と配偶者が同じくらい」が増加する傾向がみられます。また、「⑧高額の買い物(車、住宅等)、財産管理」について、「主に自分」が26.7%から33.5%と6.8ポイント増加しています。

2. 家庭等での男女のあり方について

(1) 「男は仕事、女は家庭」という考え方

問9 あなたは、「男は仕事、女は家庭」という考え方について、どう思いますか。
 (あてはまる番号1つだけに○)

図 17 「男は仕事、女は家庭」という考え方 (全体・男女別)



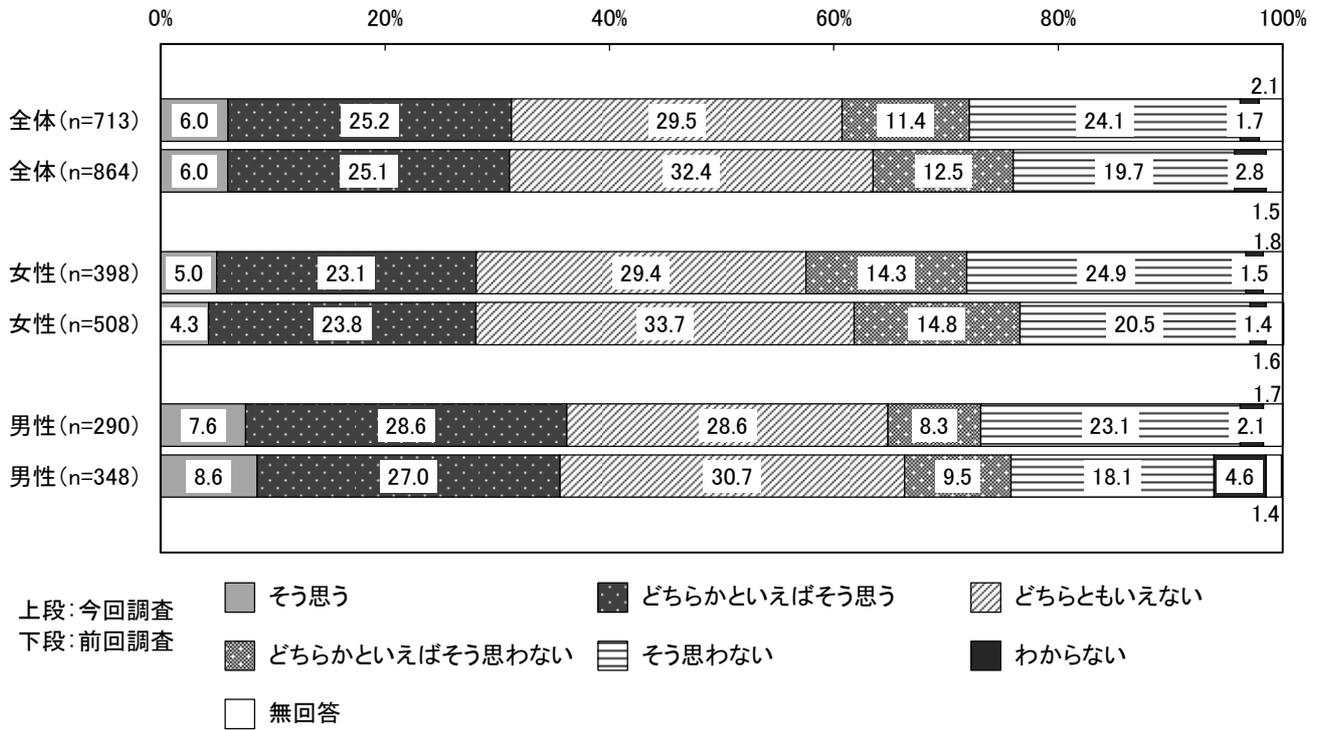
■全体の回答傾向

「男は仕事、女は家庭」という考え方について、肯定的な意見（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）は 31.2%、一方、否定的な意見（「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」の合計）は 35.5%で、否定的な意見がやや上回っています。また、「どちらともいえない」が 29.5%となっています。

■男女別の回答傾向

男女別にみると、女性は、否定的な意見が 39.2%で肯定的な意見（28.1%）を 11.1ポイント上回っています。一方、男性は、肯定的な意見が 36.2%で否定的な意見（31.4%）をやや上回っています。

図 18 「男は仕事、女は家庭」という考え方（前回調査との比較）



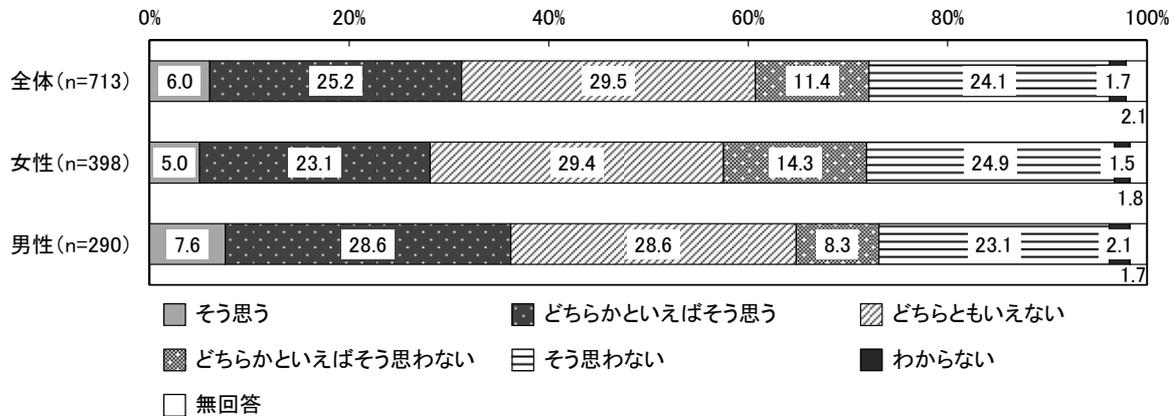
注：前回調査の選択肢は「同感する・どちらかといえば同感する・どちらともいえない・どちらかといえば同感しない・同感しない・わからない」の6項目であった。

■ 前回調査（平成 22 年度）との比較

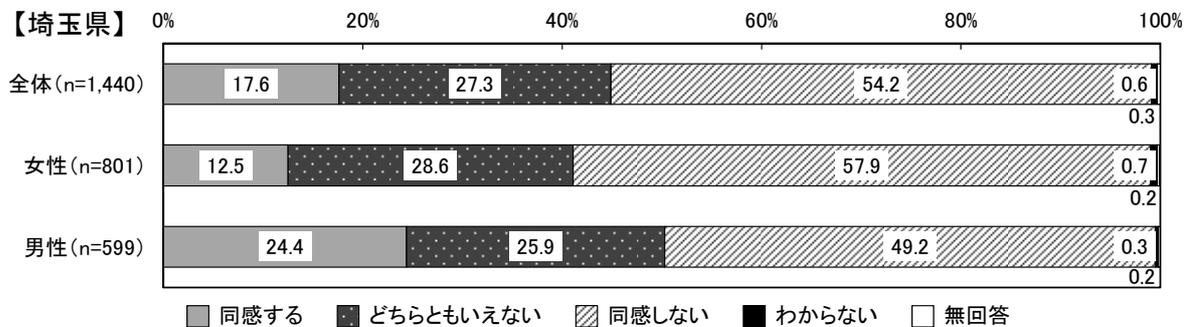
前回調査と比べると、全体・男女共に、否定的な意見（「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」の合計）が増加する傾向がみられます。

図 19 「男は仕事、女は家庭」という考え方
(埼玉県及び内閣府の調査との比較、全体・男女別)

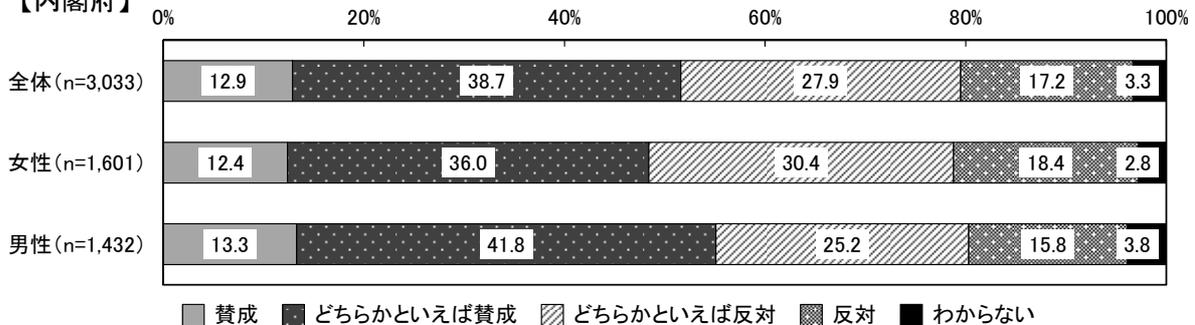
【朝霞市】(再掲)



【埼玉県】



【内閣府】



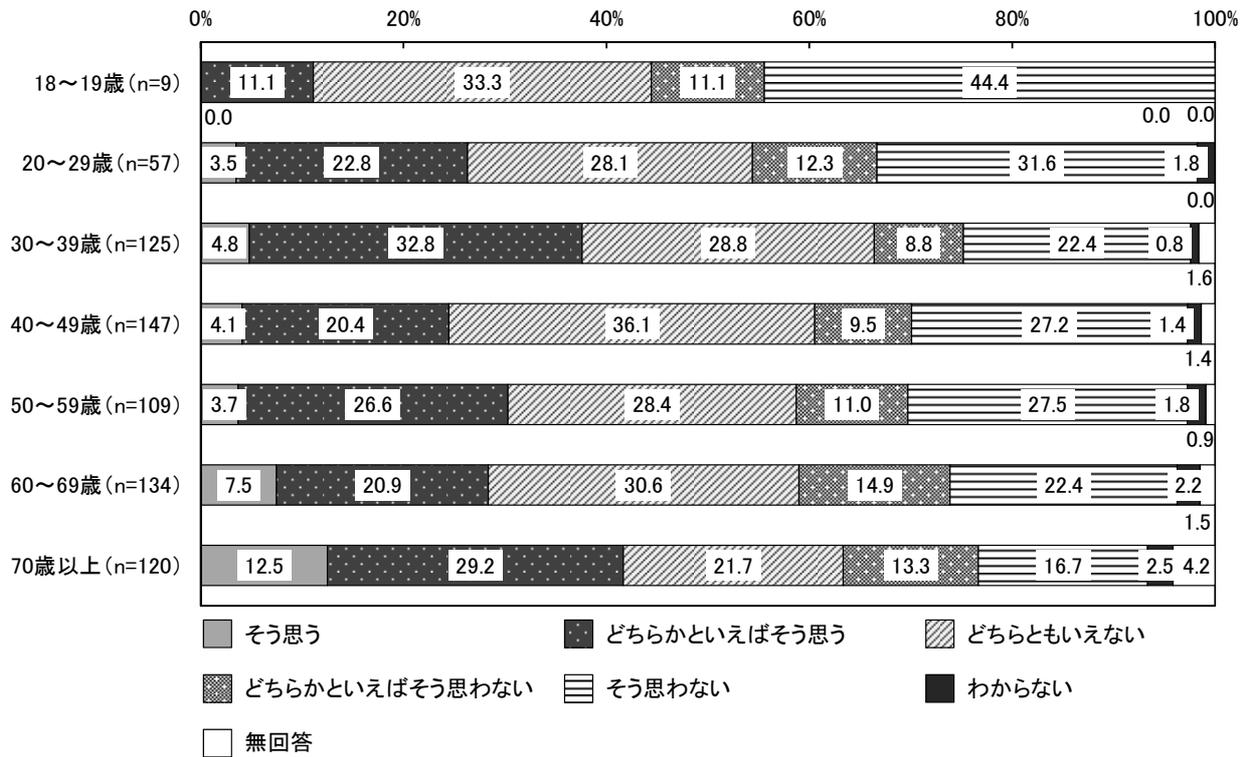
注：内閣府調査の設問は「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであるか」。

■埼玉県及び内閣府の調査との比較

埼玉県の調査と比べると、朝霞市は全体で、肯定的な意見（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）が31.2%で、埼玉県（「同感する」17.6%）を10ポイント以上上回っています。特に女性（朝霞市28.1%、埼玉県12.5%）は15.6ポイント上回っています。一方、内閣府の調査と比べると、朝霞市は全体・男女共に、肯定的な意見が20ポイント程度下回っています。

また、否定的な意見（「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」の合計）は、埼玉県や内閣府と比べ少ない傾向がみられます。

図 20 「男は仕事、女は家庭」という考え方（年齢別）



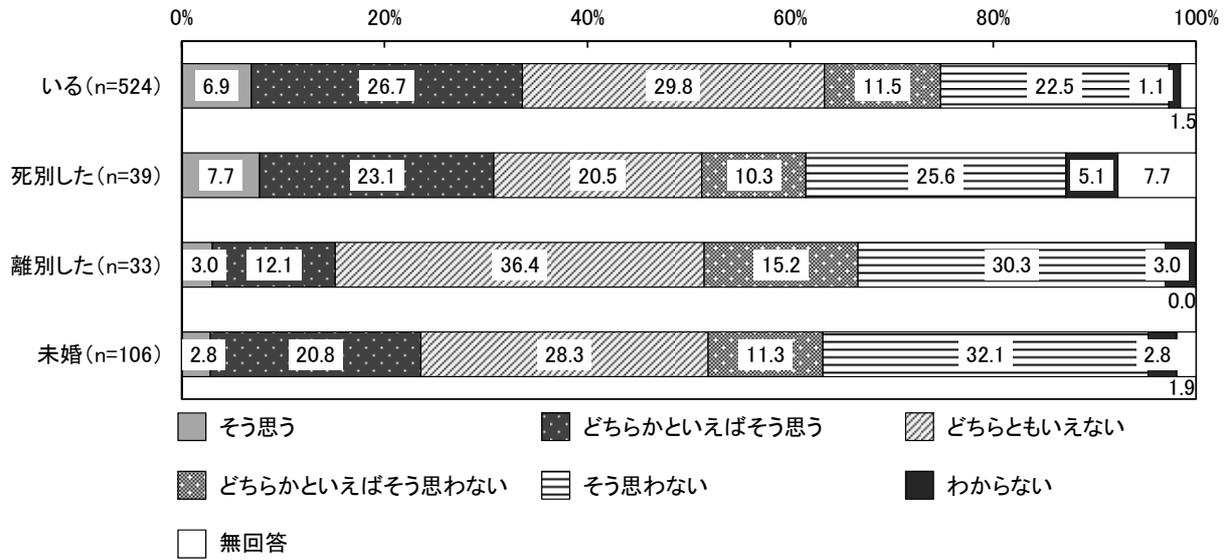
■年齢別の回答傾向

年齢別にみると、70歳以上は、「そう思う」が12.5%で、また、肯定的な意見（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）が41.7%で、他の年代と比べ多くなっています。30歳代も、肯定的な意見が37.6%で、他の年代と比べ多くなっています。

一方、10歳代及び20歳代は、「そう思わない」が30～40%程度で他の年代と比べ多くなっており、また、否定的な意見（「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」の合計）が40～50%程度で、他の年代と比べ多くなっています。

このほか、40歳代は「どちらともいえない」が36.1%で、他の年代と比べ多くなっています。

図 21 「男は仕事、女は家庭」という考え方（配偶者の有無別）



■ 配偶者の有無別の回答傾向

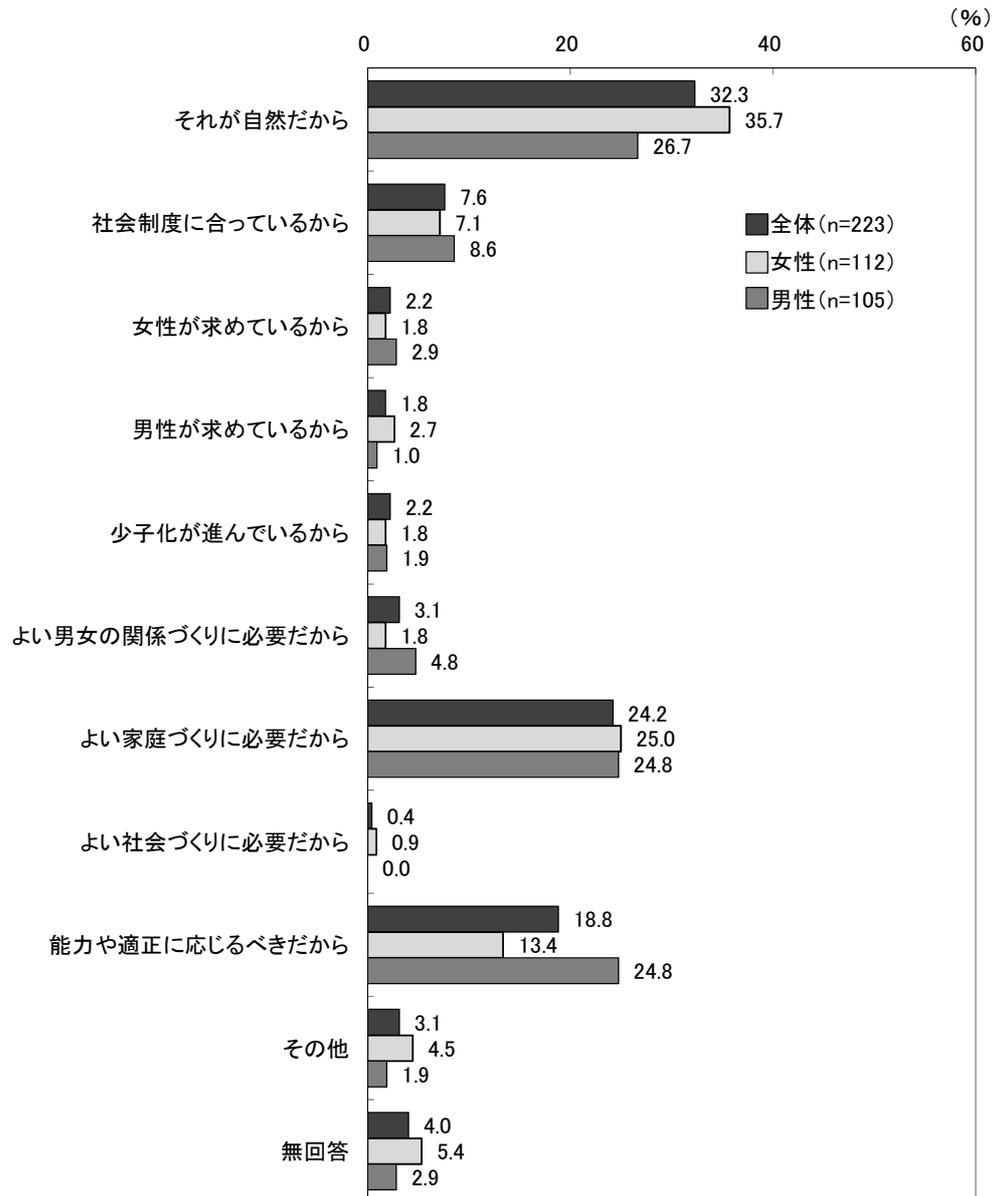
配偶者の有無別にみると、未婚または離別した人は、「そう思わない」が 30%程度で、さらに、「どちらかといえばそう思わない」と合わせると 40%以上が否定的な意見で、他と比べ多くなっています。さらに、離別した人は、「どちらともいえない」が 36.4%で、他と比べ多くなっています。

(2) 「男は仕事、女は家庭」という考え方を肯定（または否定）する理由

問9-1 問9で「1」～「5」のいずれかに○をつけた方（「わからない」以外の方）におたずねします。その理由は何ですか。（もっともあてはまる番号1つだけに○）

(2) - ①肯定する理由

図 22 「男は仕事、女は家庭」という考え方を肯定する理由（全体・男女別）



■全体の回答傾向

「男は仕事、女は家庭」という考え方を肯定する理由について、「それが自然だから」が32.3%で最も多く、次いで「よい家庭づくりに必要だから」が24.2%、「能力や適性に応じるべきだから」が18.8%で上位となっています。

■男女別の回答傾向

女性は、「それが自然だから」が35.7%で最も多く、男性（26.7%）を9.0ポイント上回っています。男性は、「それが自然だから」「よい家庭づくりに必要だから」「能力や適性に応じるべきだから」がそれぞれ25%前後で同程度となっています。また、「能力や適性に応じるべきだから」（24.8%）は女性（13.4%）を11.4ポイント上回っています。

図 23 「男は仕事、女は家庭」という考え方を肯定する理由（前回調査との比較・全体）

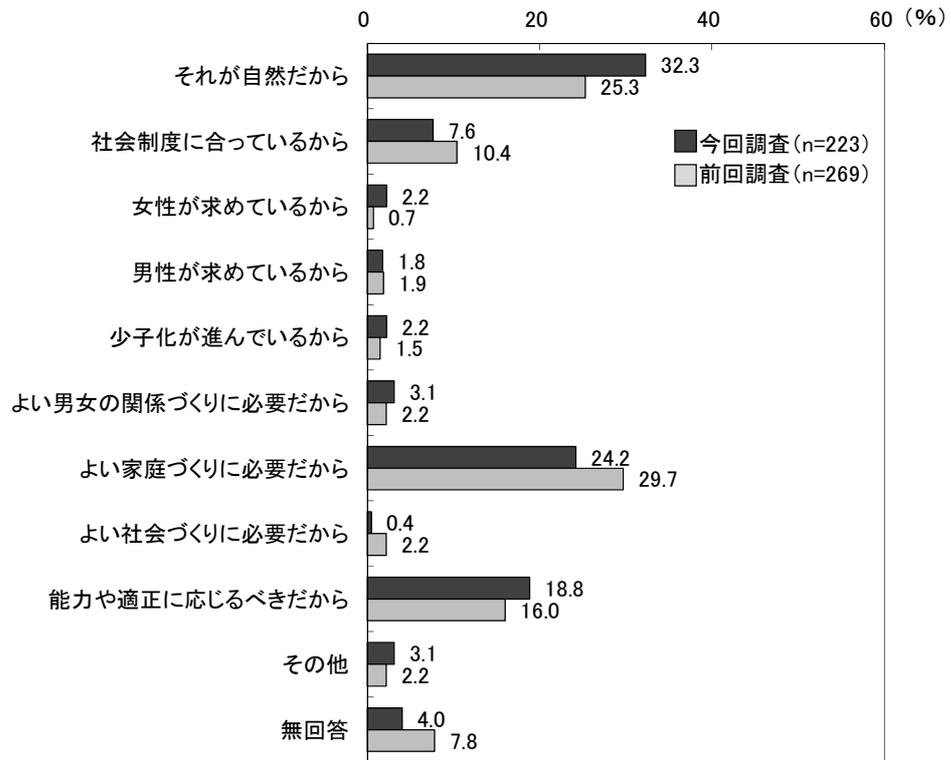


図 24 「男は仕事、女は家庭」という考え方を肯定する理由（前回調査との比較・女性）

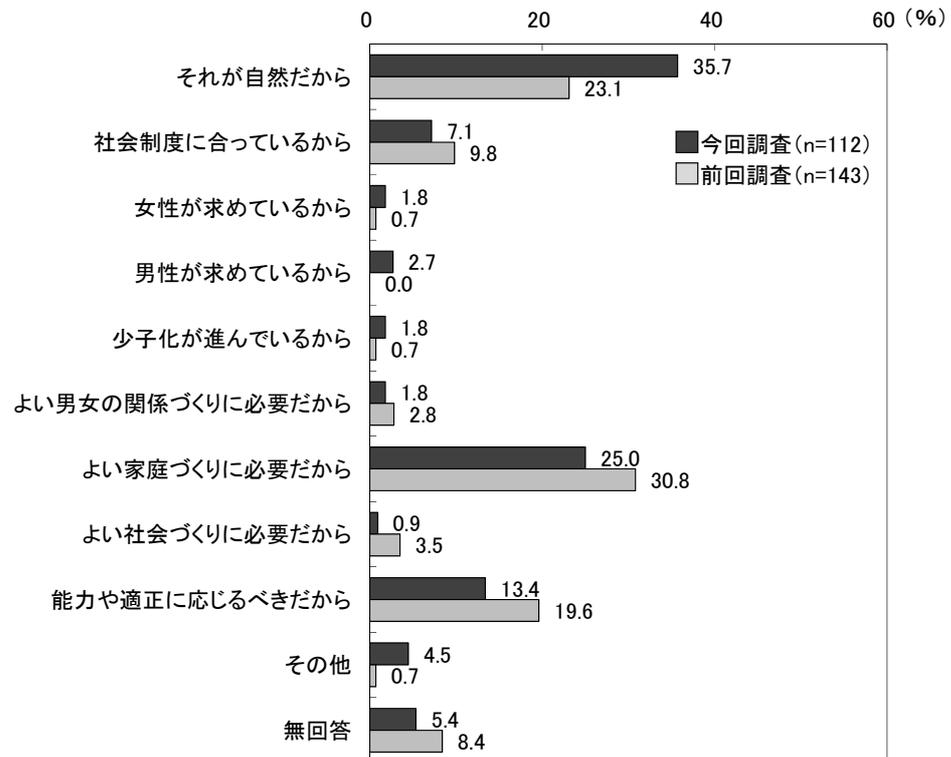
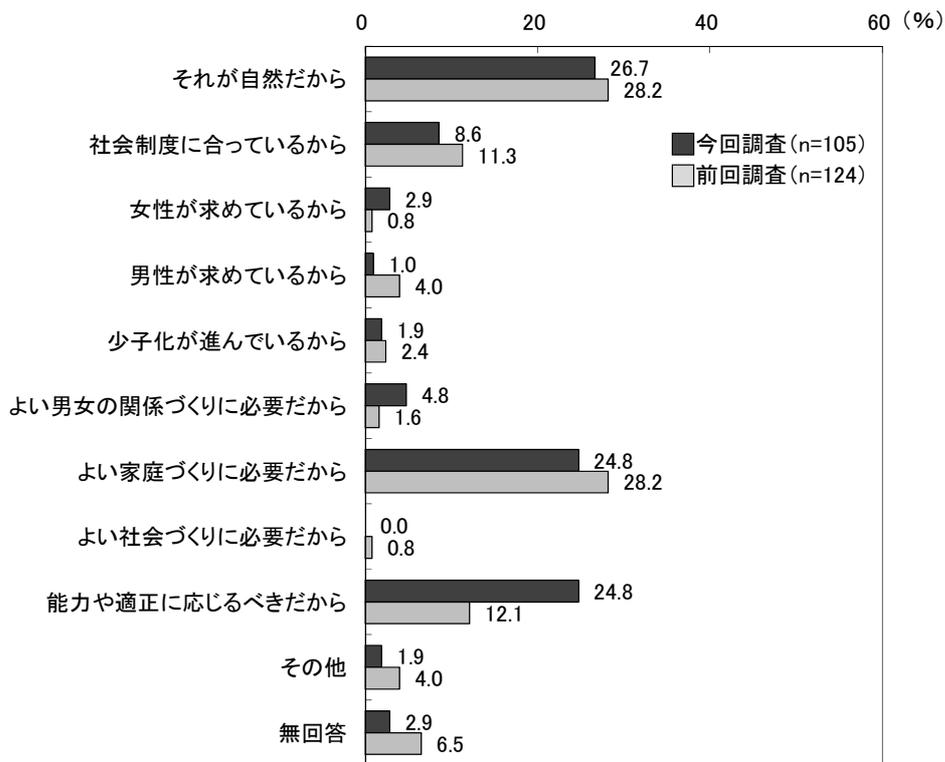


図 25 「男は仕事、女は家庭」という考え方を肯定する理由（前回調査との比較・男性）



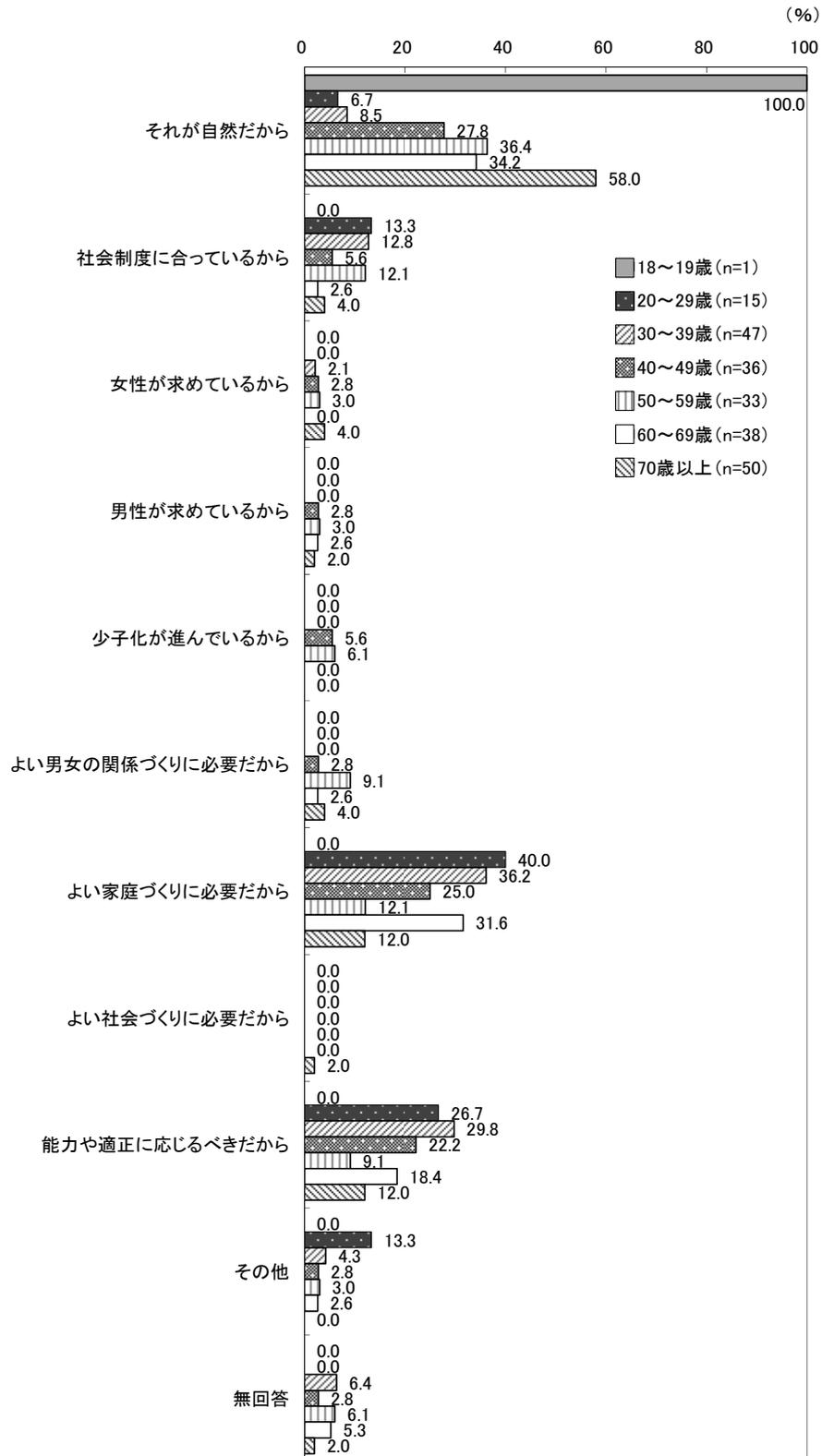
■前回調査（平成 22 年度）との比較

全体について、前回調査と比べると、「それが自然だから」は 25.3%から 32.3%と 7.0 ポイント増加しています。一方、「よい家庭づくりに必要だから」は 29.7%から 24.2%と 5.5 ポイント減少しています。

女性をみると、「それが自然だから」は 23.1%から 35.7%と 12.6 ポイント増加しています。一方、「よい家庭づくりに必要だから」や「能力や適性に応じるべきだから」はそれぞれ 6 ポイント程度減少しています。

男性をみると、「能力や適性に応じるべきだから」は 12.1%から 24.8%と 12.7 ポイント増加しています。

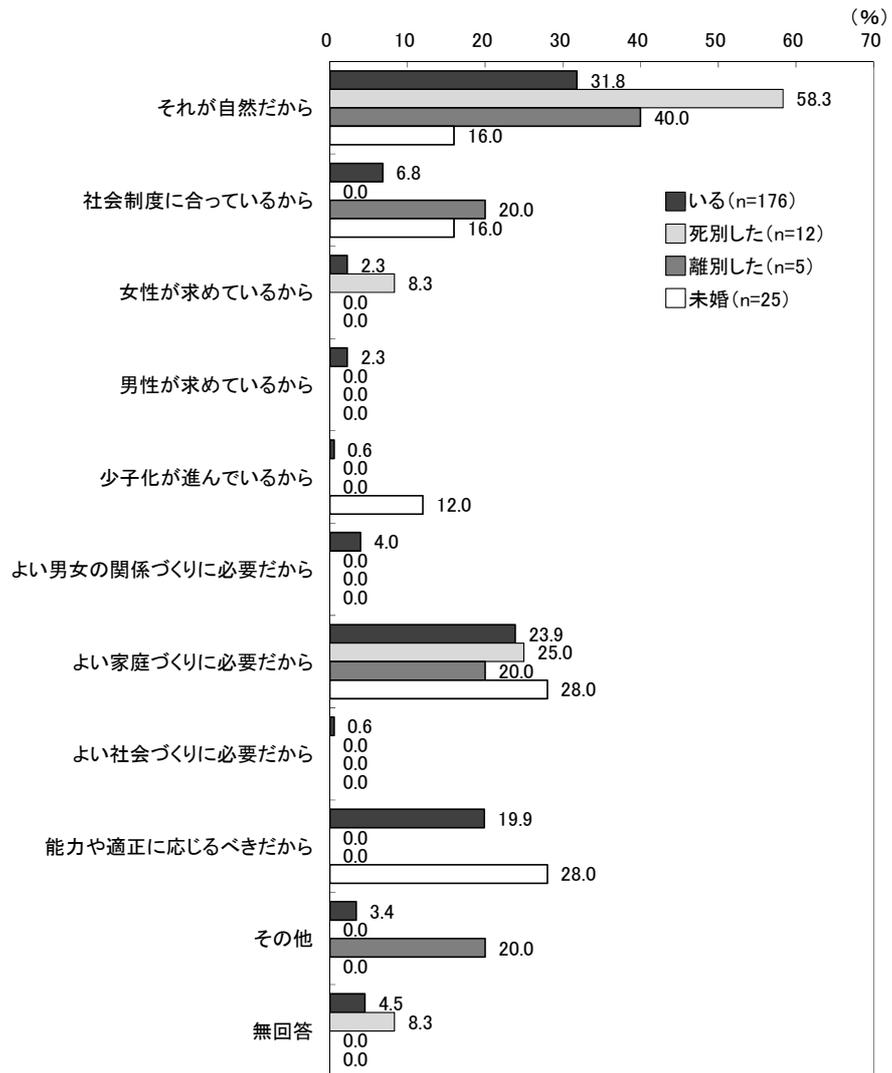
図 26 「男は仕事、女は家庭」という考え方を肯定する理由（年齢別）



■年齢別の回答傾向

年齢別にみると、70歳以上は「それが自然だから」が50%を超え、他の年代と比べ多く、また、20歳代、30歳代、60歳代は「よい家庭づくりに必要だから」が30%を超え、他の年代と比べて多い傾向がみられます。

図 27 「男は仕事、女は家庭」という考え方を肯定する理由（配偶者の有無別）

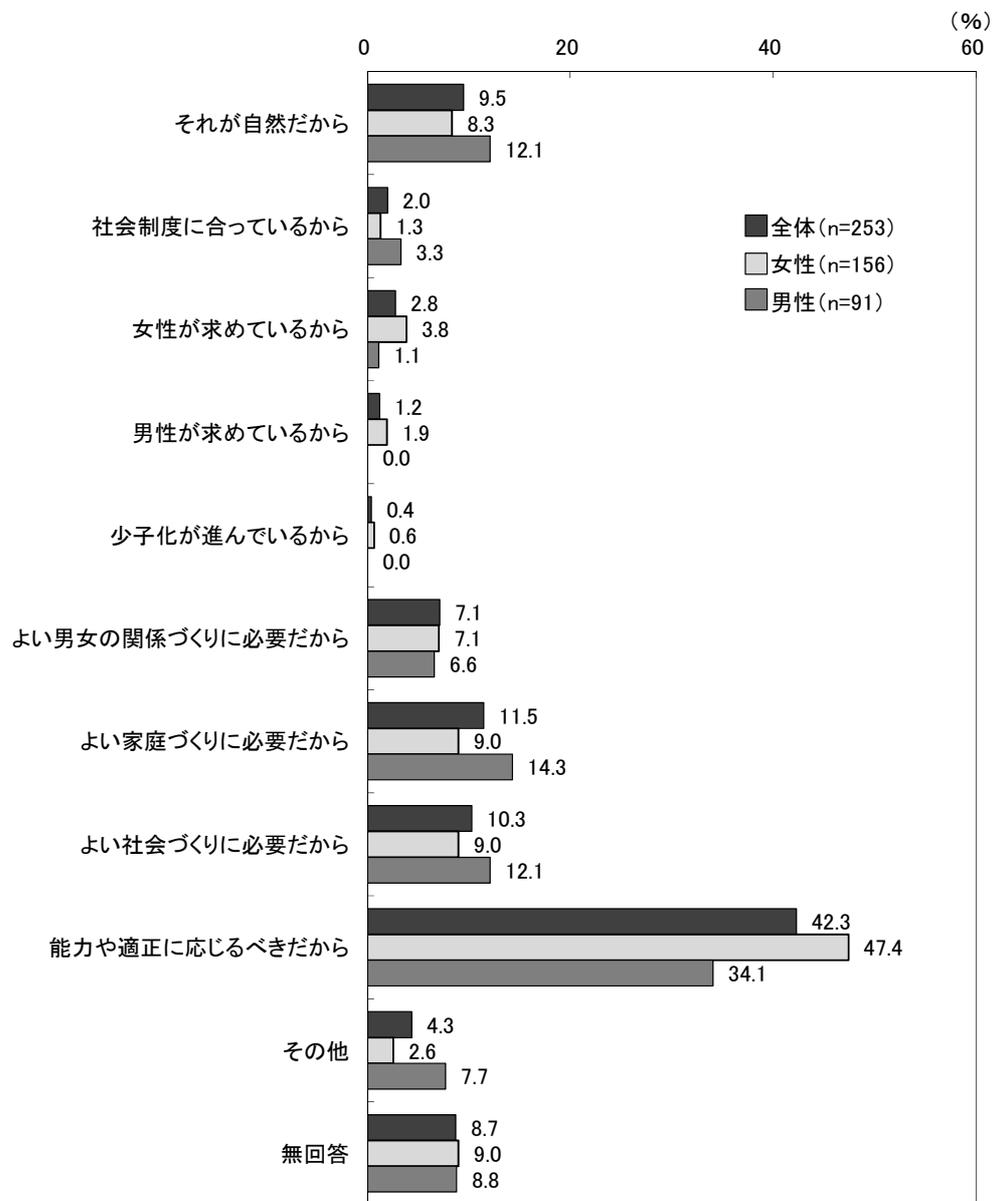


■ 配偶者の有無別の回答傾向

配偶者の有無別にみると、死別した人は「それが自然だから」が最も多く、未婚の人は「能力や適性に応じるべきだから」が他と比べ多い傾向がみられます。

(2) - ②否定する理由

図 28 「男は仕事、女は家庭」という考え方を否定する理由（全体・男女別）



■全体の回答傾向

「男は仕事、女は家庭」という考え方を否定する理由について、「能力や適性に応じるべきだから」が42.3%で最も多くなっています。

■男女別の回答傾向

男女共に、「能力や適性に応じるべきだから」が最も多くなっており、女性（47.4%）は男性（34.1%）を13.3ポイント上回っています。一方、「よい家庭づくりに必要だから」については、男性（14.3%）が女性（9.0%）を5.3ポイント上回っています。

図 29 「男は仕事、女は家庭」という考え方を否定する理由（前回調査との比較・全体）

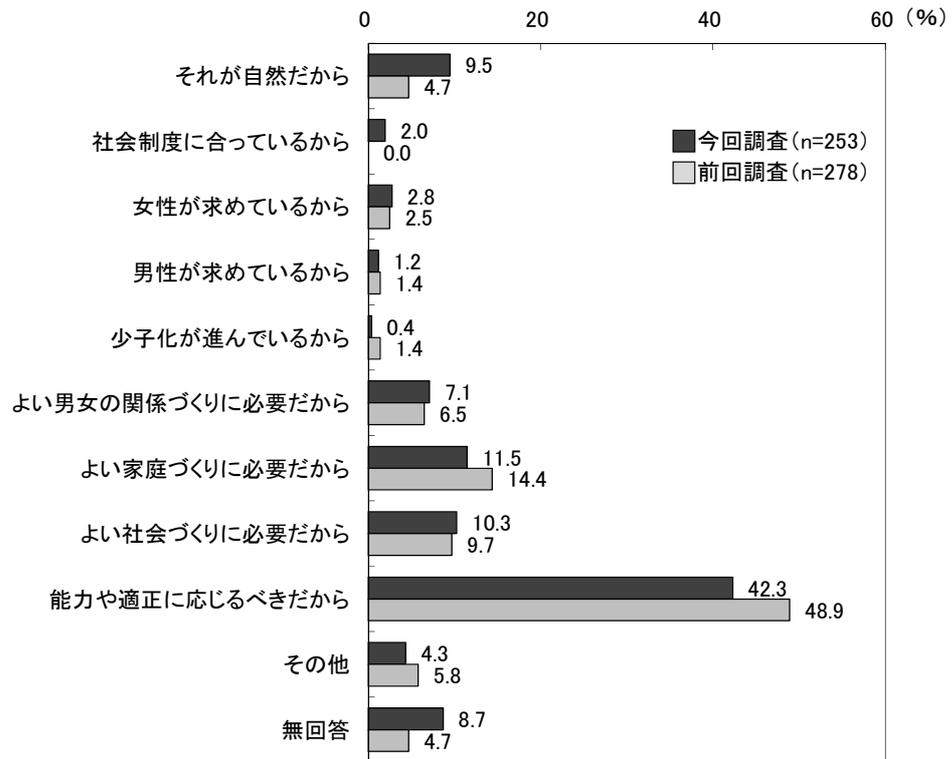


図 30 「男は仕事、女は家庭」という考え方を否定する理由（前回調査との比較・女性）

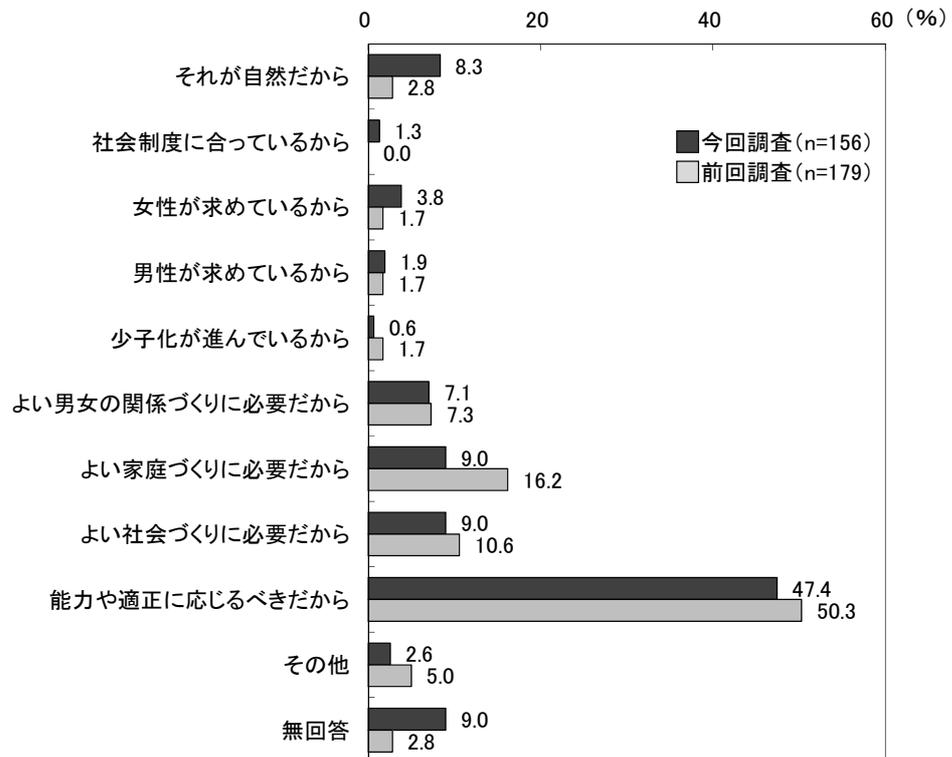
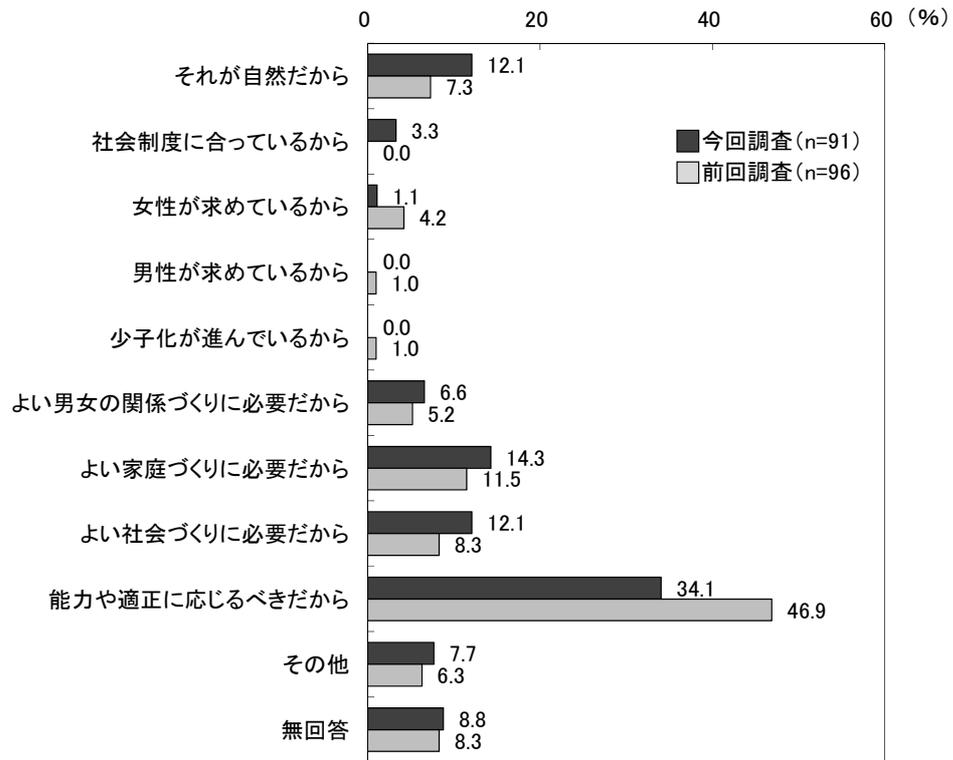


図 31 「男は仕事、女は家庭」という考え方を否定する理由（前回調査との比較・男性）



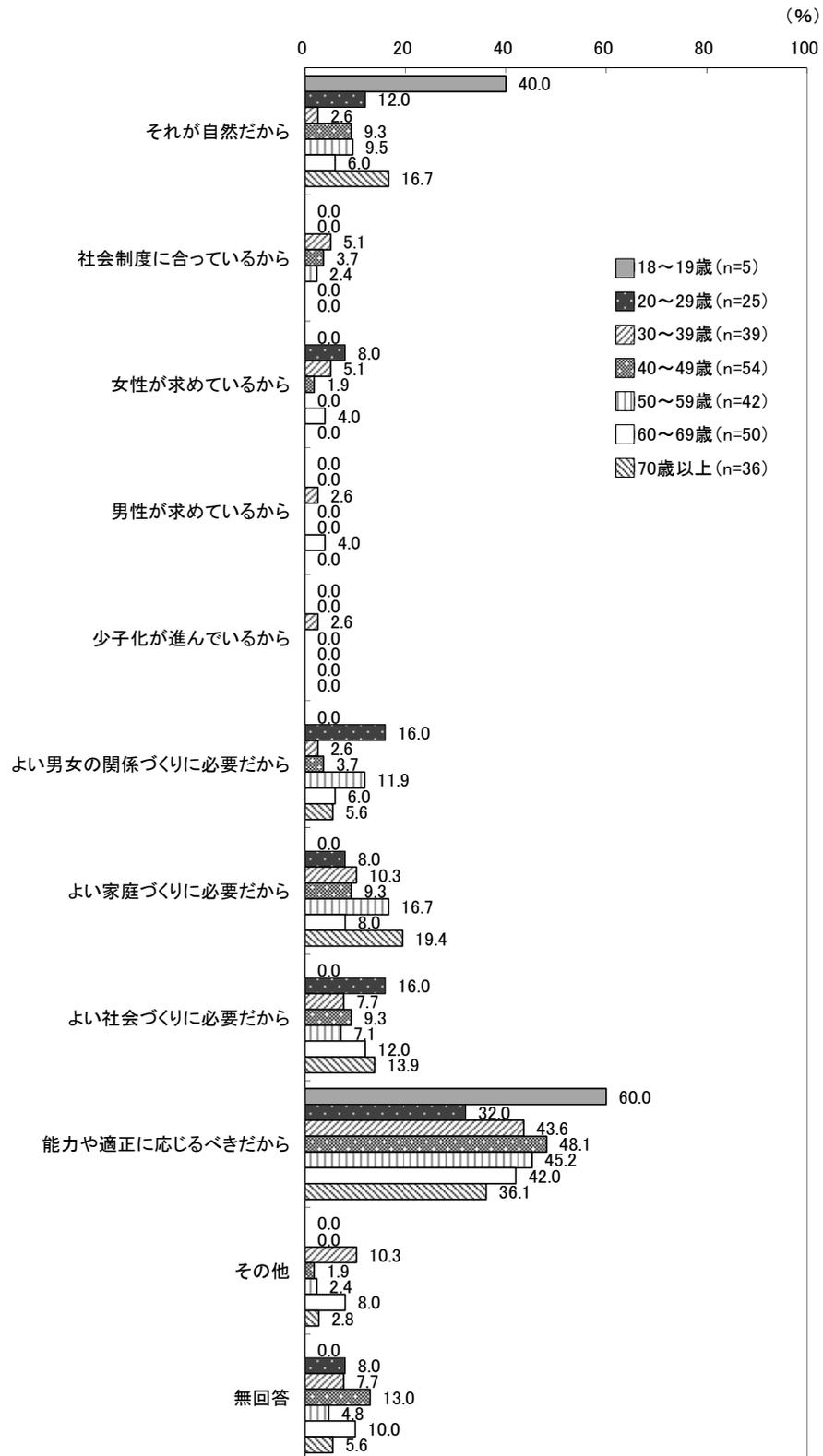
■前回調査（平成 22 年度）との比較

全体について、前回調査と比べると、「能力や適性に応じるべきだから」が 48.9%から 42.3%と 6.6 ポイント減少しています。

特に、男性は、「能力や適性に応じるべきだから」が 46.9%から 34.1%と 12.8 ポイント減少しています。

一方、女性をみると、「それが自然だから」が 2.8%から 8.3%と 5.5 ポイント増加しています。

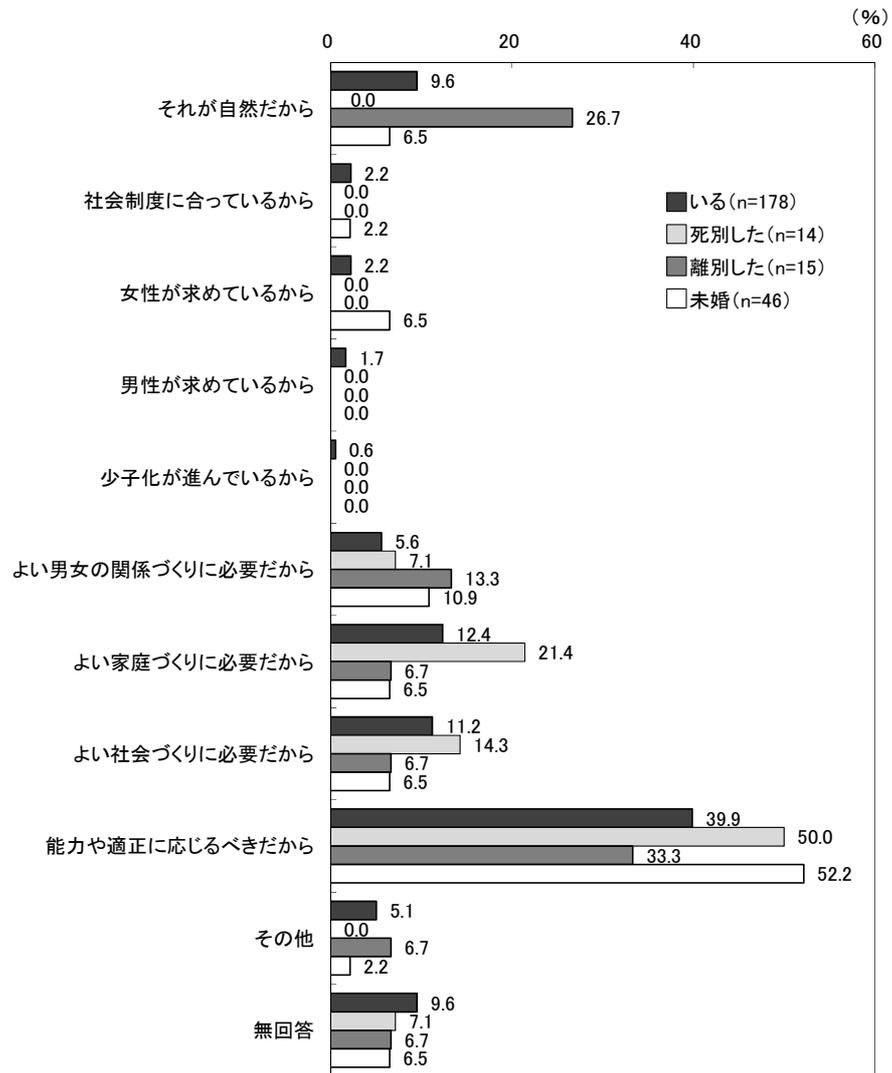
図 32 「男は仕事、女は家庭」という考え方を否定する理由（年齢別）



■年齢別の回答傾向

年齢別にみると、30~60歳代は「能力や適性に応じるべきだから」が40%を超え、他の年代に比べて多い傾向がみられます。また、18~19歳は回答母数がわずかではありますが、他の年代と同じく「能力や適性に応じるべきだから」が最も多くなっています。

図 33 「男は仕事、女は家庭」という考え方を否定する理由（配偶者の有無別）



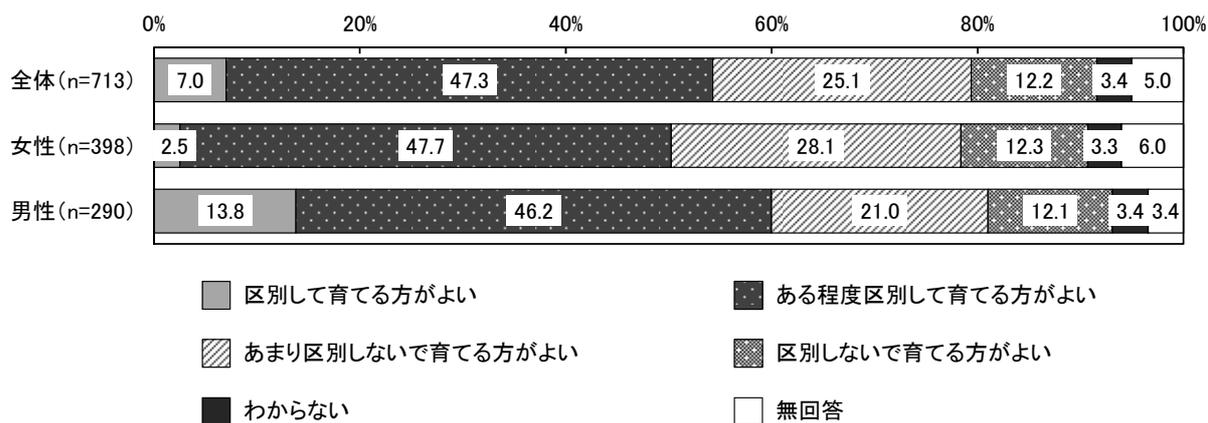
■ 配偶者の有無別の回答傾向

配偶者の有無別にみると、死別した人や未婚の人は、配偶者がいる人や離別した人と比べて「能力や適性に応じるべきだから」が多く、離別した人は、配偶者がいる人や死別した人、未婚の人と比べて「それが自然だから」が多い傾向がみられます。

(3) 男の子と女の子の育て方

問 10 あなたは、家庭で子どもを育てる場合、「男らしく」「女らしく」というように、男の子と女の子を区別して育てた方がよいと思いますか。(あてはまる番号1つだけに○)

図 34 男の子と女の子の育て方 (全体・男女別)



■全体の回答傾向

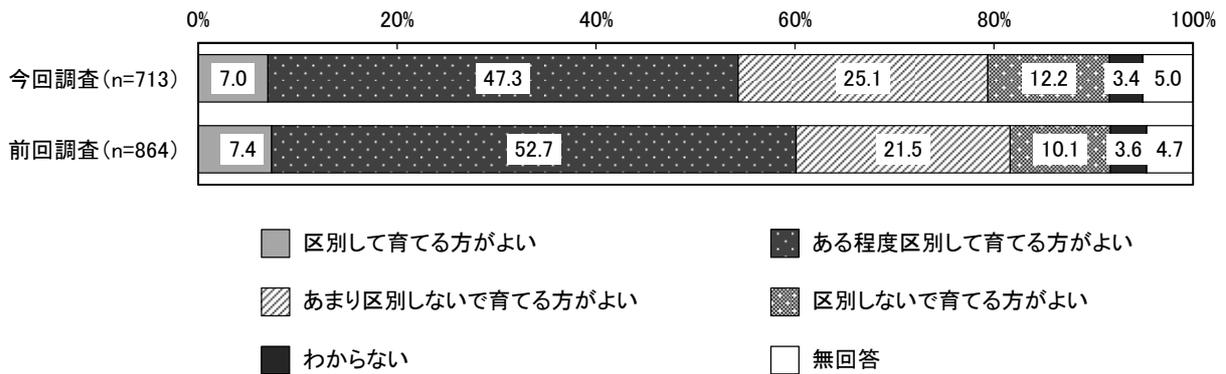
男の子と女の子の育て方について、「ある程度区別して育てる方がよい」が 47.3%で最も多く、「区別して育てる方がよい」と合計すると、肯定的な意見は 54.3%で半数を超えています。一方、「あまり区別しないで育てる方がよい」が 25.1%で、「区別しないで育てる方がよい」と合計すると、否定的な意見は 37.3%となっています。

■男女別の回答傾向

男女共に、肯定的な意見（「区別して育てる方がよい」と「ある程度区別して育てる方がよい」の合計）が多くなっており、特に男性は、肯定的な意見が 60.0%に達し、否定的な意見（「あまり区別しないで育てる方がよい」と「区別しないで育てる方がよい」の合計）33.1%を 26.9 ポイント上回っています。

また、女性は、肯定的な意見が 50.2%で、否定的な意見 40.4%を 9.8 ポイント上回っています。

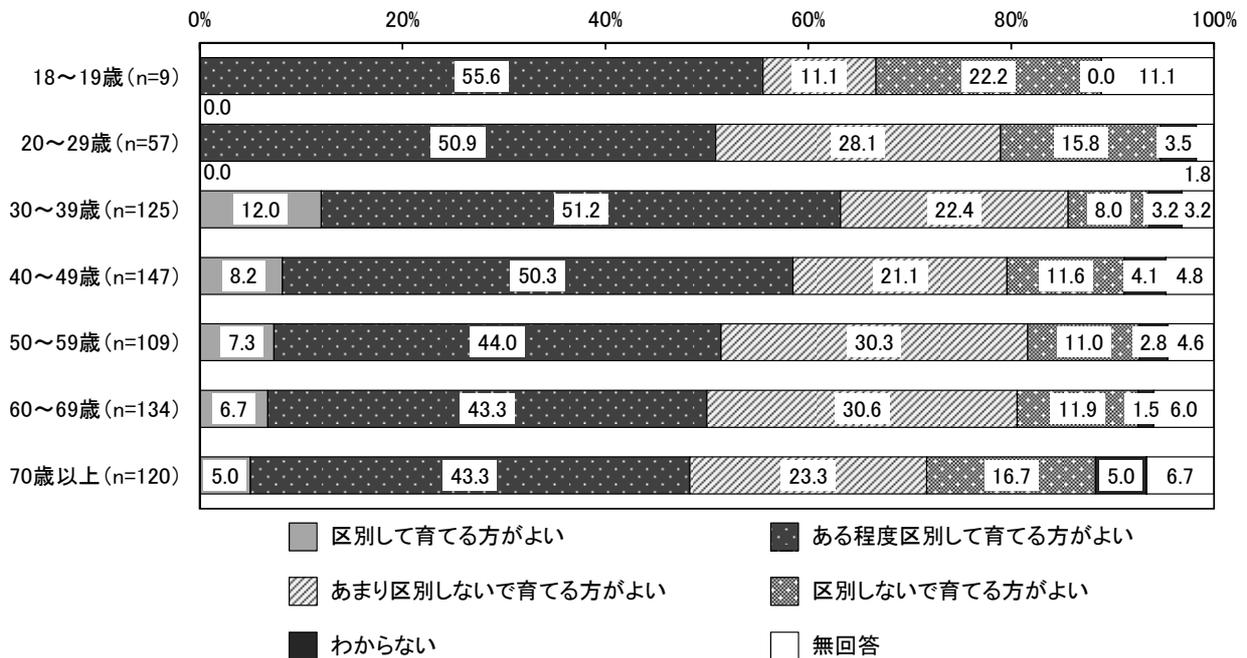
図 35 男の子と女の子の育て方（前回調査との比較）



■前回調査（平成 22 年度）との比較

前回調査と比べると、「ある程度区別して育てる方がよい」は 52.7%から 47.3%と 5.4 ポイント減少しており、一方、否定的な意見（「あまり区別しないで育てる方がよい」と「区別しないで育てる方がよい」の合計）が 5.7 ポイント増加しています。

図 36 男の子と女の子の育て方（年齢別）



■年齢別の回答傾向

年齢別にみると、30 歳代及び 40 歳代は、肯定的な意見（「区別して育てる方がよい」と「ある程度区別して育てる方がよい」の合計）が 60%程度を占めています。一方、20 歳代及び 50 歳代以上は、否定的な意見（「区別しないで育てる方がよい」と「あまり区別しないで育てる方がよい」の合計）が 40%を超え、他の年代と比べ多くなっています。

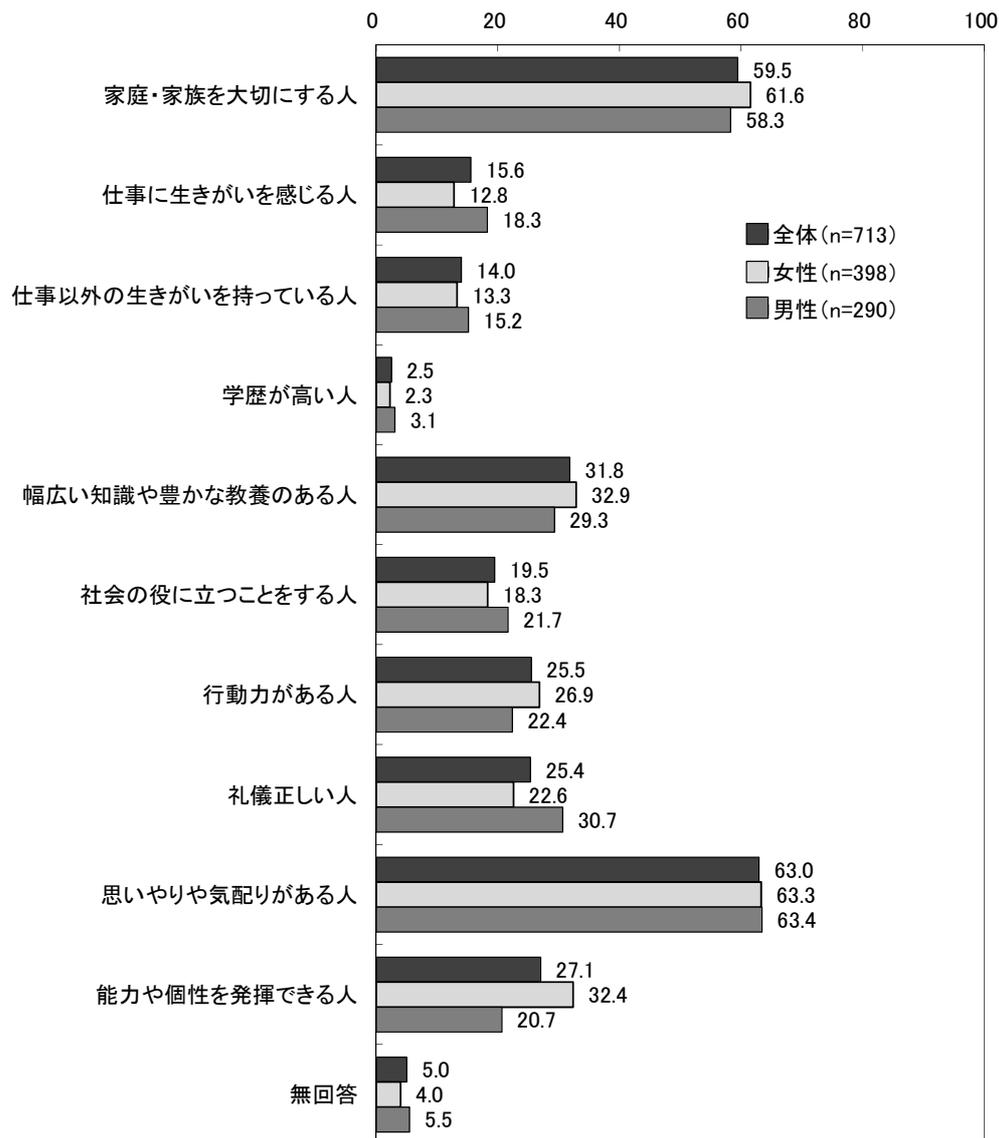
(4) 子どもに望む人間像

問 11 あなたは、子どもにどのような人間に育ててほしいと思いますか。男の子、女の子それぞれについて、子どもがいる、いないにかかわらずお答えください。(優先順位の高い方から番号を3つまで〔 〕内に記入 男の子、女の子で同項目の選択は可)

(4) - ①男の子

図 37 子どもに望む人間像 (男の子 1～3位合計、全体・男女別)

(%)



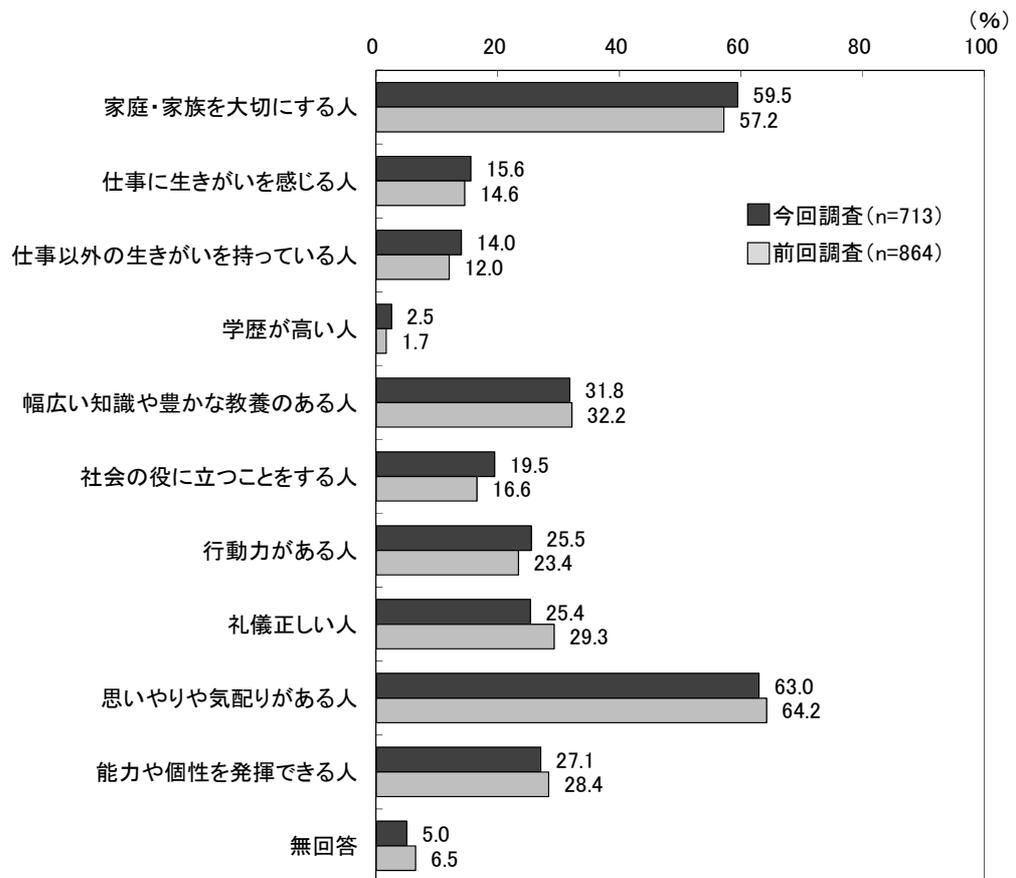
■全体の回答傾向

男の子に望む人間像について、「思いやりや気配りがある人」が 63.0%で最も多く、次いで「家庭・家族を大切にする人」が 59.5%、「幅広い知識や豊かな教養のある人」が 31.8%で上位となっています。

■男女別の回答傾向

男女別にみて回答傾向に大きな違いはみられませんが、第4位以下の項目をみると、女性は「能力や個性を發揮できる人」が32.4%で男性（20.7%）を11.7ポイント上回っています。一方、男性は「礼儀正しい人」が30.7%で女性（22.6%）を8.1ポイント上回っています。

図 38 子どもに望む人間像（男の子1～3位合計、前回調査との比較）

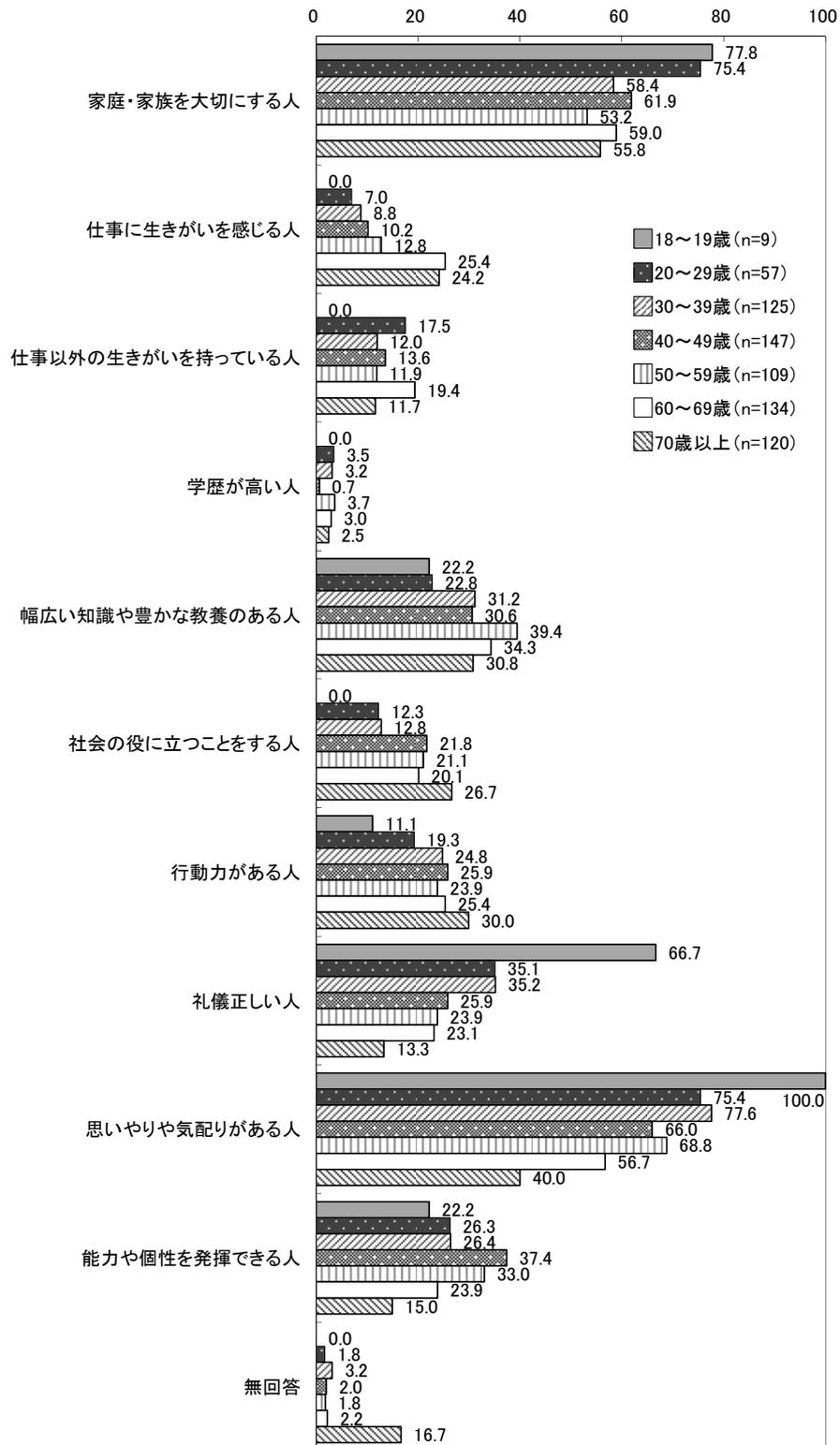


■前回調査（平成22年度）との比較

前回調査と比べて回答傾向に大きな違いはみられません。

図 39 子どもに望む人間像（男の子1～3位合計、年齢別）

(%)



■年齢別の回答傾向

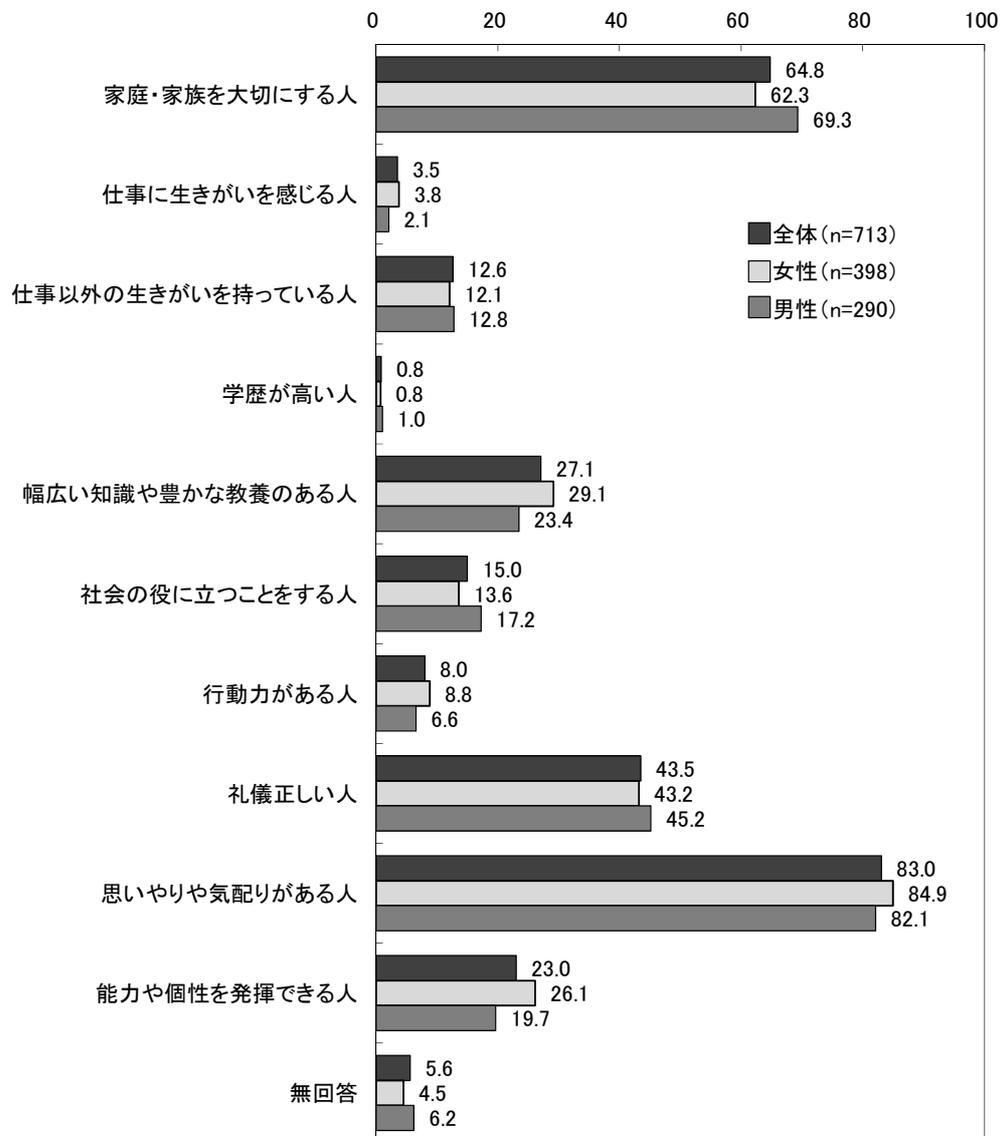
年齢別にみると、「思いやりや気配りがある人」「家庭・家族を大切にしている人」「礼儀正しい人」は、おおむね年齢が低いほど多い傾向がみられます。一方、「仕事に生きがいを感じる人」「社会の役に立つことをする人」「行動力がある人」は、おおむね年齢が高いほど多

い傾向がみられます。このほか、40 歳代及び 50 歳代は、「能力や個性を発揮できる人」が 30%を超え、他の年代と比べ多くなっています。

(4) - ②女の子

図 40 子どもに望む人間像（女の子1～3位合計、全体・男女別）

(%)



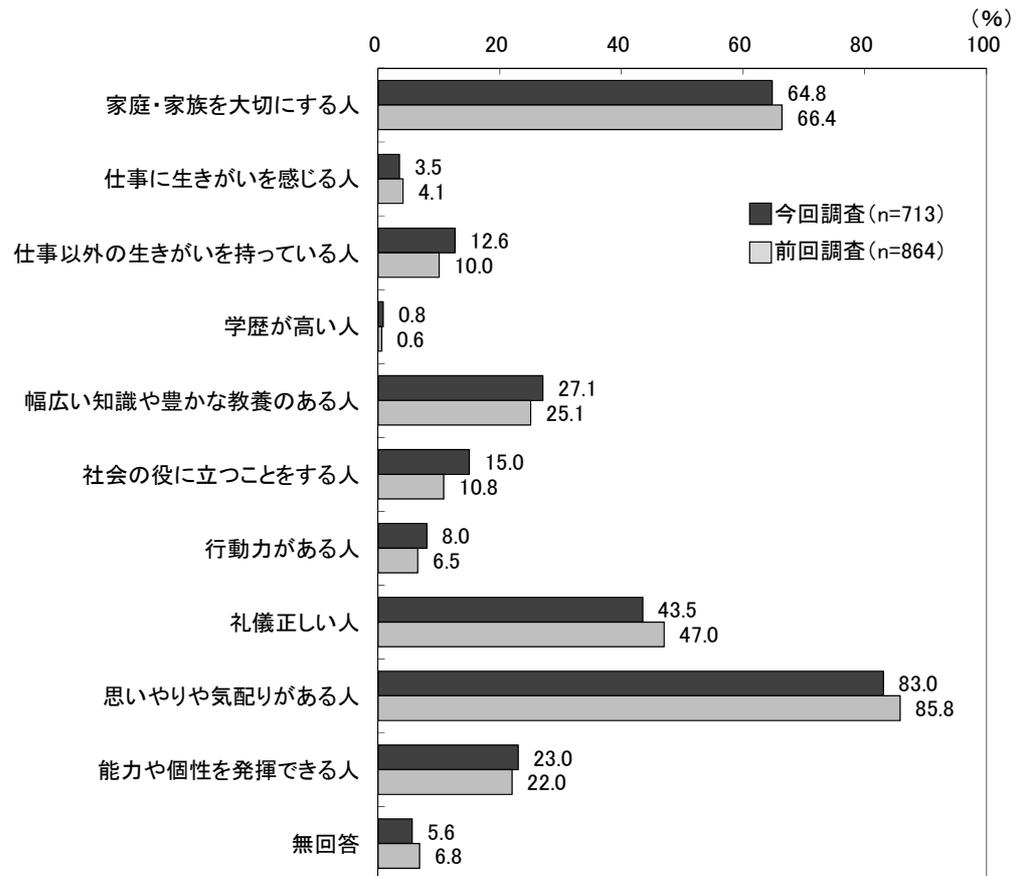
■全体の回答傾向

女の子に望む人間像について、「思いやりや気配りがある人」が83.0%で最も多く、次いで「家庭・家族を大切にする人」が64.8%、「礼儀正しい人」が43.5%で上位となっています。

■男女別の回答傾向

男女別にみて回答傾向に大きな違いはみられませんが、女性は「幅広い知識や豊かな教養のある人」や「能力や個性を發揮できる人」が25～30%程度で、男性を5～6ポイント程度上回っています。一方、男性は「家庭・家族を大切にする人」が69.3%で女性(62.3%)を7ポイント上回っています。

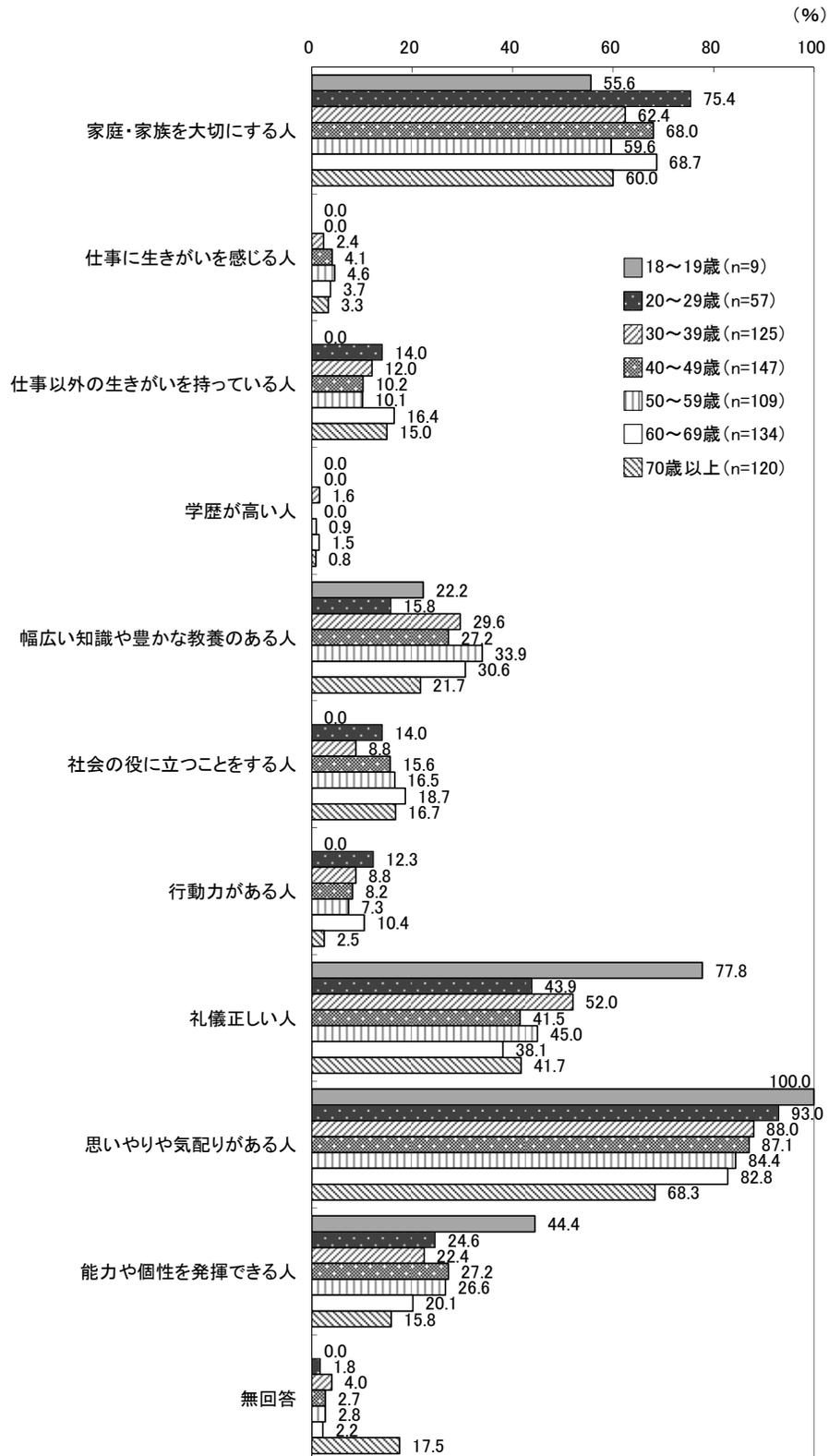
図 41 子どもに望む人間像（女の子1～3位合計、前回調査との比較）



■前回調査（平成 22 年度）との比較

前回調査と比べて回答傾向に大きな違いはみられません。

図 42 子どもに望む人間像（女の子1～3位合計、年齢別）



■年齢別の回答傾向

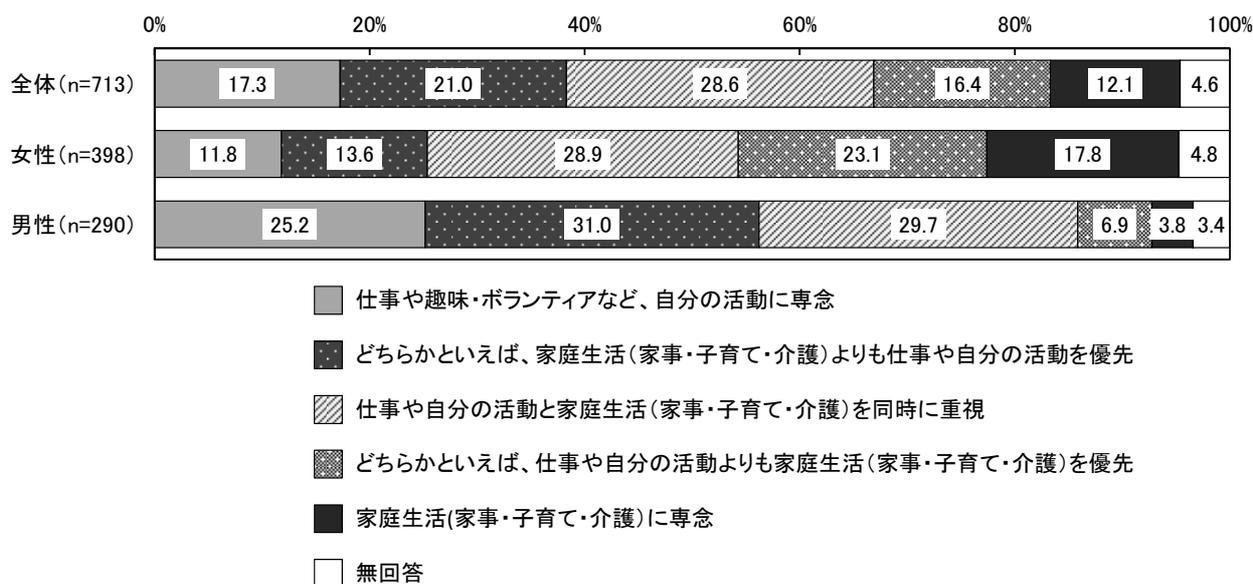
年齢別にみると、「思いやりや気配りがある人」「礼儀正しい人」「能力や個性を発揮できる人」は、おおむね年齢が低いほど多い傾向がみられます。

(5) 家庭生活で優先すること

問 12 家庭生活（家事・子育て・介護）について、あなたの考え方をうかがいます。あなたは、「現実」では何を優先していますか。また、「希望」としては何を優先させたいですか。未婚・既婚にかかわらずお答えください。（それぞれ、あてはまる番号を1つだけ〔 〕内に記入）

(5) - ① 現実

図 43 家庭生活で優先すること（現実、全体・男女別）



■ 全体の回答傾向

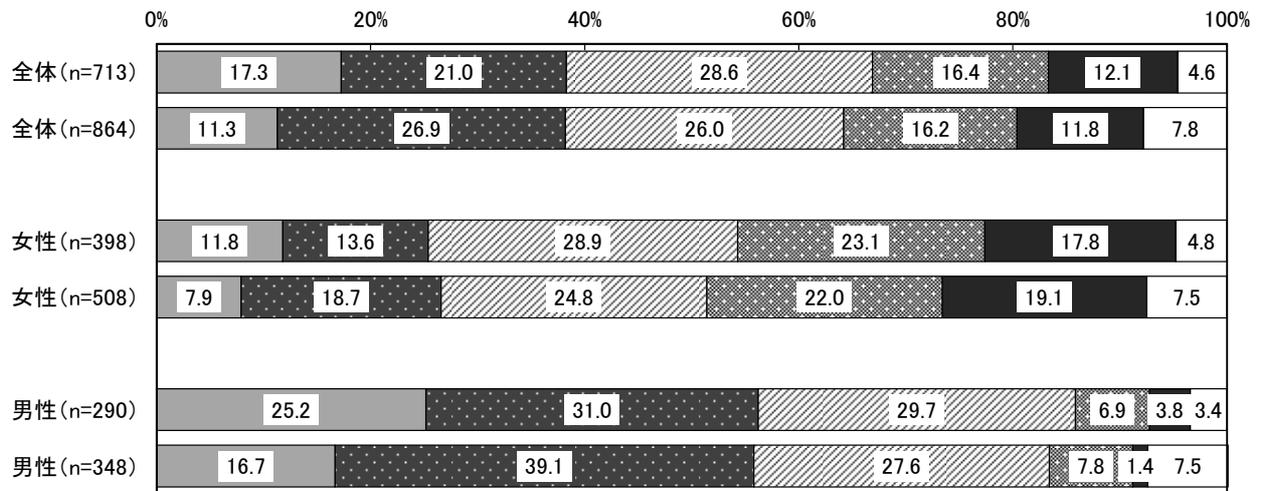
現実として家庭生活で優先することについて、「仕事や自分の活動と家庭生活(家事・子育て・介護)を同時に重視」が28.6%で最も多く、次いで「どちらかといえば、家庭生活(家事・子育て・介護)よりも仕事や自分の活動を優先」が21.0%となっています。

■ 男女別の回答傾向

男女別にみると、男女共に「仕事や自分の活動と家庭生活(家事・子育て・介護)を同時に重視」が30%程度となっています。

女性は、これに次いで、「どちらかといえば、仕事や自分の活動よりも家庭生活(家事・子育て・介護)を優先」が23.1%となっています。一方、男性は、「どちらかといえば、家庭生活(家事・子育て・介護)よりも仕事や自分の活動を優先」が31.0%、「仕事や趣味・ボランティアなど、自分の活動に専念」が25.2%で、仕事や自分の活動を優先する人が、女性と比べ多くなっています。

図 44 家庭生活で優先すること（現実、前回調査との比較）



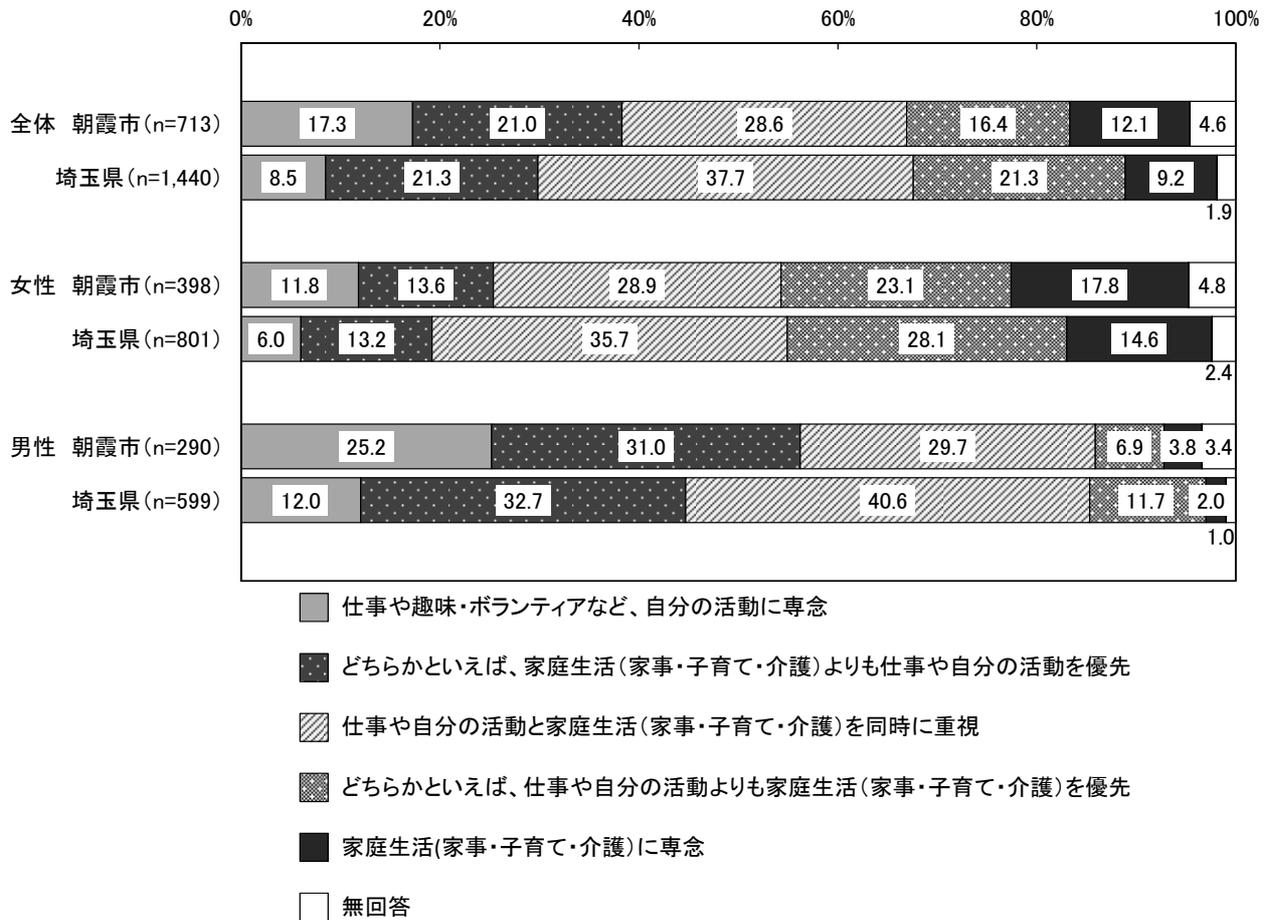
上段: 今回調査
下段: 前回調査

- 仕事や趣味・ボランティアなど、自分の活動に専念
- どちらかといえば、家庭生活(家事・子育て・介護)よりも仕事や自分の活動を優先
- ▨ 仕事や自分の活動と家庭生活(家事・子育て・介護)を同時に重視
- ▨ どちらかといえば、仕事や自分の活動よりも家庭生活(家事・子育て・介護)を優先
- 家庭生活(家事・子育て・介護)に専念
- 無回答

■ 前回調査（平成 22 年度）との比較

現実として家庭生活で優先することについて、前回調査と比べると、全体・男女共に「どちらかといえば、家庭生活(家事・子育て・介護)よりも仕事や自分の活動を優先」が減少し、「仕事や趣味・ボランティアなど、自分の活動に専念」が増加する傾向がみられます。

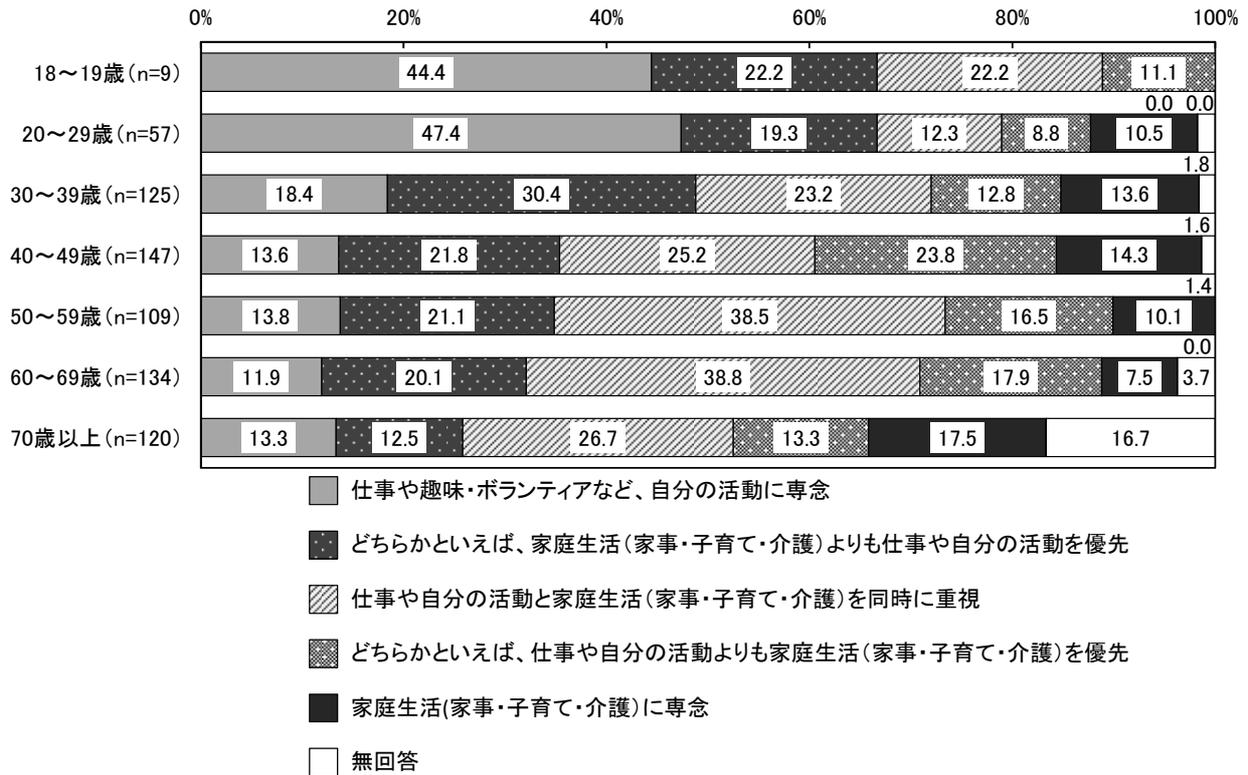
図 45 家庭生活で優先すること（現実、埼玉県との比較）



■埼玉県の調査との比較

現実として家庭生活で優先することについて、埼玉県の調査と比べると、朝霞市は全体・男女共に「仕事や趣味・ボランティアなど、自分の活動に専念」が多い傾向がみられ、全体は 8.8 ポイント、特に男性は 13.2 ポイント上回っています。一方、朝霞市は全体・男女共に「仕事や自分の活動と家庭生活(家事・子育て・介護)を同時に重視」が少ない傾向がみられ、特に男性は 10.9 ポイント下回っています。

図 46 家庭生活で優先すること（現実、年齢別）

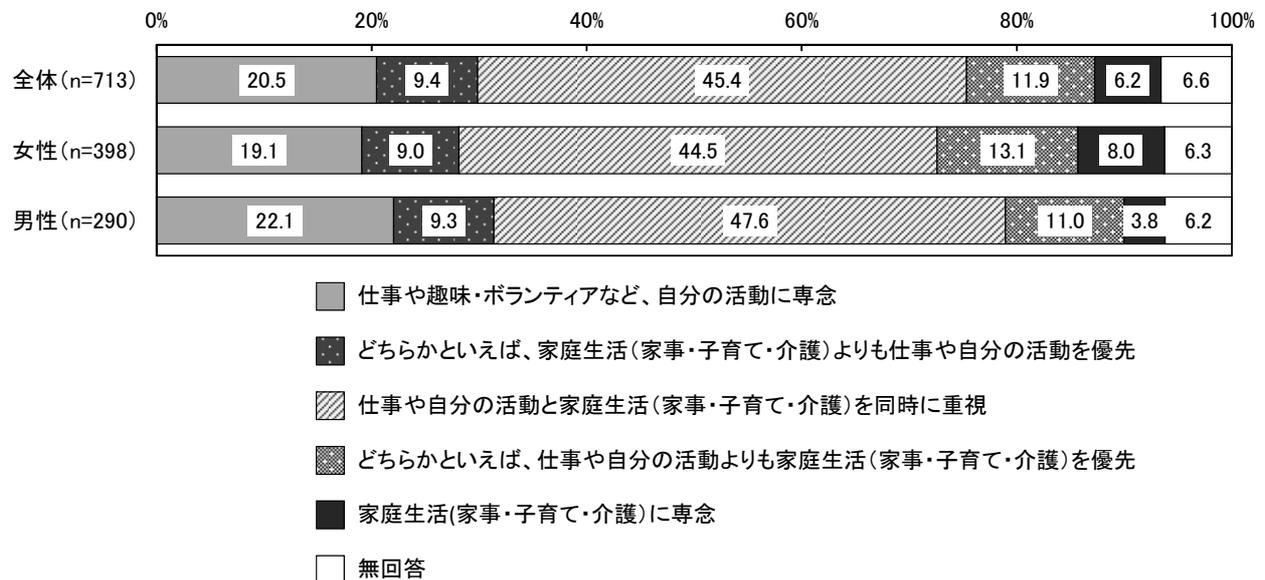


■年齢別の回答傾向

現実として家庭生活で優先することについて、10 歳代及び 20 歳代は、「仕事や趣味・ボランティアなど、自分の活動に専念」が 45%程度、30 歳代は「どちらかといえば、家庭生活(家事・子育て・介護)よりも仕事や自分の活動を優先」が 30.4%、40 歳以上は「仕事や自分の活動と家庭生活(家事・子育て・介護)を同時に重視」が 25~40%程度で最も多くなっています。このほか、40 歳代は、「どちらかといえば、仕事や自分の活動よりも家庭生活(家事・子育て・介護)を優先」が 23.8%で他の年代と比べ多くなっています。

(5) ②希望

図 47 家庭生活で優先すること（希望、全体・男女別）



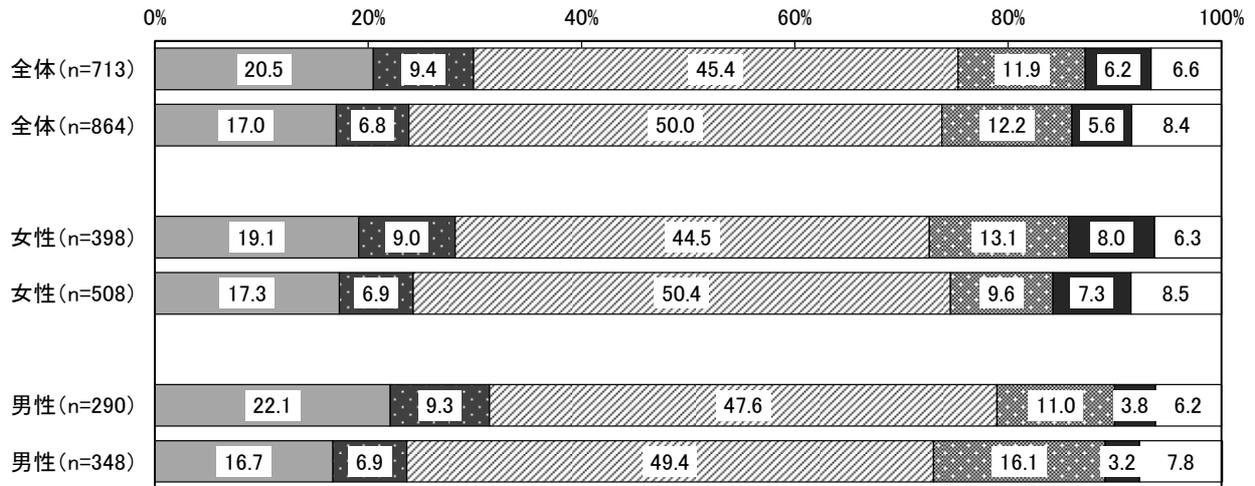
■全体の回答傾向

希望として家庭生活で優先することについて、「仕事や自分の活動と家庭生活(家事・子育て・介護)を同時に重視」が45.4%で最も多く、次いで「仕事や趣味・ボランティアなど、自分の活動に専念」が20.5%となっています。

■男女別の回答傾向

男女別にみて、回答傾向に大きな違いはみられません。

図 48 家庭生活で優先すること（希望、前回調査との比較）



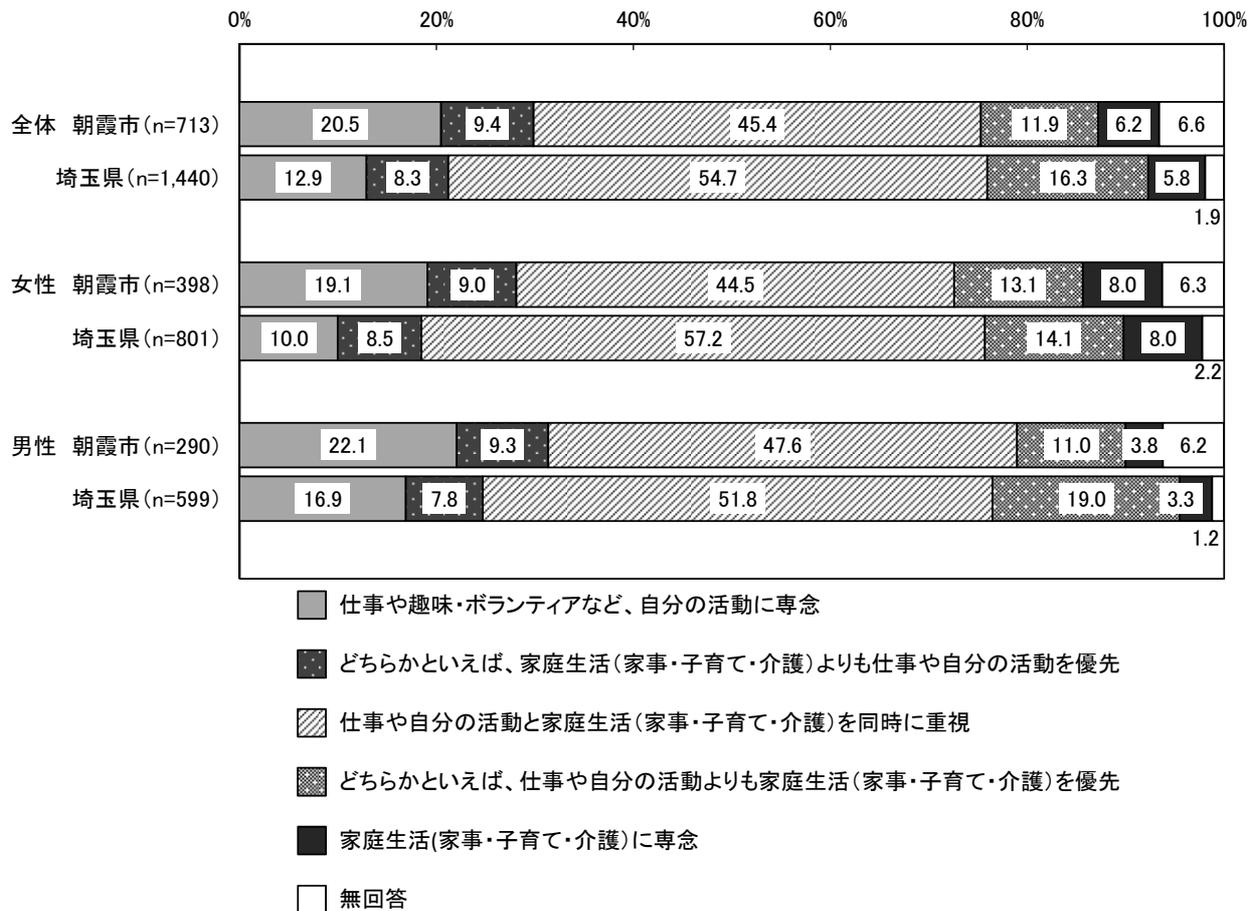
上段:今回調査
下段:前回調査

- 仕事や趣味・ボランティアなど、自分の活動に専念
- どちらかといえば、家庭生活(家事・子育て・介護)よりも仕事や自分の活動を優先
- ▨ 仕事や自分の活動と家庭生活(家事・子育て・介護)を同時に重視
- ▨ どちらかといえば、仕事や自分の活動よりも家庭生活(家事・子育て・介護)を優先
- 家庭生活(家事・子育て・介護)に専念
- 無回答

■ 前回調査（平成 22 年度）との比較

希望として家庭生活で優先することについて、前回調査と比べると、全体・男女共に「仕事や自分の活動と家庭生活(家事・子育て・介護)を同時に重視」が減少し、「仕事や趣味・ボランティアなど、自分の活動に専念」や「どちらかといえば、家庭生活(家事・子育て・介護)よりも仕事や自分の活動を優先」が増加する傾向がみられます。

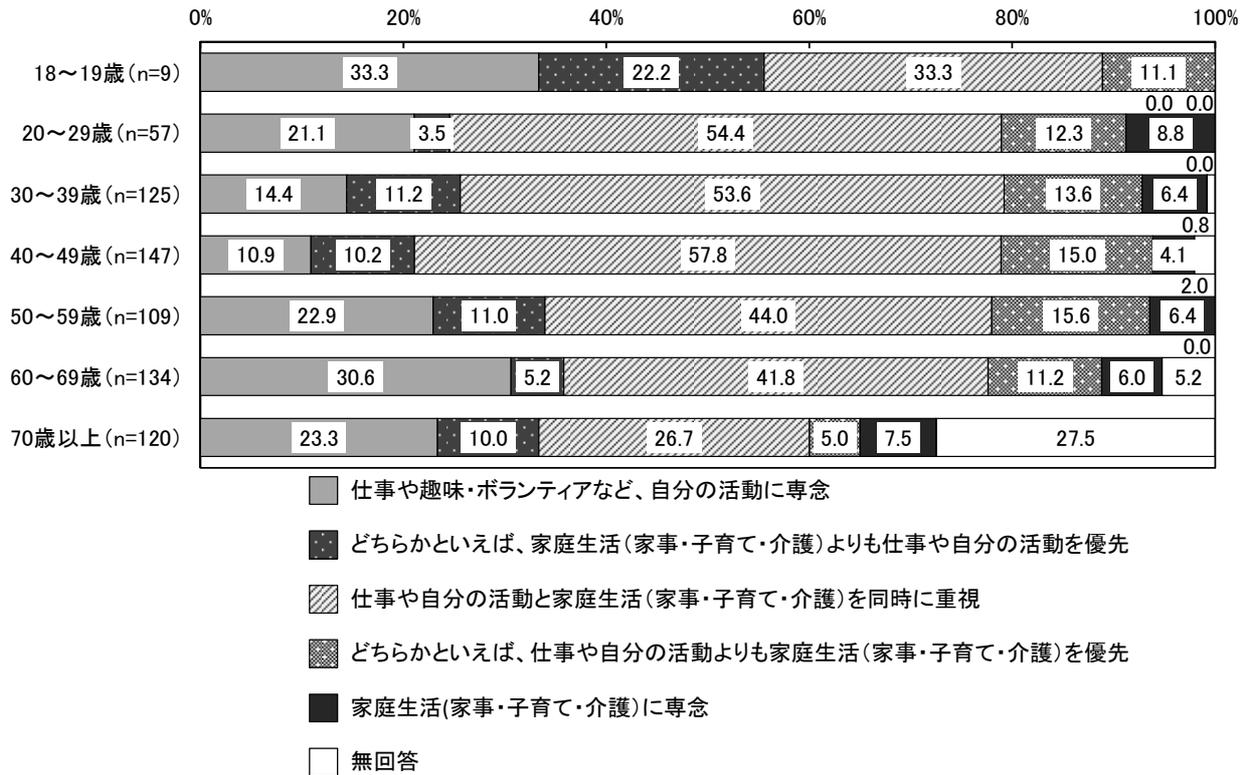
図 49 家庭生活上で優先すること（希望、埼玉県の調査との比較）



■埼玉県の調査との比較

希望として家庭生活上で優先することについて、埼玉県の調査と比べると、朝霞市は全体・男女共に「仕事や自分の活動と家庭生活(家事・子育て・介護)を同時に重視」が少ない傾向がみられ、全体は 9.3 ポイント、特に女性は 12.7 ポイント下回っています。一方、朝霞市は全体・男女共に「仕事や趣味・ボランティアなど、自分の活動に専念」が多い傾向がみられ、全体は 7.6 ポイント、特に女性は 9.1 ポイント上回っています。

図 50 家庭生活で優先すること（希望、年齢別）



■年齢別の回答傾向

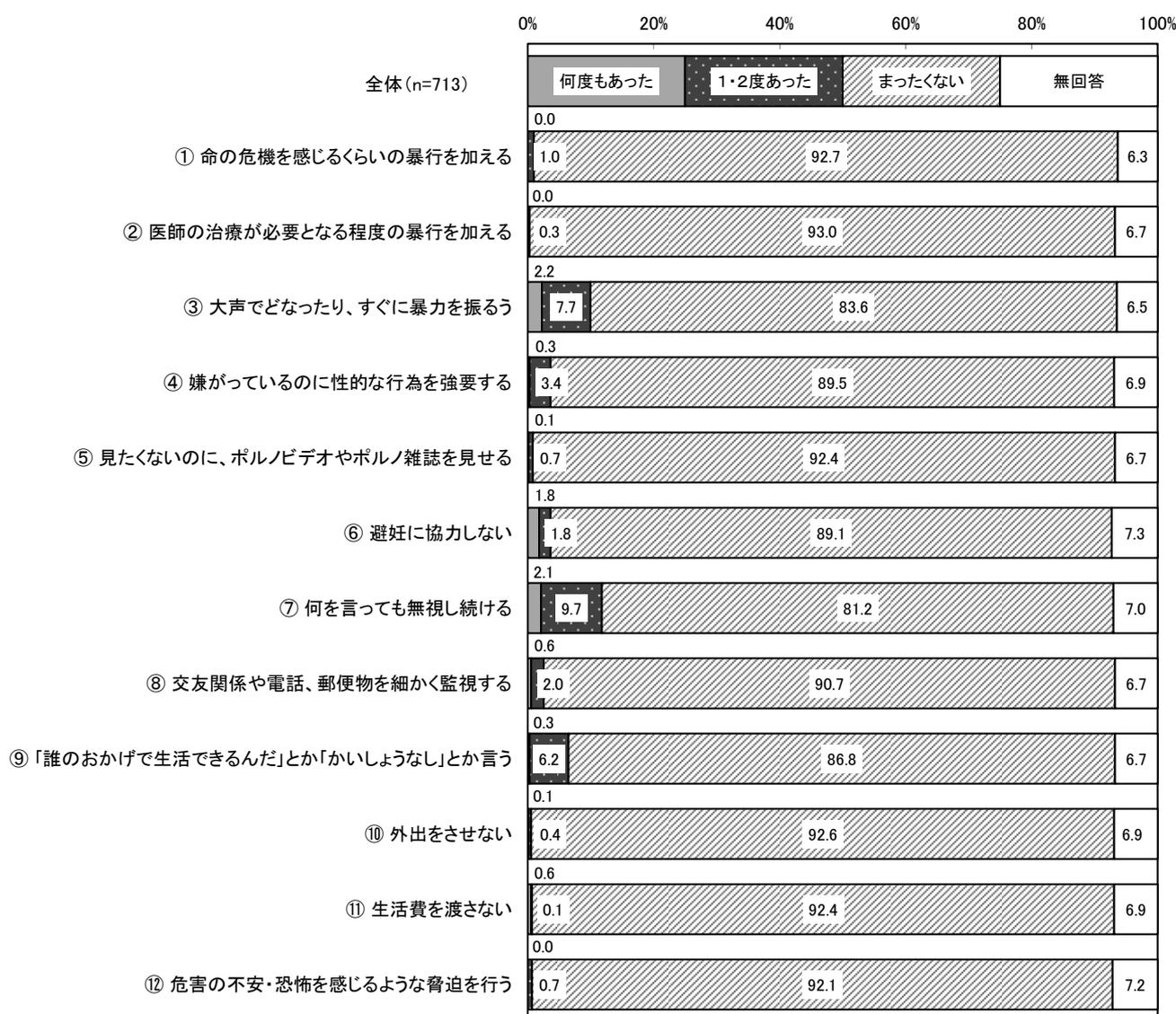
希望として家庭生活で優先することについて、10歳代を除くと年齢が低いほど「仕事や自分の活動と家庭生活(家事・子育て・介護)を同時に重視」が多い傾向がみられます。

3. 配偶者等からの暴力について

(1) 配偶者等に暴力を加えた経験

問 13 あなたはこれまでに、あなたの夫や妻（事実婚や別居中、離婚後を含む）、婚約者、恋人など、親密な関係の相手に対して、次のようなことをしたことがありますか。（それぞれ、あてはまる番号1つだけに○）

図 51 配偶者等に暴力を加えた経験（全体）



■全体の回答傾向

配偶者等に暴力を加えた経験について、「何度もあった」と「1・2度あった」の合計を多い順にみると、「⑦何を言っても無視し続ける」が11.8%、「③大声でどなったり、すぐに暴力を振るう」が9.9%、「⑨『誰のおかげで生活できるんだ』とか『かいしょうなし』とか言う」が6.5%となっています。また、「①命の危機を感じるくらいの暴行を加える」

ことが「1・2度あった」は1.0%、「②医師の治療が必要となる程度の暴行を加える」は0.3%で、配偶者等に暴力を加えた経験のある人は少なからずいることが分かります。

図 52 配偶者等に暴力を加えた経験（女性）

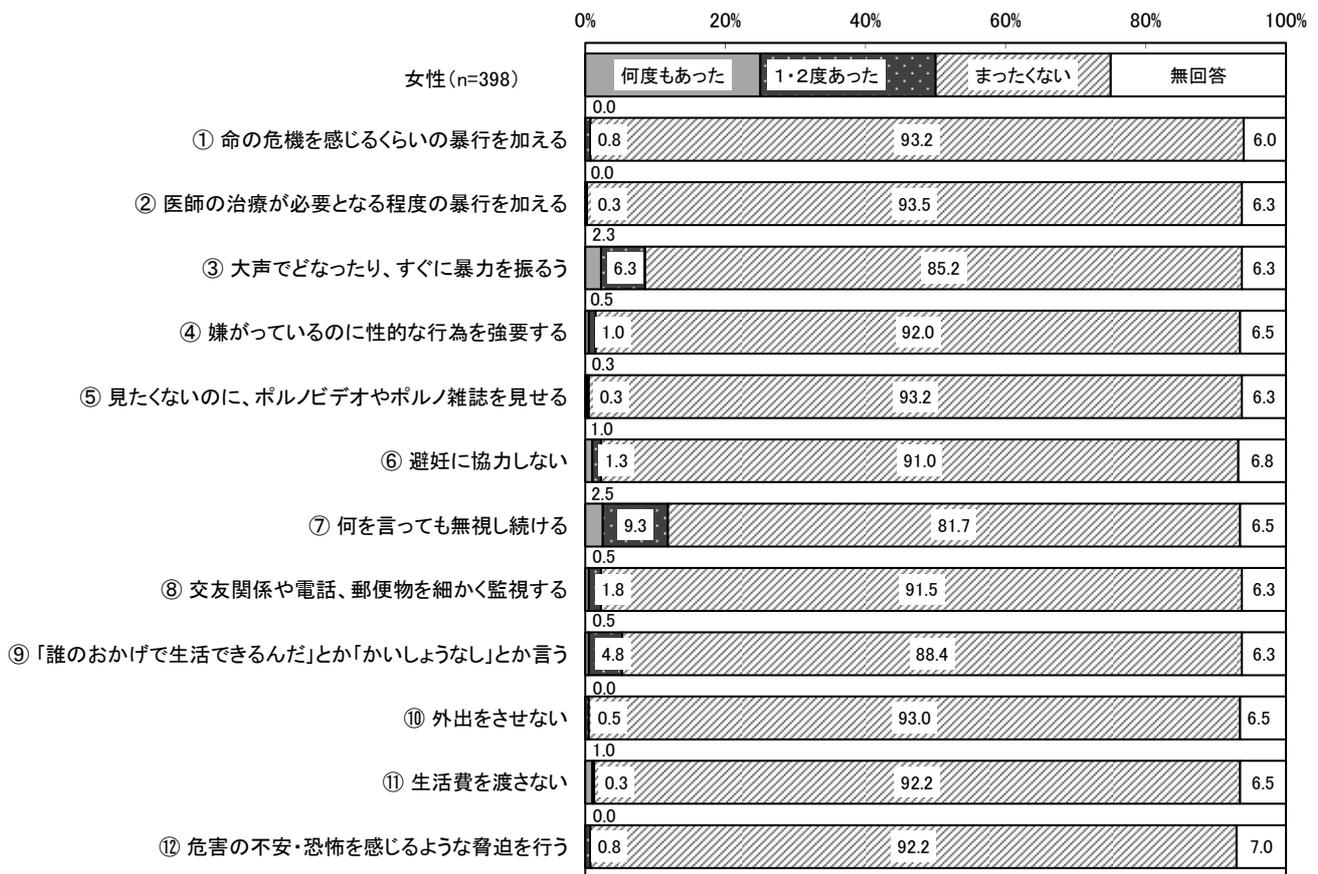
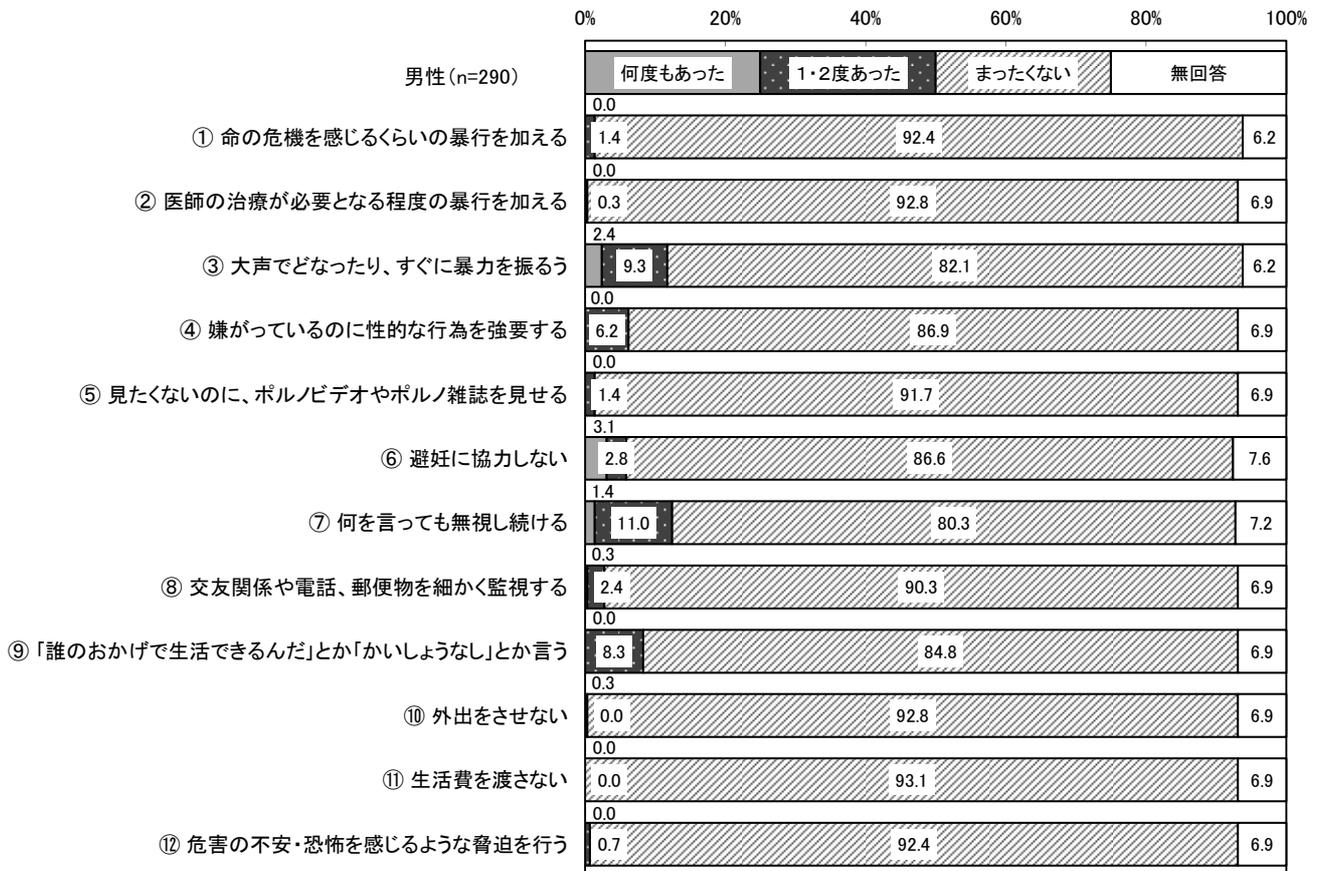


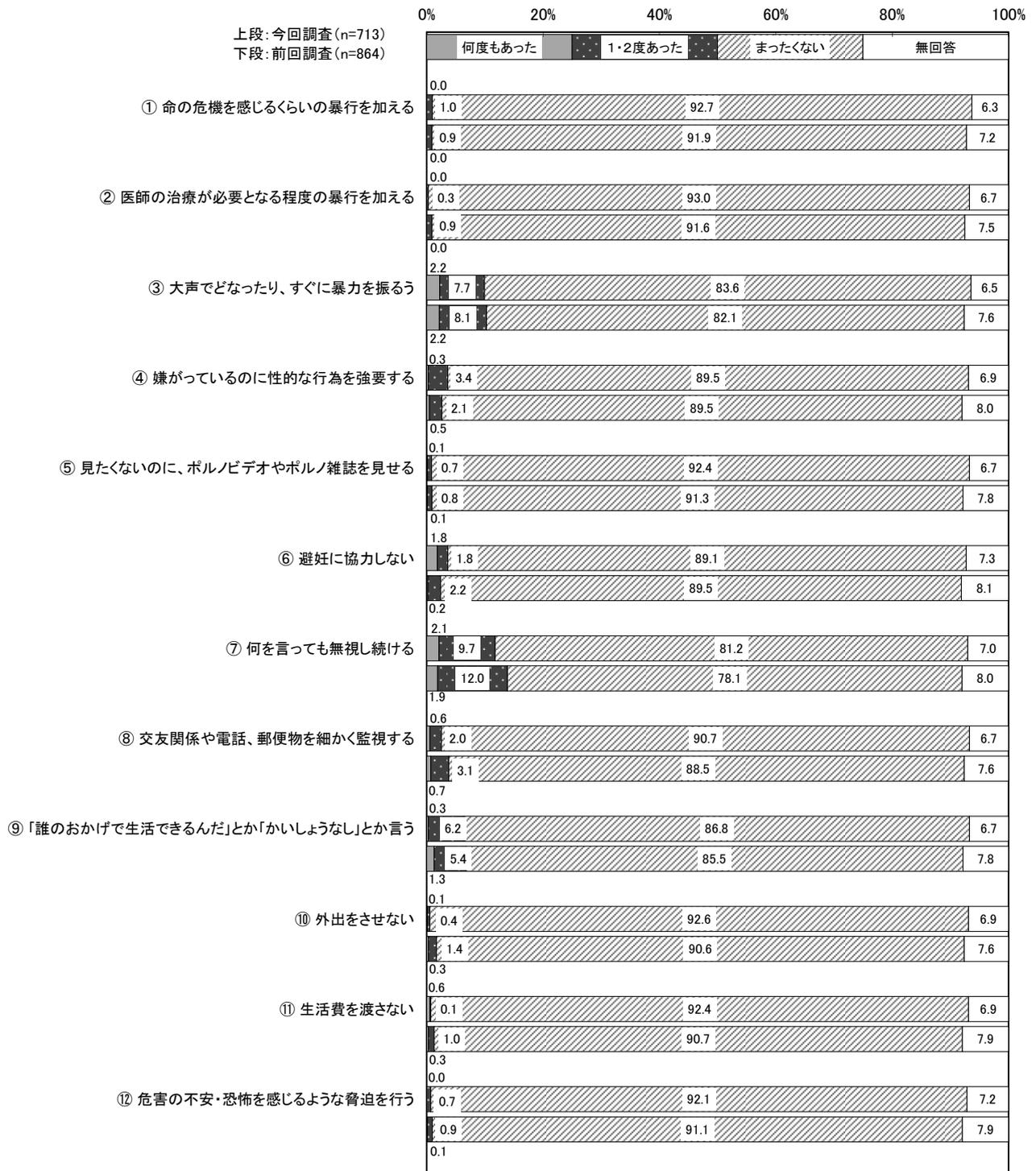
図 53 配偶者等に暴力を加えた経験（男性）



■男女別の回答傾向

男女別にみて、上位項目の回答傾向に大きな違いはありませんが、いずれの項目についても、男性は女性と比べ、「何度もあった」と「1・2度あった」の回答割合が多く、暴力を加えた経験が多い傾向がみられます。多い順にみると、「⑦何を言っても無視し続ける」は女性が11.8%、男性が12.4%、「③大声でどなったり、すぐに暴力を振るう」は女性が8.6%、男性が11.7%、「⑨『誰のおかげで生活できるんだ』とか『かいしょうなし』とか言う」は女性が5.3%、男性が8.3%となっています。

図 54 配偶者等に暴力を加えた経験（前回調査との比較）



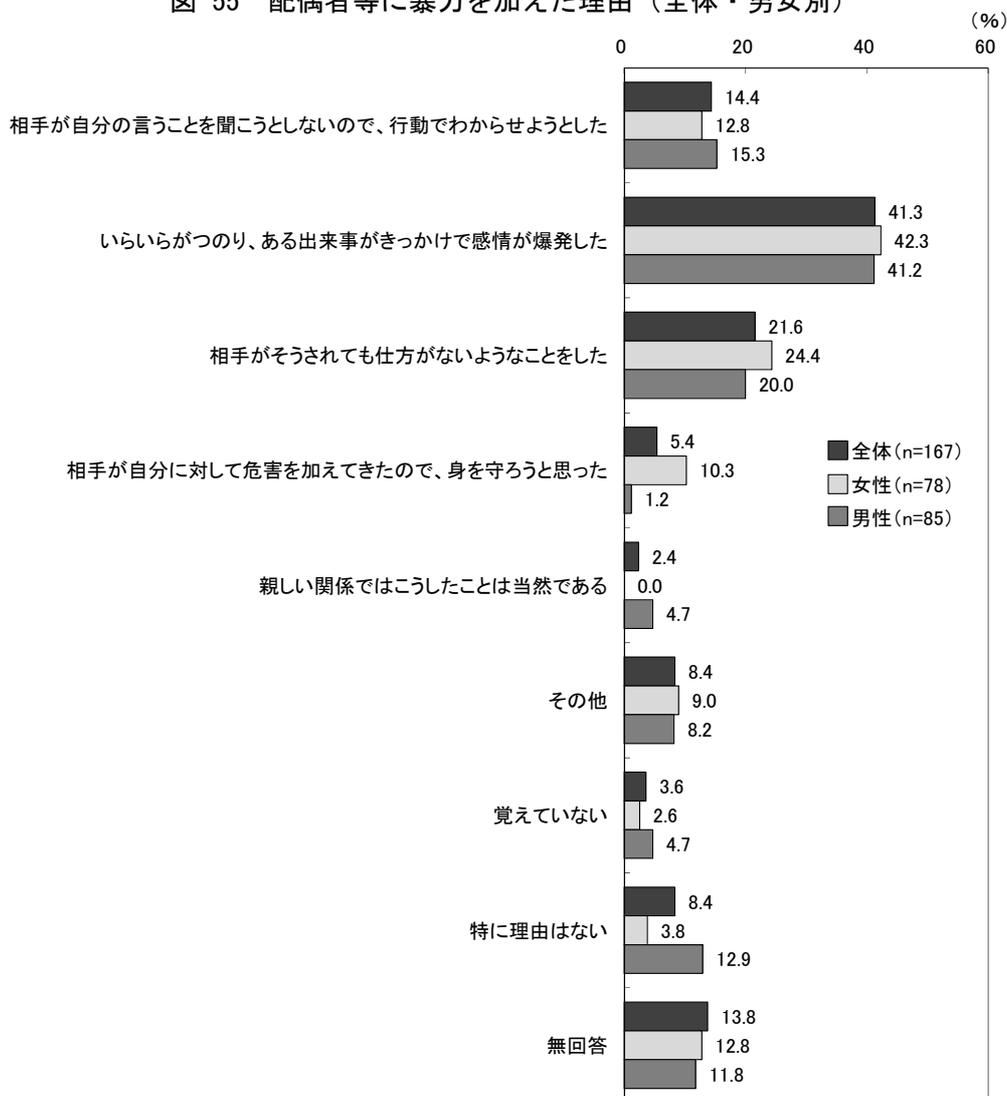
■ 前回調査（平成 22 年度）との比較

前回調査と比べ回答傾向に大きな違いはみられません。

(2) 配偶者等に暴力を加えた理由

問 13-1 問 13 (①から⑫まで) の答えで、1つでも「何度もあった」又は「1・2度あった」に○をつけた方におたずねします。あなたが問 13 であげたような行為をするに至ったきっかけは何ですか。(あてはまる番号すべてに○)

図 55 配偶者等に暴力を加えた理由 (全体・男女別)



■全体の回答傾向

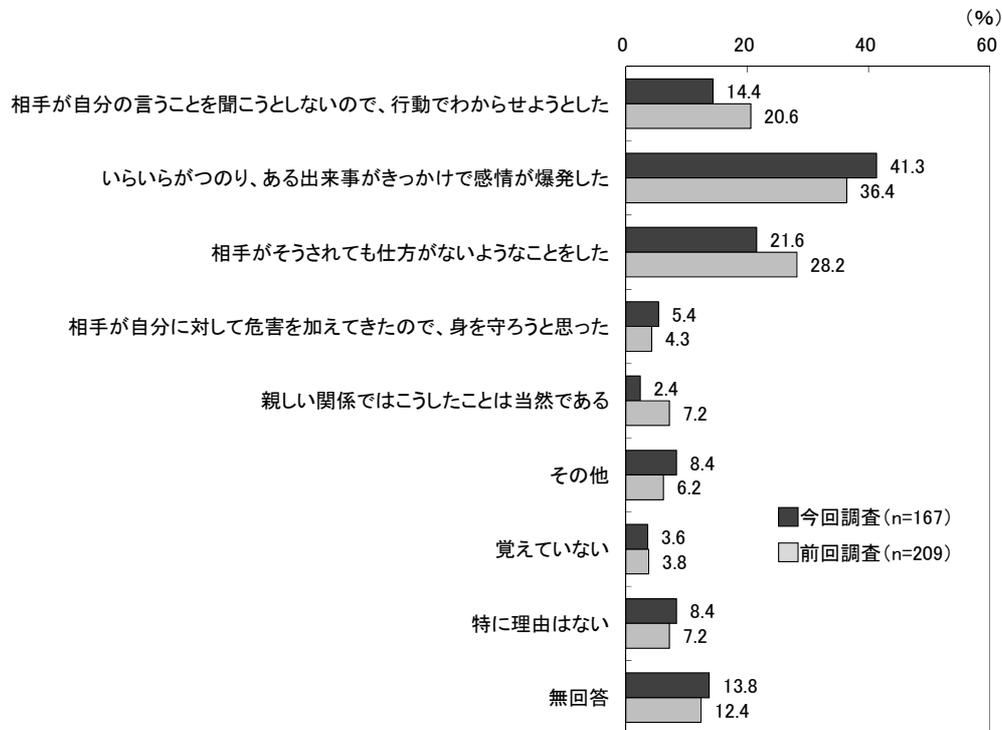
配偶者等に暴力を加えた理由について、「いらいらがつり、ある出来事がきっかけで感情が爆発した」が 41.3%、次いで、「相手がそうされても仕方がないようなことをした」が 21.6%、「相手が自分の言うことを聞こうとしないので、行動でわからせようとした」が 14.4%で上位となっています。

■男女別の回答傾向

男女別にみて回答傾向に大きな違いはみられませんが、女性は「相手が自分に対して危害を加えてきたので、身を守ろうと思った」が 10.3%で男性 (1.2%) を 9.1 ポイント上

回っています。一方、男性は「特に理由はない」が12.9%で女性（3.8%）を9.1ポイント上回っています。

図 56 配偶者等に暴力を加えた理由（前回調査との比較）



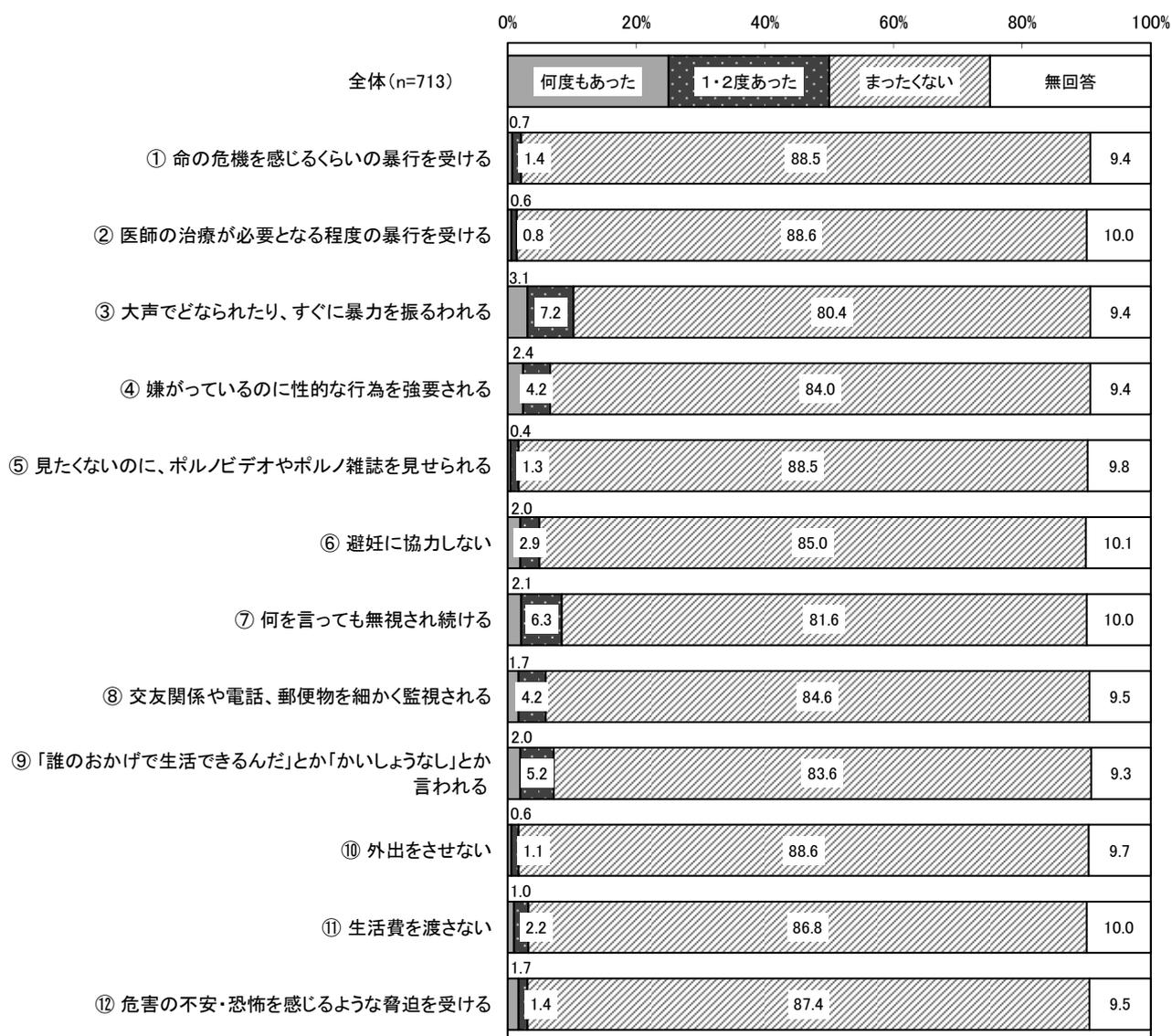
■前回調査（平成 22 年度）との比較

前回調査と比べると、「いろいろながつり、ある出来事がきっかけで感情が爆発した」は36.4%から41.3%と4.9ポイント増加しています。一方、「相手がそうされても仕方がないようなことをした」は28.2%から21.6%と6.6ポイント、「相手が自分の言うことを聞こうとしないので、行動でわからせようとした」は20.6%から14.4%と6.2ポイント減少しています。

(3) 配偶者等から暴力を受けた経験

問 14 あなたはこれまでに、あなたの夫や妻（事実婚や別居中、離婚後を含む）、婚約者、恋人など、親密な関係の相手から、次のようなことをされたことがありますか。
（それぞれ、あてはまる番号1つだけに○）

図 57 配偶者等から暴力を受けた経験（全体）



■全体の回答傾向

配偶者等から暴力を受けた経験について、「何度もあった」と「1・2度あった」の合計を多い順にみると、「③大声でどなられたり、すぐに暴力を振るわれる」が10.3%、「⑦何を言っても無視され続ける」が8.4%、「⑨『誰のおかげで生活できるんだ』とか『かいしようなし』とか言われる」が7.2%となっています。また、「①命の危機を感じるくらいの暴行を受ける」が2.1%、「②医師の治療が必要となる程度の暴行を受ける」が1.4%で、配偶者等から暴力を受けた経験のある人は少なからずいることが分かります。

図 58 配偶者等から暴力を受けた経験（女性）

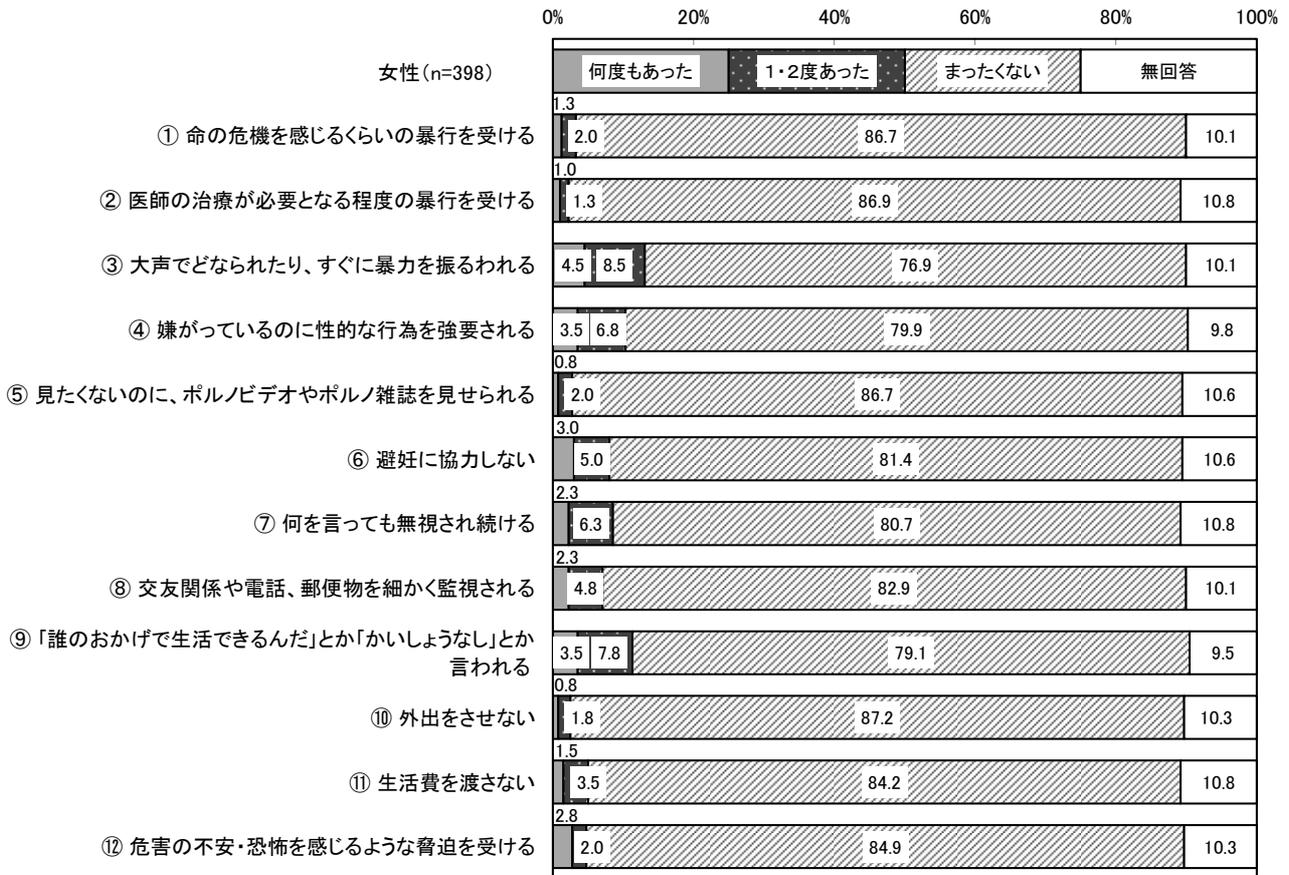
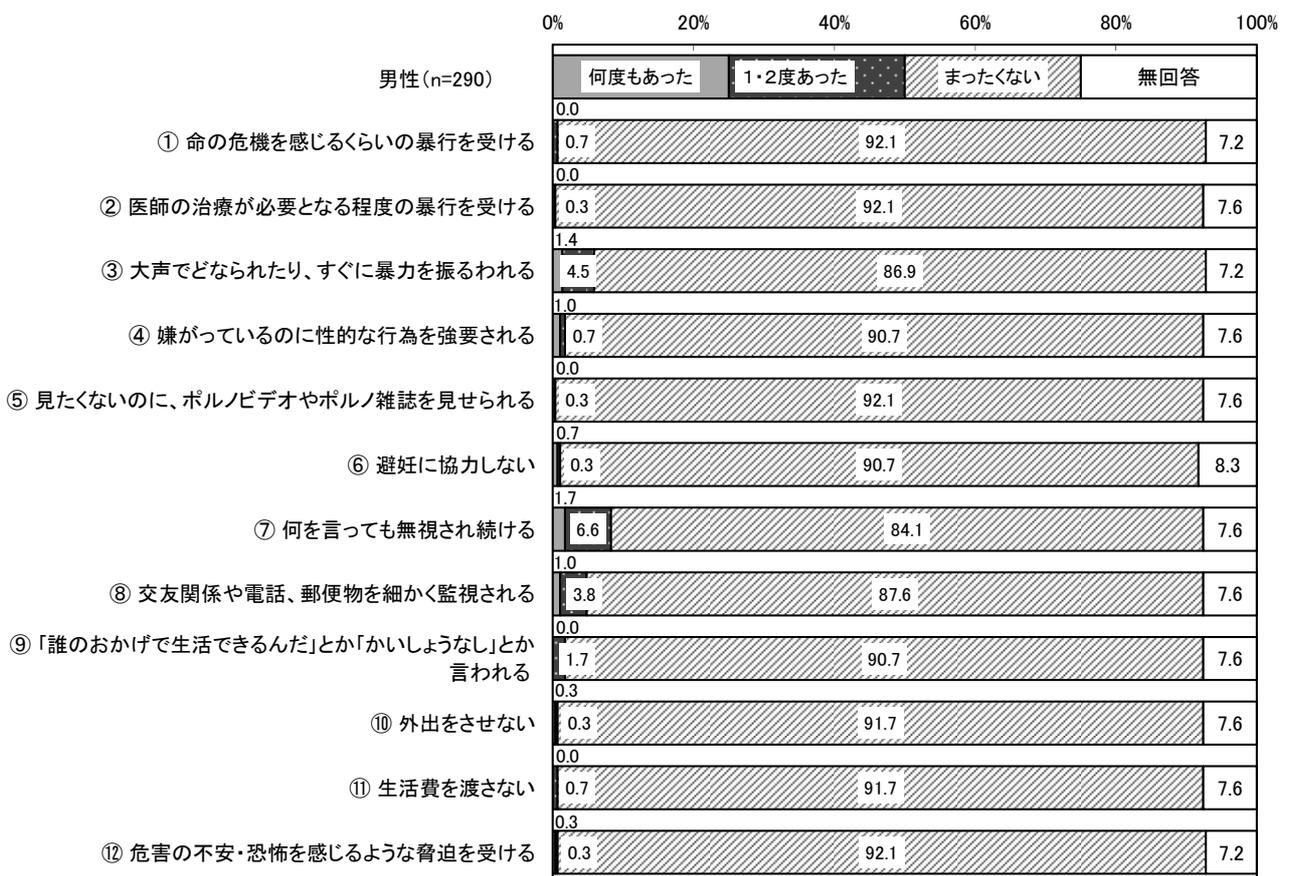


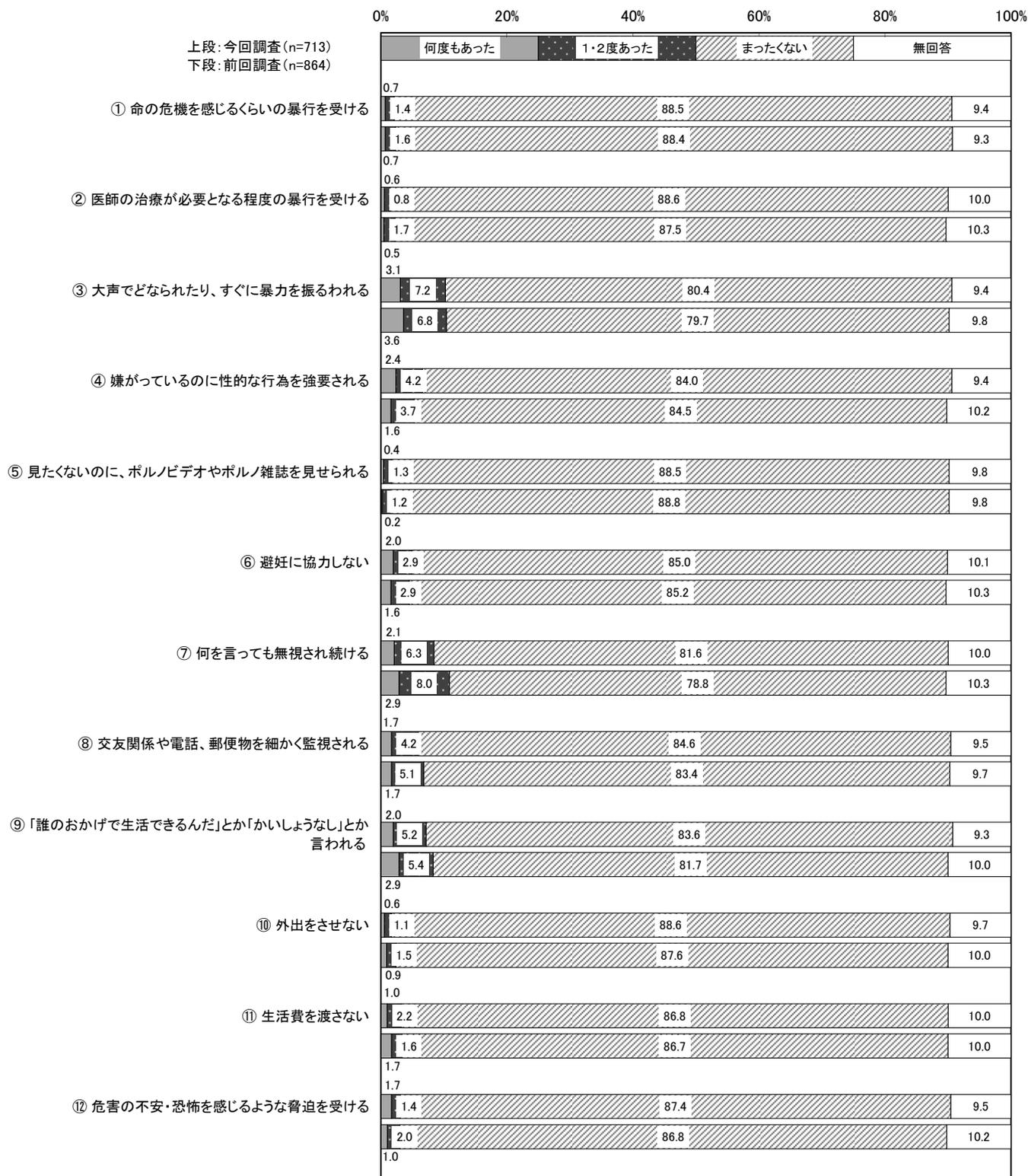
図 59 配偶者等から暴力を受けた経験（男性）



■男女別の回答傾向

すべての項目で、女性は男性と比べて回答割合が多い傾向がみられます。中でも女性は、「③大声でどなられたり、すぐに暴力を振るわれる」が13.0%で男性（5.9%）を7.1ポイント、「⑨『誰のおかげで生活できるんだ』とか『かいしょうなし』とか言われる」が11.3%で男性（1.7%）を9.6ポイント、「④嫌がっているのに性的な行為を強要される」が10.3%で男性（1.7%）を8.6ポイント上回っています。

図 60 配偶者等から暴力を受けた経験（前回調査との比較）



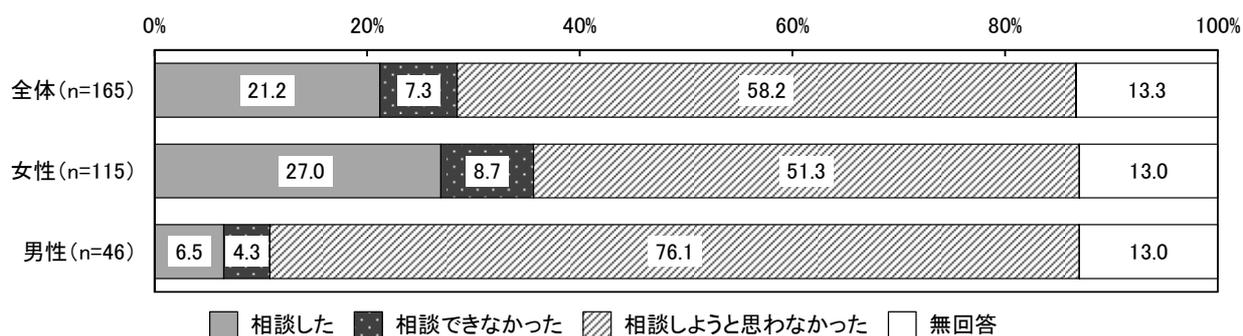
■ 前回調査（平成 22 年度）との比較

前回調査と比べ回答傾向に大きな違いはみられません。

(4) 暴力を受けた時の相談の有無

問 14-1 問 14 (①から⑫まで) の答えで、1つでも「何度もあった」又は「1・2度あった」に○をつけた方におたずねします。夫や妻（事実婚や別居中、離婚後を含む）、婚約者、恋人など、親密な関係の相手から問 14 のような内容の暴力（ドメスティック・バイオレンス（DV））を受けたとき、誰かに相談しましたか。（あてはまる番号1つだけに○）

図 61 暴力を受けた時の相談の有無（全体・男女別）



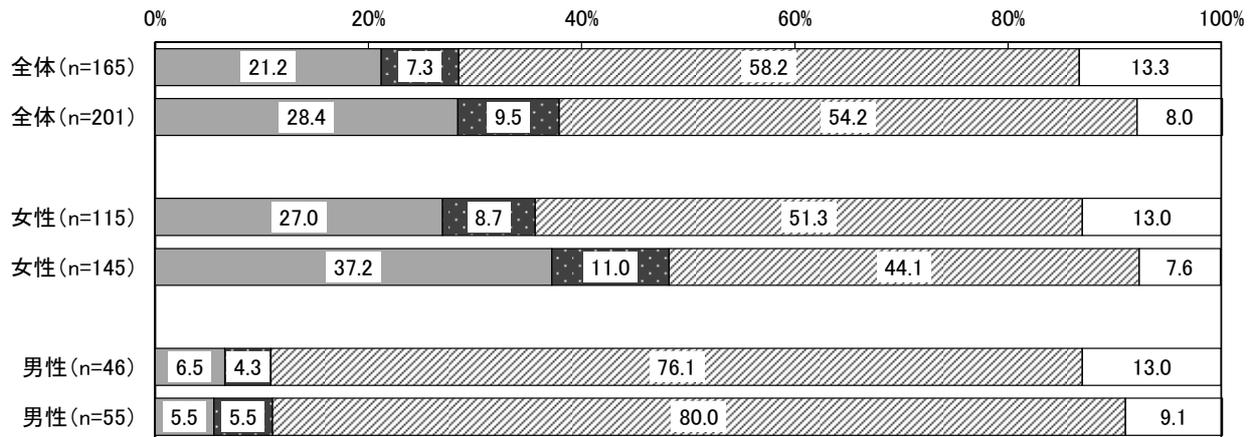
■全体の回答傾向

暴力を受けた時の相談の有無について、「相談しようと思わなかった」が 58.2%で最も多く、「相談した」が 21.2%、「相談できなかった」が 7.3%となっています。

■男女別の回答傾向

男女別にみると、女性は「相談した」が 27.0%で男性（6.5%）を 20.5 ポイント上回っています。一方、男性は「相談しようと思わなかった」が 76.1%で女性（51.3%）を 24.8 ポイント上回っており、暴力を受けた時に、男性は女性と比べて相談しない傾向がみられます。

図 62 暴力を受けた時の相談の有無（前回調査との比較）



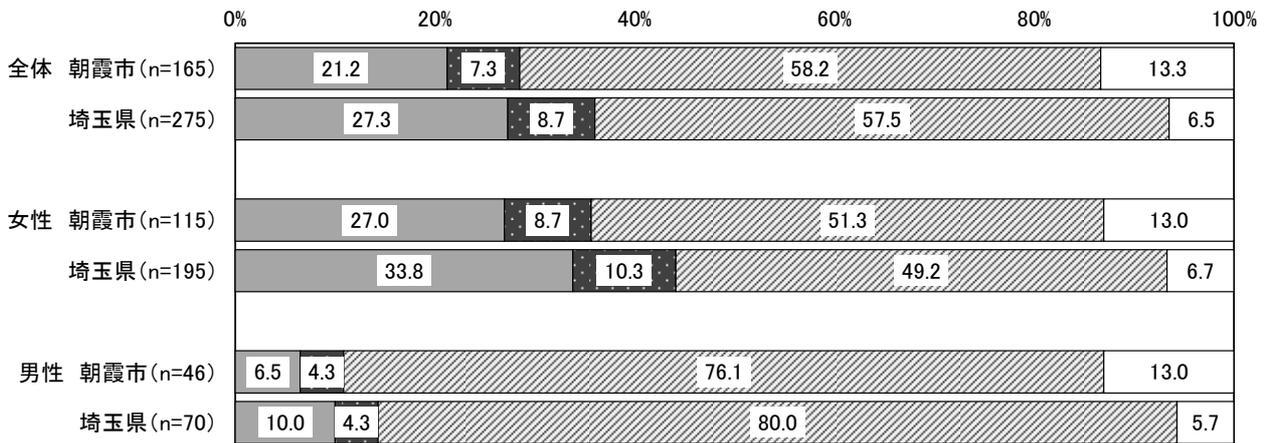
上段：今回調査
下段：前回調査
■ 相談した ■ 相談できなかった ▨ 相談しようと思わなかった □ 無回答

■ 前回調査（平成 22 年度）との比較

全体について、前回調査と比べると、「相談した」が減少し、「相談しようと思わなかった」が増加する傾向がみられます。

特に女性は、「相談した」が 37.2%から 27.0%と 10.2 ポイント減少する一方、「相談しようと思わなかった」が 44.1%から 51.3%と 7.2 ポイント増加しています。

図 63 暴力を受けた時の相談の有無（埼玉県の調査との比較）

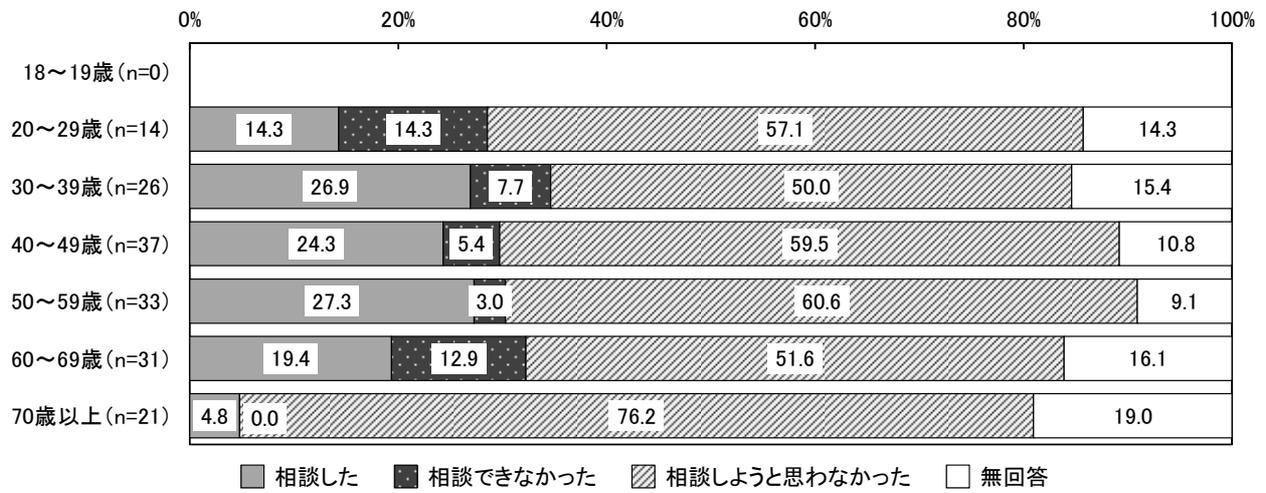


■ 相談した ■ 相談できなかった ▨ 相談しようと思わなかった □ 無回答

■ 埼玉県の調査との比較

埼玉県の調査と比べると、朝霞市は全体・男女共に「相談した」が少ない傾向がみられ、特に女性は 6.8 ポイント下回っています。

図 64 暴力を受けた時の相談の有無（年齢別）



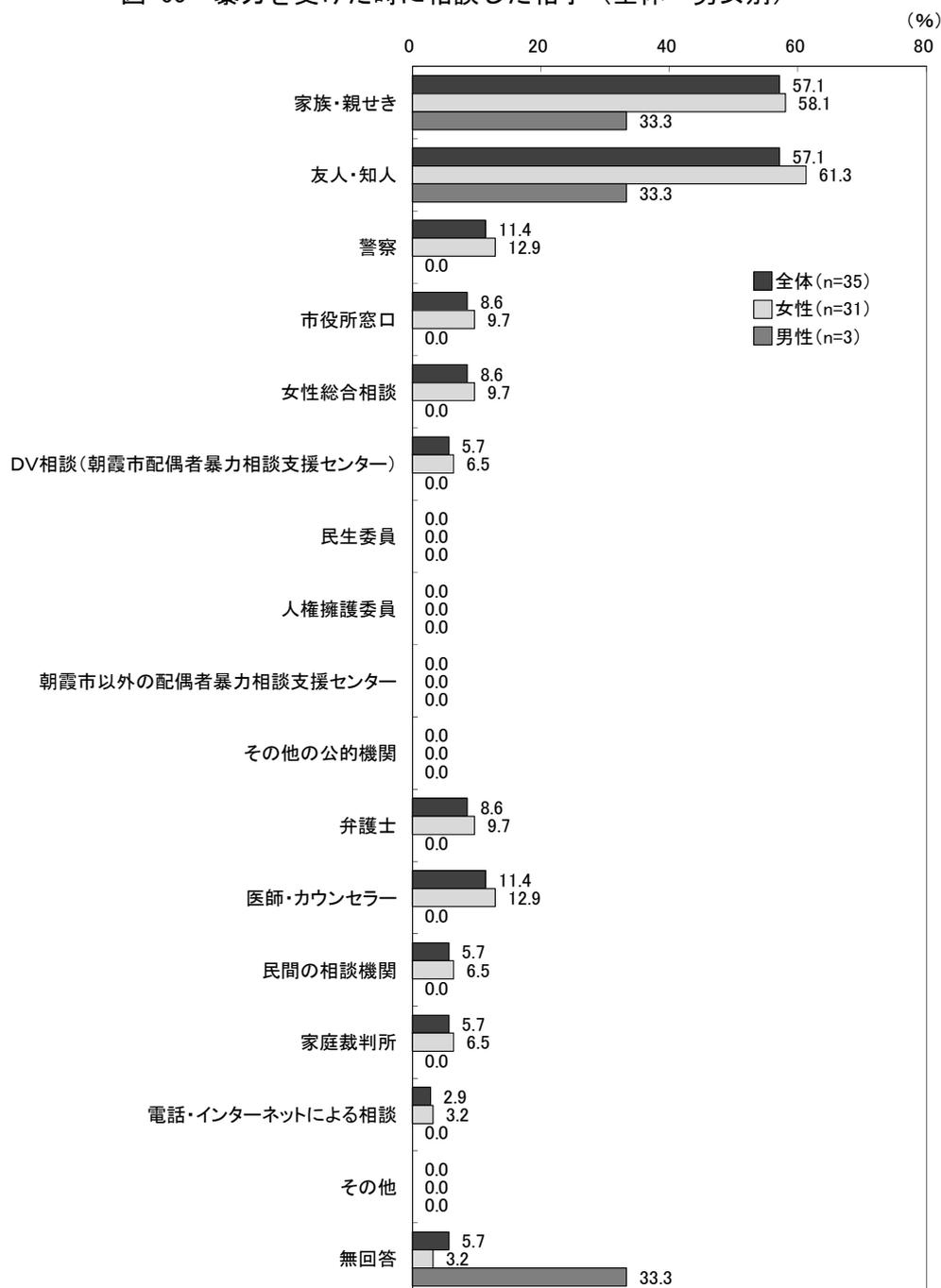
■年齢別の回答傾向

年齢別にみると、20歳代及び60歳代は「相談できなかった」が10%を超えており、70歳以上は「相談しようと思わなかった」が76.2%で他の年代と比べ多くなっています。

(5) 暴力を受けた時に相談した相手

問 14-2 問 14-1 の答えで「1 相談した」に○をつけた方におたずねします。誰（どこ）に相談しましたか。（あてはまる番号すべてに○）

図 65 暴力を受けた時に相談した相手（全体・男女別）



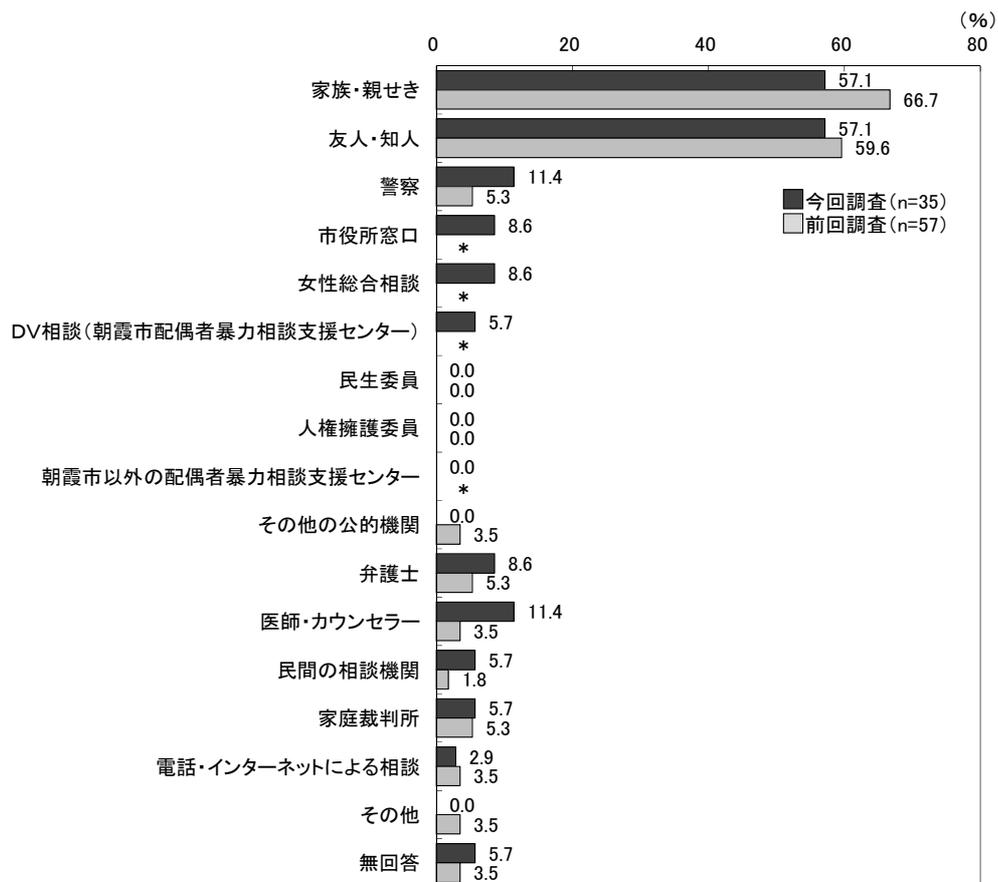
■全体の回答傾向

暴力を受けた時に相談した相手について、「家族・親せき」と「友人・知人」が共に57.1%で最も多くなっています。このほか、「警察」「医師・カウンセラー」が11.4%、「市役所窓口」「女性総合相談」「弁護士」が8.6%となっています。

■男女別の回答傾向

男女共に「家族・親せき」と「友人・知人」が上位となっており、特に女性は「友人・知人」が61.3%、「家族・親せき」が58.1%で男性と比べ多くなっています。

図 66 暴力を受けた時に相談した相手（前回調査との比較、全体）



注：上記の*印は、今回調査と前回調査で選択肢が異なるものを表す。前回調査では、「市役所窓口」と「女性総合相談」が同一選択肢で、また、「DV相談（朝霞市配偶者暴力相談支援センター）」と「朝霞市以外の配偶者暴力相談支援センター」の選択肢はなかった。

(参考：前回調査「市役所窓口・女性総合相談」=全体 1.8%、女性 1.9%、男性 0.0%)。

図 67 暴力を受けた時に相談した相手（前回調査との比較、女性）

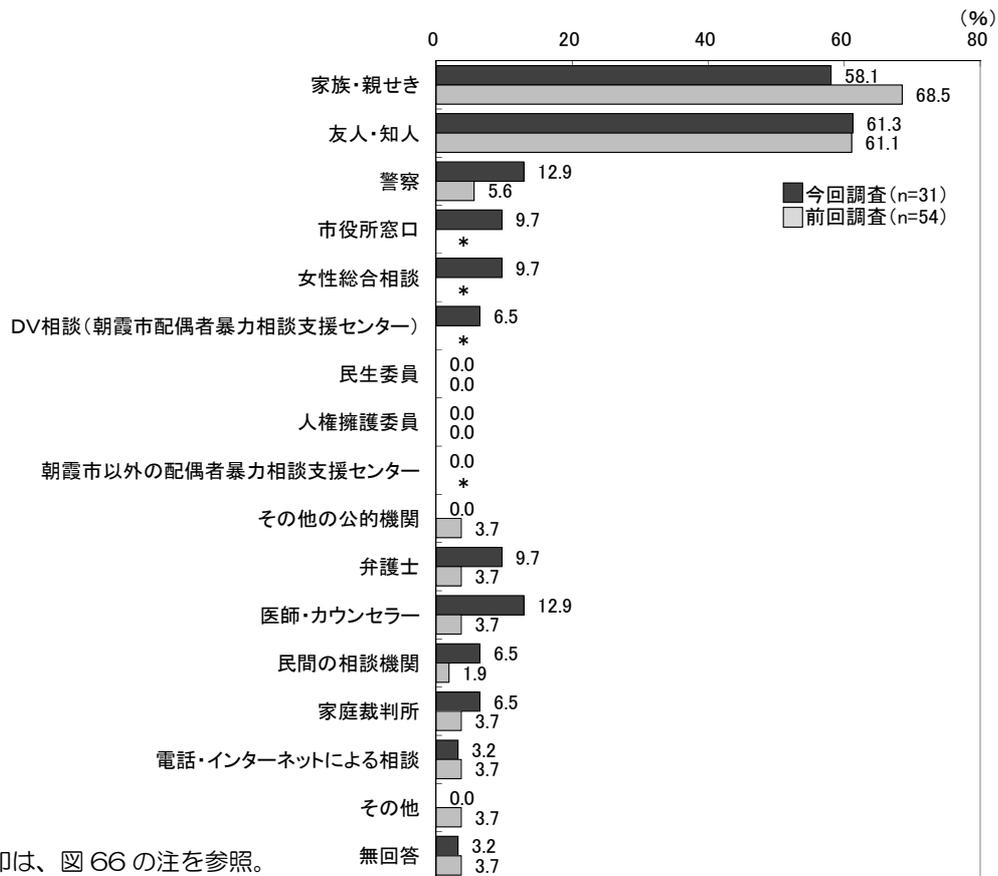
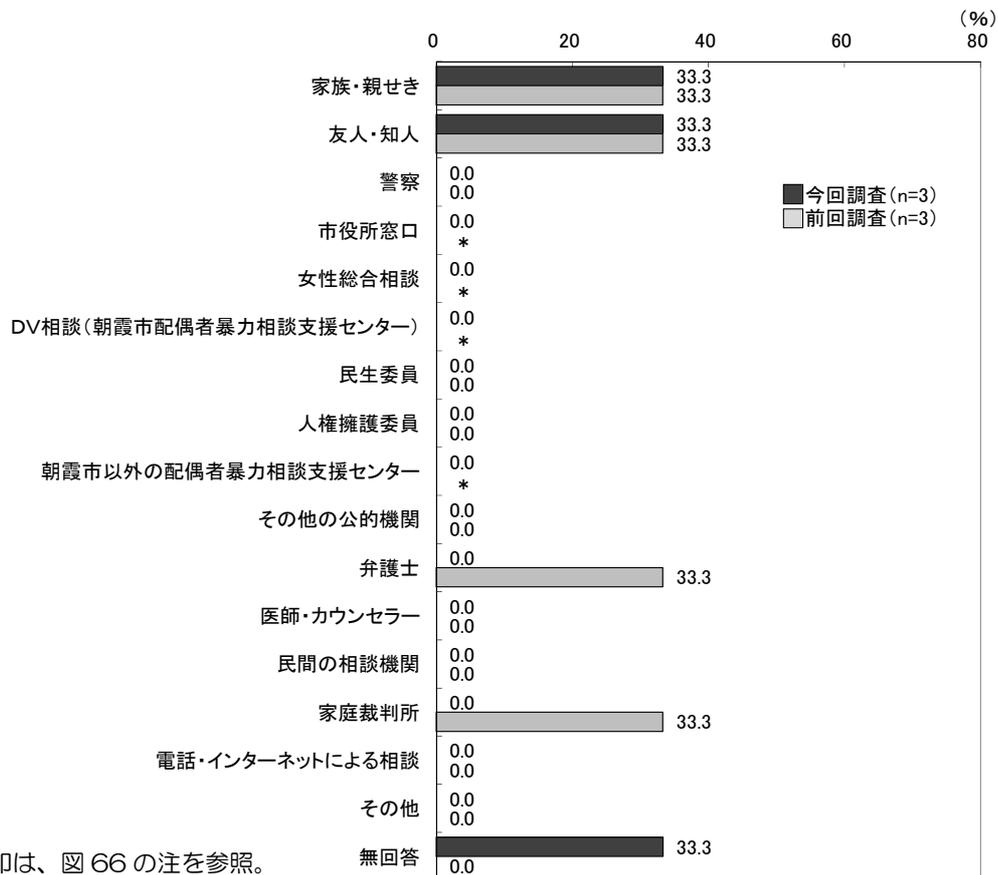


図 68 暴力を受けた時に相談した相手（前回調査との比較、男性）



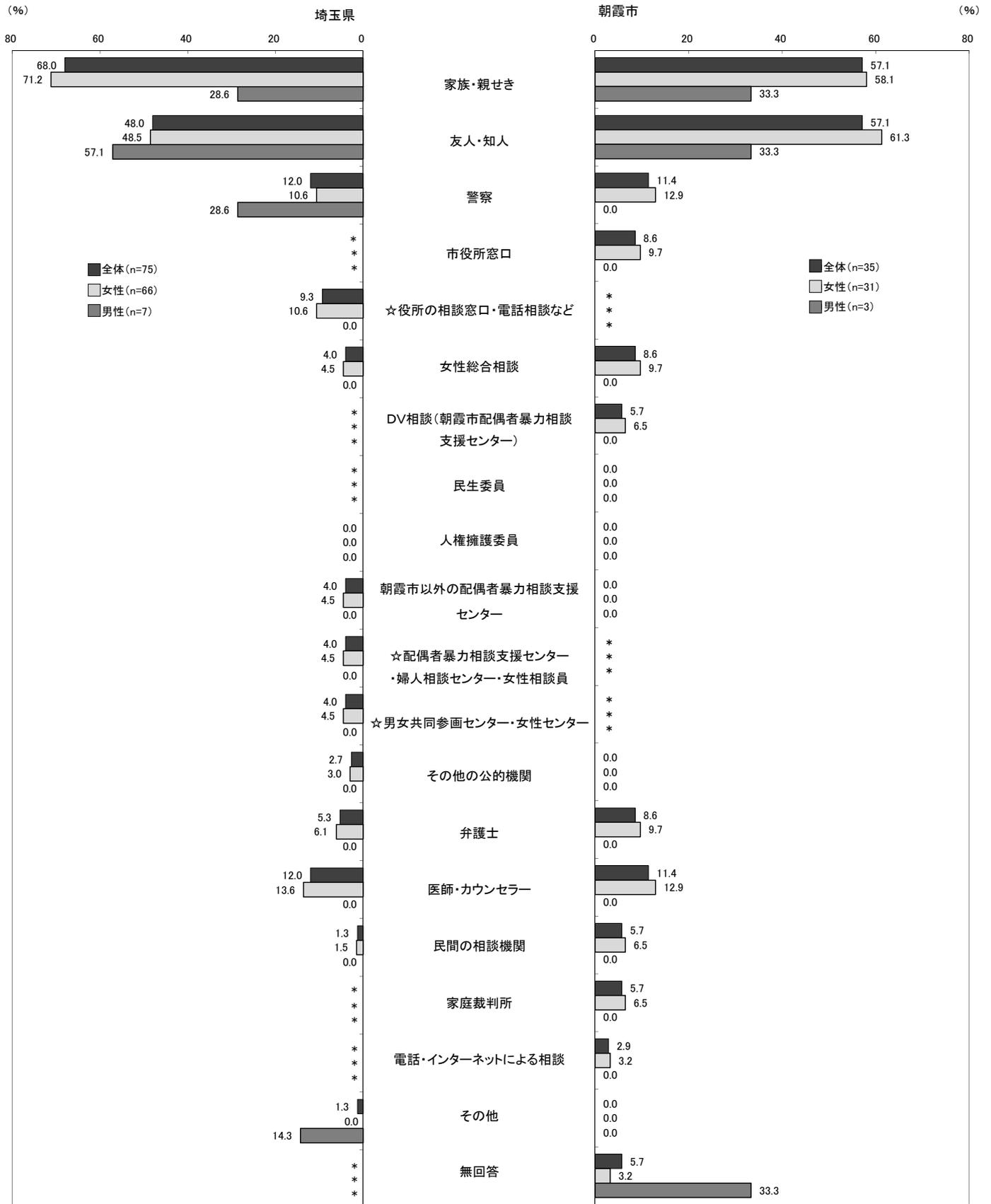
■前回調査（平成 22 年度）との比較

前回調査と比べると、「家族・親せき」が 66.7%から 57.1%と 9.6 ポイント減少しています。一方、「警察」「医師・カウンセラー」などが増加しています。また、「市役所窓口」「女性総合相談」に加え、平成 23 年 4 月に開始した「DV相談（朝霞市配偶者暴力相談支援センター）」の利用が新たにみられます。

本市では、平成 25 年 1 月、朝霞市女性センター（それいゆぷらざ）を中央公民館・コミュニティセンター内に開設し、「女性総合相談」及び「DV相談（朝霞市配偶者暴力相談支援センター）」を市役所から場所を移して実施しています。朝霞市女性センター（それいゆぷらざ）の開設から 1 年以上経過し、センターの機能が市民に認知されてきていることがうかがえます。

女性は、全体と同様の回答傾向がみられ、男性は回答傾向に大きな違いはみられません。

図 69 暴力を受けた時に相談した相手（埼玉県の調査との比較、全体・男女別）



注：上記の*印は、朝霞市あるいは埼玉県の調査に選択肢がないものを表す。なお☆印を付した項目が、埼玉県調査独自の選択肢である。

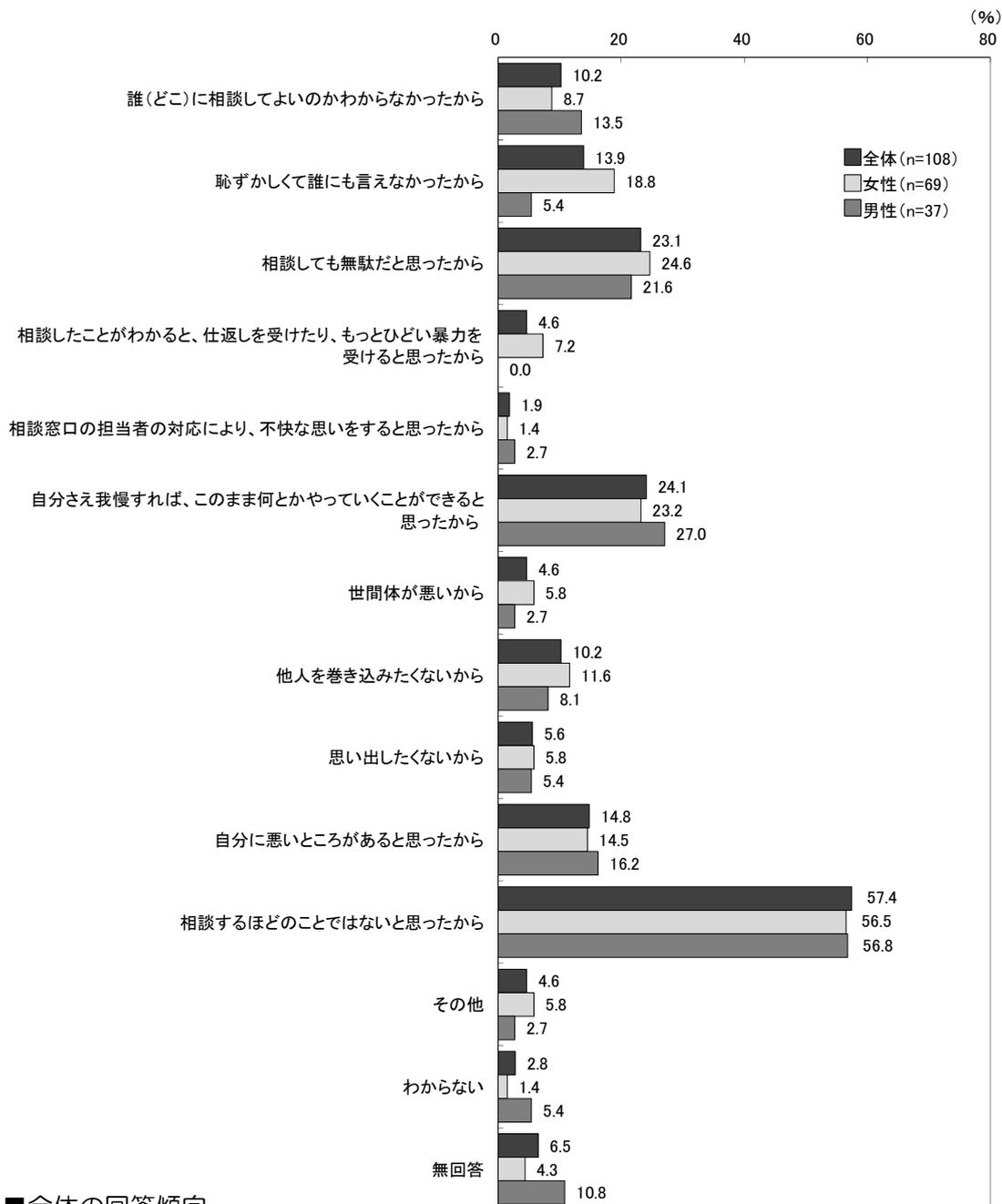
■ 埼玉県との比較

埼玉県の調査と比べると、朝霞市は「家族・親せき」が少ない傾向がみられ、全体で 10.9 ポイント下回っています。一方、「友人・知人」が多い傾向がみられ、全体で 9.1 ポイント上回っています。

(6) 暴力を受けた時に相談しなかった理由

問 14-3 問 14-1 の答えで「2 相談できなかった」「3 相談しようと思わなかった」に○をつけた方におたずねします。その理由はなぜですか。
(あてはまる番号すべてに○)

図 70 暴力を受けた時に相談しなかった理由（全体・男女別）



■全体の回答傾向

暴力を受けた時に相談しなかった理由について、「相談するほどのことではないと思ったから」が57.4%で最も多く、次いで「自分さえ我慢すれば、このまま何とかやっていけると思ったから」が24.1%、「相談しても無駄だと思ったから」が23.1%で上位となっています。

■男女別の回答傾向

男女別にみて、上位項目の回答傾向に大きな違いはみられませんが、第4位以降の項目について、女性は「恥ずかしくて誰にも言えなかったから」が18.8%で男性（5.4%）を13.4ポイント上回っています。一方、男性は「誰（どこ）に相談してよいのかわからなかったから」が13.5%で女性（8.7%）を4.8ポイント上回っています。

図 71 暴力を受けた時に相談しなかった理由（前回調査との比較、全体）

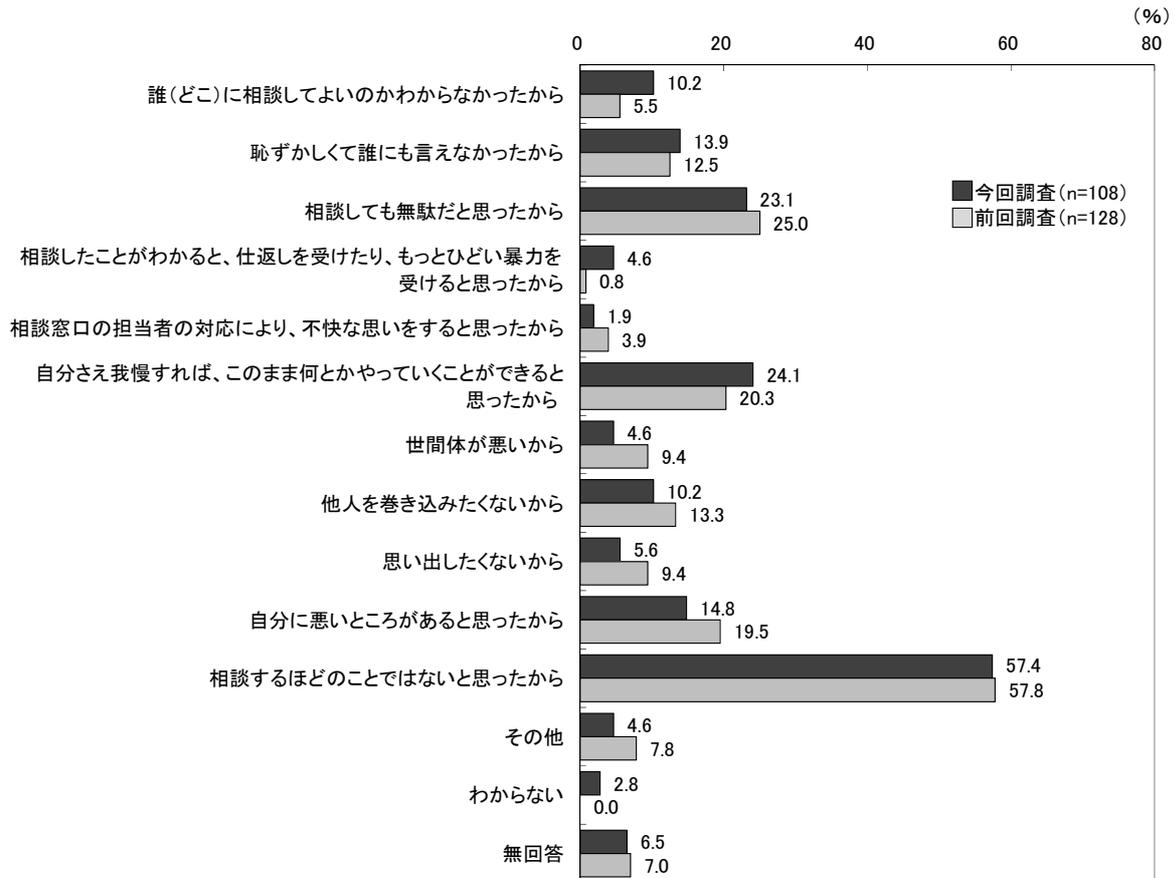


図 72 暴力を受けた時に相談しなかった理由（前回調査との比較、女性）

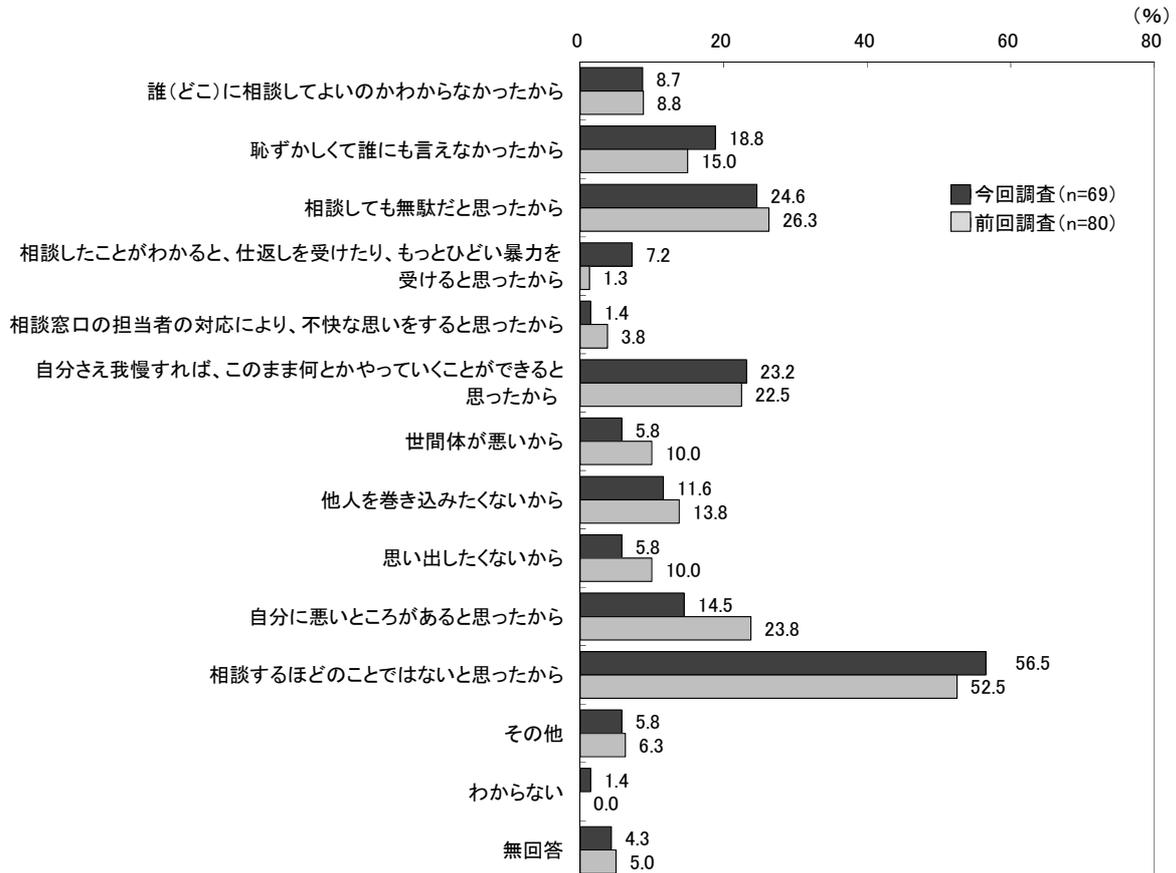
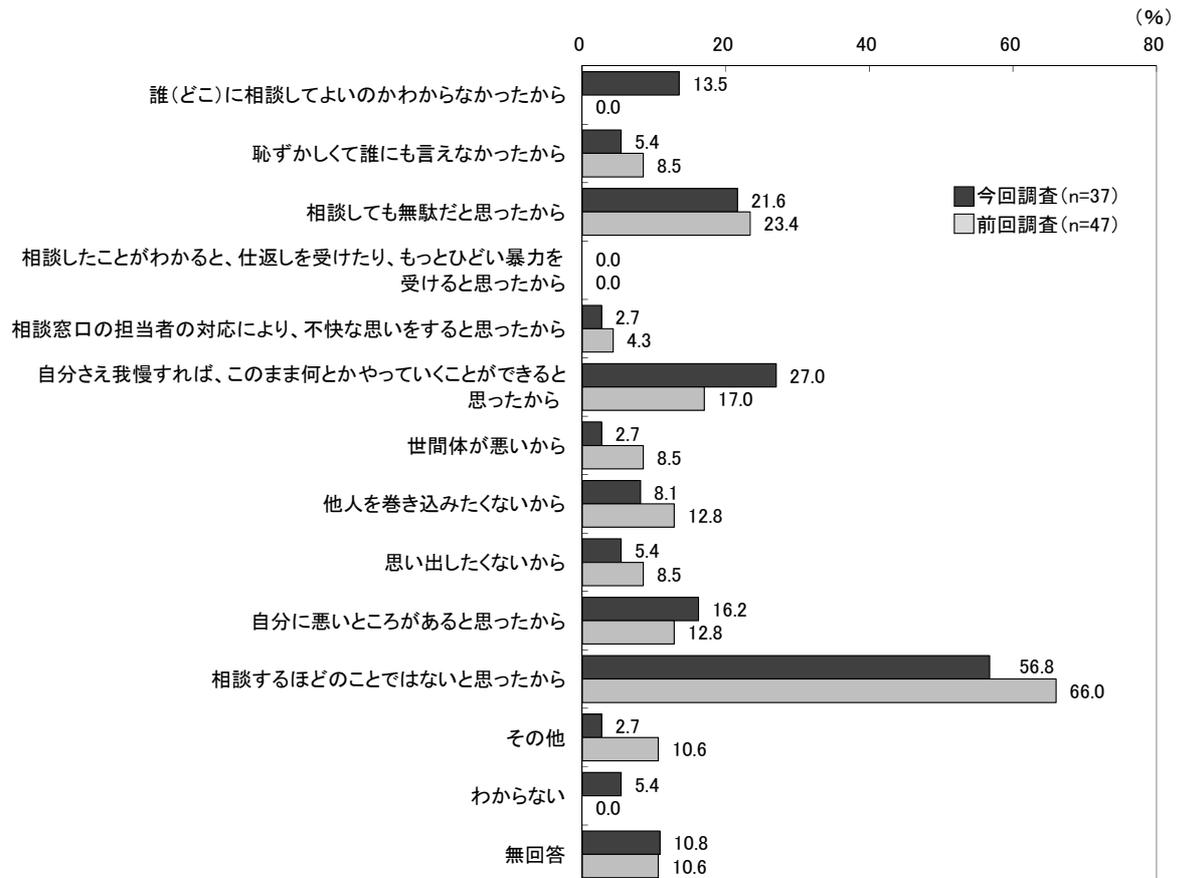


図 73 暴力を受けた時に相談しなかった理由（前回調査との比較、男性）



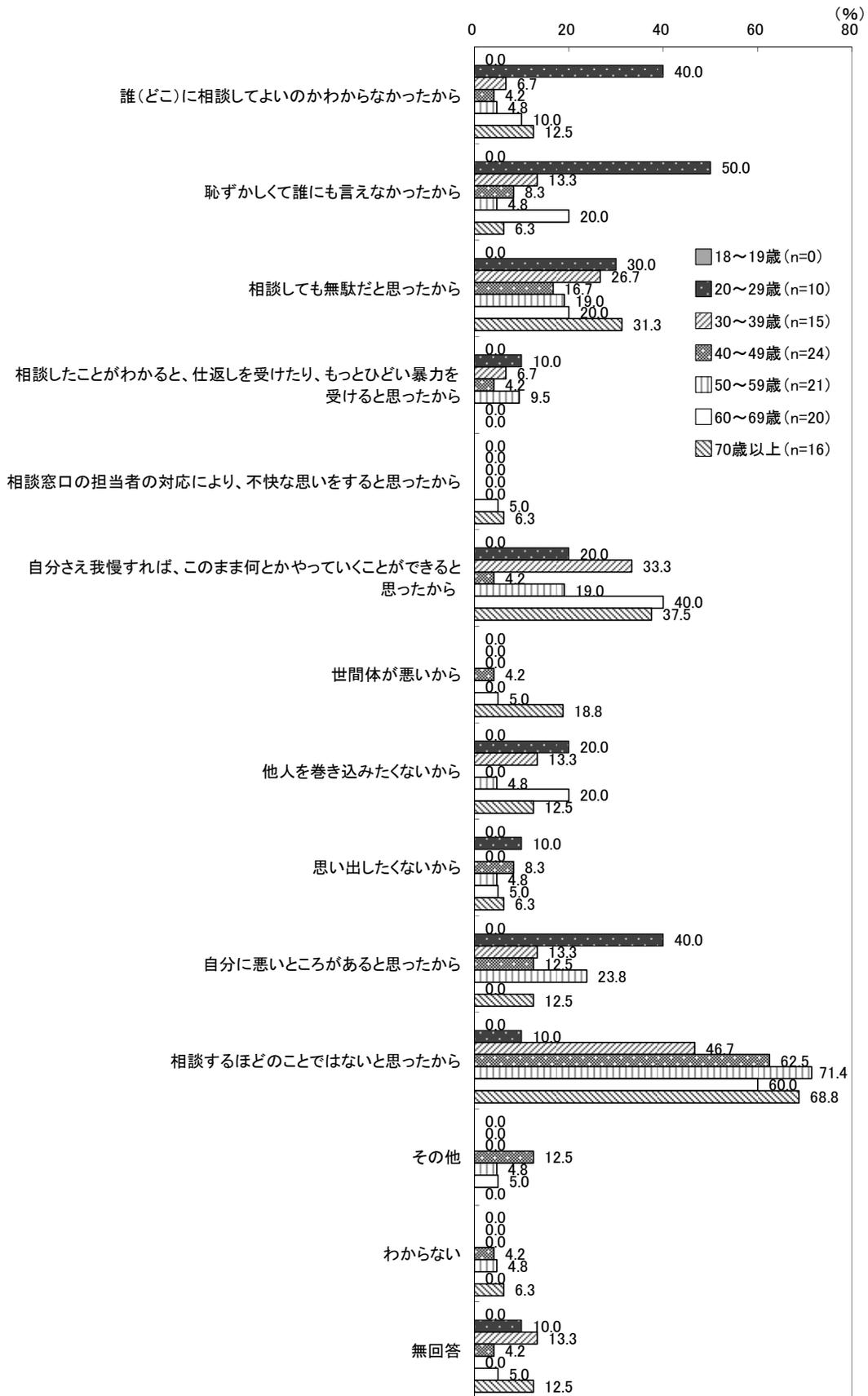
■前回調査（平成 22 年度）との比較

全体について、前回調査と比べ回答傾向に大きな違いはみられません。

女性は、「自分に悪いところがあると思ったから」が 23.8%から 14.5%と 9.3 ポイント減少しています。

男性は、「相談するほどのことではないと思ったから」が 66.0%から 56.8%と 9.2 ポイント減少し、一方「自分さえ我慢すれば、このまま何とかやっていくことができると思ったから」が 17.0%から 27.0%と 10 ポイント増加し、また、「誰（どこ）に相談してよいのかわからなかったから」が 13.5 ポイント増加しています。

図 74 暴力を受けた時に相談しなかった理由（年齢別）



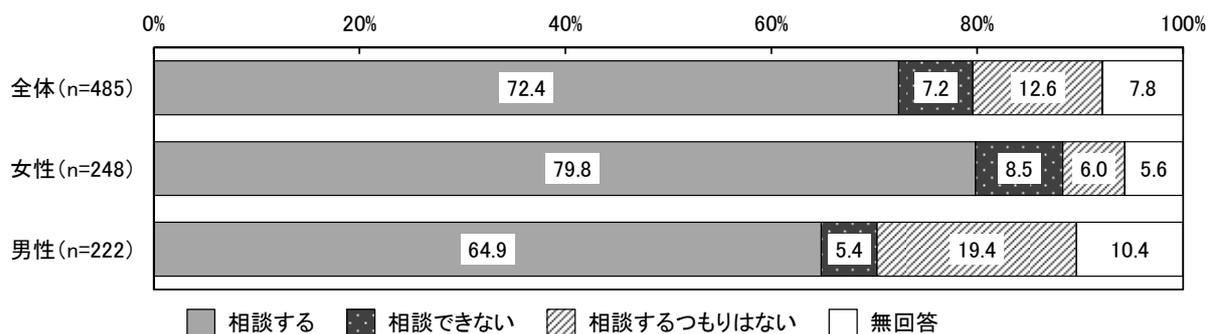
■年齢別の回答傾向

年齢別にみると、40歳代以上は、「相談するほどのことではないと思ったから」が60～70%で他の年代と比べ多くなっています。また、60歳代及び70歳以上は、「自分さえ我慢すれば、このまま何とかやっていくことができると思ったから」が40%程度で他の年代と比べ多くなっています。

(7) 暴力を受けた経験がない場合で、もし暴力を受けた場合に相談するか

問 14-4 問 14 (①から⑫まで) の答えで、すべて「まったくない」に○をつけた方におたずねします。もし、夫や妻（事実婚や別居中、離婚後を含む）、婚約者、恋人など、親密な関係の相手から問 14 のような内容の暴力（ドメスティック・バイオレンス（DV））を受けたとき、誰かに相談しますか。（あてはまる番号1つだけに○）

図 75 暴力を受けた経験がない場合で、もし暴力を受けた場合に相談するか
(全体・男女別)



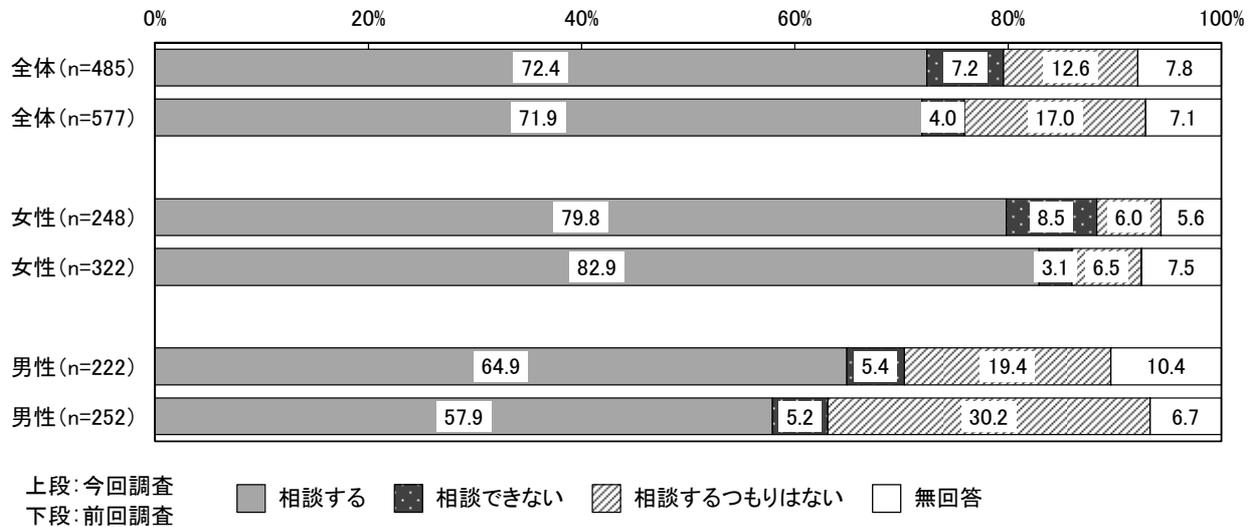
■全体の回答傾向

暴力を受けた経験がない場合で、もし暴力を受けた場合の相談の有無について、「相談する」が72.4%で最も多くなっています。一方、「相談するつもりはない」が12.6%、「相談できない」が7.2%となっています。

■男女別の回答傾向

男女別にみると、女性は「相談する」が79.8%で男性（64.9%）を14.9ポイント上回っています。一方、男性は「相談するつもりはない」が19.4%で女性（6.0%）を13.4ポイント上回っています。

図 76 暴力を受けた経験がない場合で、もし暴力を受けた場合に相談するか
(前回調査との比較)

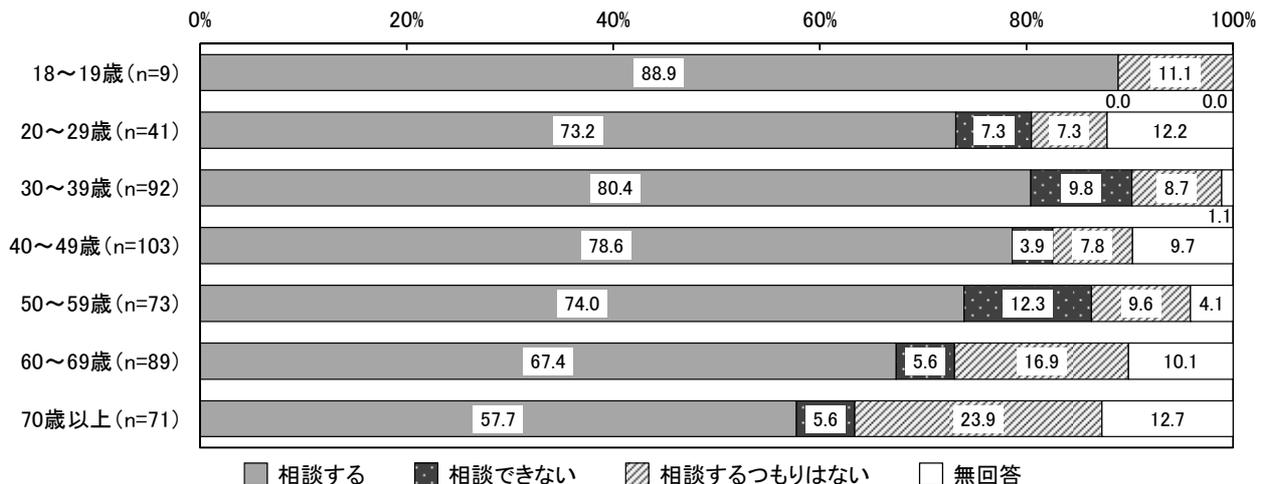


■ 前回調査（平成 22 年度）との比較

全体について、前回調査と比べると、「相談するつもりはない」が 17.0%から 12.6%とやや減少しています。

女性は「相談する」がやや減少する一方、「相談できない」が 3.1%から 8.5%と 5.4 ポイント増加しています。男性は、「相談するつもりはない」が 30.2%から 19.4%と 10.8 ポイント減少する一方、「相談する」が 57.9%から 64.9%と 7.0 ポイント増加しています。

図 77 暴力を受けた経験がない場合で、もし暴力を受けた場合に相談するか（年齢別）



■ 年齢別の回答傾向

年齢別にみると、おおむね年齢が低いほど「相談する」が多い傾向がみられます。また、60歳代及び70歳以上は「相談するつもりはない」が15%を超え、他の年代より多くなっています。